

32-B88
 金船社發行

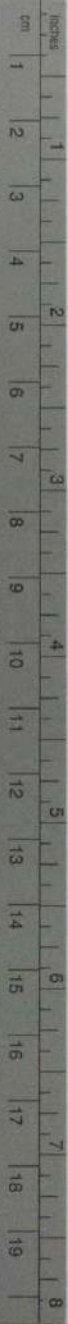
金の星

第四卷 八月八日 第八号

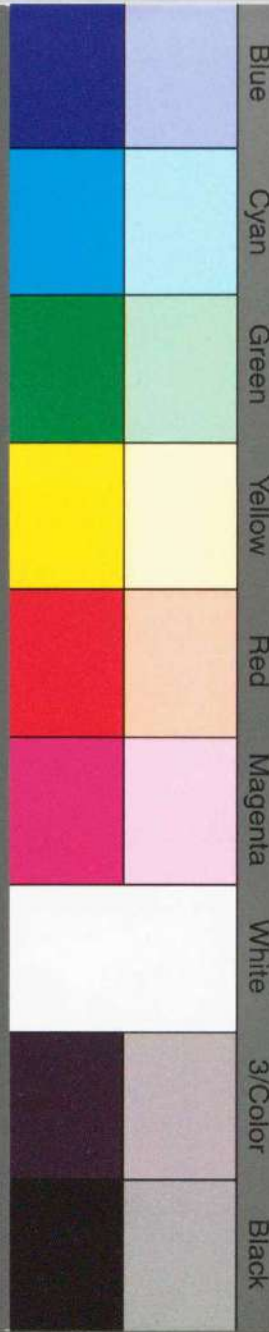
大正十一年七月六日印刷 大正十一年八月二日發行



Copyright © 1922 by Kinokuniya Company Ltd.



Kodak Color Control Patches



Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

飲 滋
料 強



カ ル ピ ス

一 壇 …… 強 壯	一 杯 …… 爽 快	一 滴 …… 美 味
------------------------	------------------------	------------------------

販賣所・酒店・食品店・藥店
製造元・東京ラクトー株式会社

◇ 皆様へ急告 ◇

某社から「金の船」といふ雑誌が出ましたやうですが、金の船社發行の「金の星」とは全く關係がありません。勿論以前の「金の船」とも内容の全然違つたものです。童話、童謡、挿畫、作曲、その他御覽の通りです。事情を知つてをられる作家は一人も關係いたしてをりません。皆様がお迷ひになりませんやう、御注意申し上げます。

金の星
發行所 金の船社

エキストラ一萬年筆特價提供

◆エキストラーニ十二號

押出式又はムーア式と云ふペン先出入は挿出式と前記同様ニホナイト軸正十四金ペン付
 市場価格金五六圓のもの(現圖通り) 大特價金貳圓九拾五錢 正十八金製裝飾金輪二個付 大特價金參圓八拾五錢



▼エキストラーニ二十一號

安全装置インク止式正十四金ペン付エホナイト軸破損防備純銀廣巾線付
 市場価格四圓内外の物(現圖通り) 大特價金貳圓也



▼エキストラーニ二十三號

安全装置インク止式正十四金製輸付エホナイト軸正十四金ペン付軸徑二分七厘丸
 市場価格金參圓内外の物(現圖通り) 大特價金壹圓四拾錢



即賣店位置
 は第二會場正門通
 池の端中段に有之
 候間何卒乞御一覽

四十餘種類
 目録進呈
東京平和記念博覽會に出品即賣店設置
 致候に付御參觀の際は何卒
 御高覽御愛顧の程願上候

天下の人氣エキストラー萬年筆に集る
 一、本品は御買上の上貨意に適合せざる時は即時返品次第他品と交換若しくは代金返金致します
 二、本廣告と現品と相違の節は如何なる制裁も甘受す
 三、弊堂販賣のエキストラー萬年筆は使用中故障若しくは自然破損を生じたる時は無料修理提供す
 殊にエキストラー萬年筆は使用具合の能きこと内外品中第一の地を抜けるものである(前記金註文は送料弊所負擔す)○代金引替は送料高價につき
 一本拾錢増○クリップ無代添付す
 (御注文若しくは御紹介の節は) 本誌を見し御書添を乞ふ)

萬年筆本舗
 東京市小石川區原町一四七番
 電話東京三八〇一〇番
 小石川四四六番

明盛進堂製作所

藍印レコード

環女史は日本の誇り
 此レコードはニツボノホンの誇り
 そして藝術的匂ひの高い
 此レコードをお備へになることは
 貴様各御家庭の誇りで
 なければなりません

信用ある蓄音器店は何れも
 藍印レコードの専賣店なり

戀はやさしい野邊の花よ
 PIANTO ANTICO
 伊太利ナポリ民謡 サンタルチア
 O SOLE MIO
 シューベルトの子守歌
 DILLE TU ROSA

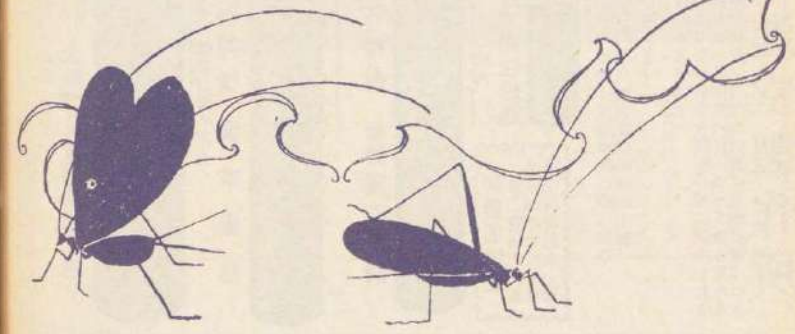
日本基本音器商會

上の通り第一回を
 賣り出しました所
 註文が殺到して未
 だに製造が間に合
 ひません、近々左
 の通り第二回を賣
 出します、賣切れ
 の内早く御注文下
 さい、

お蝶夫人ホーム
 ホーム スキート ホーム
 アイラブユー (琴唄)
 アイラブユー (琴唄)
 白く月日本橋
 お江戸日本橋

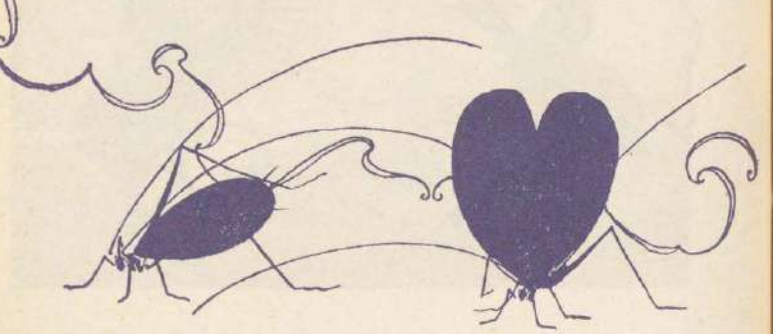
目次

海も輝く人も輝く(表紙 原色版)……………岡本 歸一
 あなたを忘れません(白粉 三色版)……………野口雨情
 歸る燕(曲譜)……………小島政二郎
 づしんくごう(童話)……………霜田史光
 偽浦島(童話)……………網野 まんまる
 夕焼(推薦童話)……………岡本 歸一
 占の名人(輪ばなし)……………藤澤 衛彦
 雨蛙(傳説)……………窪田 空穂
 義經の奥州下り(史譚)……………畑 耕一
 辨慶に遇ふまで……………宮澤 たけ
 ひとりうち九之助(童話)……………丹野 貞男
 しやくやく……………中 實
 鈴虫と蟻……………田 實
 からく山後日譚(童話)……………田 實



堤の機はいひました(童話詩)……………沖野岩三郎
 金の冠を冠った王子(童話)……………林 信一
 法螺くらべ(童話)……………志村 照子
 肴屋と狐(推薦童話)……………乗附 康明
 家なき子(名作童話)……………三宅 房子
 楡の花(童話)……………三人見 東明
 春の山(幼年詩)……………若山 牧水選
 平和博の花火(綴り方)……………西 編輯部選
 つばめのす(自由書)……………山本 鼎選
 ゆめのはし(童話)……………野口 雨情選
 いたづらなリス(少女自作童話)……………梅 田 龍子
 かこの雀(少年自作童話)……………嶋 田 信一
 金の星(講演部の報告)……………八六
 通 信……………八六

長篇物語 父戀し(第七回)……………沖野岩三郎
 熊田先生





あなたを忘れません 岡本 歸一

私は、アルチユール少年のところへ行きまし
た。そして、両手でしつかりアルチユールの瘦
せた手を握りしめました。アルチユールは目に
涙を一ばいたためてゐました。

私はミリガン夫人にもお別れを告げました。

「奥さん。私は、決してあなたの御恩を忘れま
せん。」

(「家なき子」の六十七頁を御覧下さい。)



水谷 先生
著 新 生

詩物語

◎少女畫報に毎月連載して女學生諸嬢から空前の歡迎を得つゝ有る「詩物語」「詩日記」に
新に數篇を加へた二十餘篇から成る本書が、愛讀書の撰定に苦みつゝ有る諸嬢の渴仰を本
書一卷に集めたるは誠に必然のことと有ります。諸嬢の美しき血と清き涙は本書によりて
益々純化されむことを祈る。

中形版
上製頗美
定價一圓
送料十錢
送金料
二十錢

野口 先生
著 生 先

童謠作法問答

◎本書は童謠について宛も親が子に、ものを教ふるが如くに親切丁寧
に説き明してありますから、どなたが讀んでもほんたうによく解りま
す。本文約二百頁に近い全部が童謠の初一步から詳しく説明して作り
方が書いてありますから是非一度御らん下さい。
(第八版が出来ました) 定價金一圓 送料金十錢△

▼苟も童謠を口にする人で、またこの本を讀まない方が有るでし
やうか？ おそらく吾が東京には有りますまい！

交 蘭 社 發 行

東京市神田區南保町六十番
振替東京四〇二七九

きかは繪の賣發社蘭交

岡本歸一先生執筆



交蘭社

東京市神田區南神保町十六
振替東京 四〇二七九番

きかは繪伽お

第一輯

青い鳥
メイテルリンク作の童話劇「青い鳥」を先生が特に入念に繪はがきに書き現したる典雅美麗なる空前の繪はがきであります。

きかは繪術藝

第二輯

王様の馬
西條八十先生の童話「王様の馬」を繪葉書に書き直し、それに、音譜を添へたる新らしい試みの詩、繪、作曲を具備した遺憾なき繪はがきです。

(各組定價金二十五錢・送料二錢以下續いて來す)

(金)

世界文豪童話集

少年少女の生命なり

童話は大人の常識にして

三浦 關造氏編

トルストイ童話

森川憲之助氏編

イソップ童話

藤森秀夫氏編

ワイルド童話

森川憲之助氏編

グリム童話

森川憲之助氏編

アンデルゼン童話

西川 勉氏編

メエテルリンク童話

○各編共定價金一圓卅錢 送料各金十二錢
高尚で面白く子供が讀んでも大人が讀んでも爲めになる本で家庭の人にも教育家も是非讀まねばならぬ童話を集めてあります。

山村春鳥氏著
童話萬物の世界
定價金十八錢 送料十二錢

石丸喜世子著
夢占山
定價金十二錢 送料十二錢

今村邦子著
笛を吹く天人
定價金十二錢 送料十二錢

小寺菊子著
豆人形
定價金十二錢 送料十二錢

井上芳子著
魔法の鏡
定價金十二錢 送料十二錢

世界民謡研究會編
世界民謡集
定價金十二錢 送料十二錢

渡平氏著
世界童話劇選集
定價金十八錢 送料十二錢

三浦關造氏著
基督の誘惑
定價金一圓 送料八錢

東京市神田區
五ノ一町幸内
眞珠書房
電話銀座四座〇九六番
東京東區三本五二四番

(金)

白眉社の出版音楽書

野口雨情先生歌、中山晋平先生曲
 新童謡ポチの學校 一冊三十錢
 野口雨情先生歌、本居、中山先生作曲
 故郷の唄 一冊二十錢
 附、旅人の唄 送二錢
 土屋平三郎先生曲
 山鳩 一冊三十錢
 佐々紅華先生曲
 童謡唱歌 一冊三十錢
 (1)はだか蟲(4)鋤 送二錢
 (2)牧場の兎(5)茶目子の一日 送二錢
 (3)青い鳥(6)穂ちやんの繪本 送二錢
 山本芳樹先生曲
 創作曲譜 一冊二十錢
 (1)雲の行方 (3)春のなげき
 (2)旅鳥 (4)ねんねの唄

本居長世先生曲
 新民謠 各一冊三十錢
 (1)さすらいの風の歌(5)關の夕ざれ 送二錢
 (2)夕潮(6)白月
 (3)豊作 歌(7)咲いた櫻
 (4)別後(8)碓の音
 春柳振作先生著
 ハーモニカ速成 一冊三十五錢
 ハーモニカ曲粹 一冊六十錢
 ハーモニカ模範樂譜 一冊八十錢
 白眉社編
 ヴァイオリン曲粹 第一、二、三、各五十錢
 マンドリン曲粹 第一、二、三、各五十錢
 ヴァイン日本名曲粹 第一編 一冊七十錢
 菊地盛太郎先生編
 二十五進行曲 一冊八十錢

音樂講話叢書
 (第九編迄既刊全三十冊完成)
 第一編 樂譜の知識 送五十錢
 第二編 聲樂研究法 送四十錢
 第三編 オペラの話 送四十錢
 第四編 ピアノの習ひ方 送四十錢
 第五編 オーケストラの話 送四十錢
 第六編 音樂解説辭典 一冊六十錢
 第七編 音樂人名辭典 一冊六十錢
 第八編 音樂の聽き方 送四十錢
 第九編 ヴァイオリンの習ひ方 送四十錢

東京市外市京東
 目下外市京東
 地番八六四
 社版出眉白
 京番八九五四
 東替振
 九五四
 八

加藤まささを氏新著

抒情
 小詩集

涙

壺

最新刊 畫家としてのこの著者の作
 遠な音樂である。その繊細な線と色彩と
 を、更にまた氏一流の情趣豊かな言葉で
 て飾つたものがこの抒情小詩集である。以
 『春の曙の落しこぼる、さ、さ、かな真珠
 のやうな若き日の涙』二度と得ること
 の能きないその寶をむげに棄て去る言は
 惜しい。永い間に汲みためたこれは言は
 は私の涙意である。』と著者は、この集
 の序文の一節に述べてゐる。この涙壺に
 秘められた潔らかな涙の雫は、いち早く、何
 人の心に沁みて、さめんと流れること
 であらうか？……と流れること
 ことに、羊革の、見るからに美しい表装
 から、収むるところの三十五篇の小曲、
 四枚の原版、八枚の二色版の挿畫は勿
 論、奥の徹に至るまで、著者一流の渾然た
 る藝術品である點は、何人の模倣をも許
 さざる出版界未曾有の珠玉である。

定價金貳圓
 送料金拾貳錢

加藤まささを氏著 第六版 定價金貳圓五十錢
 送料金拾八錢

童謡合歡の搖籃
 日本幼稚園協會編 加藤まさ 定價金參圓半錢
 送料金拾八錢

幼兒に聞かせるお話
 讀賣新聞社編 加藤まさを氏 近刊

新童話傑作選集 第一 蟲眼鏡
 輯 外十九篇

東京市日本橋區大傳馬町二丁目
 内田老鶴園
 振替東京壹貳四六番
 電話浪花壹參參五番

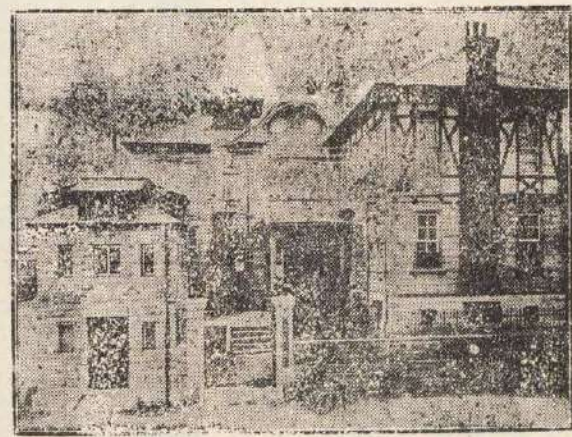
◆◆◆◆
 特色別上製本函入
 用紙舶來版四枚
 二色版八枚挿入

天下の青年は
何故に争ふて
大日本國民中學會に入會する乎」

講義が新しいから
會費が廉いから
指導が良いから
學制が正しいから
基礎が固いから
講師が善いから
卒業が早いから
成功が慥だから

會長 尾崎行雄

學監 文學博士 遠藤隆吉
新渡戸博士 山内繁隆
井上博士 三宅博士
岡田前文部大臣 博士



◎創立以來二十年 記念大特典提供 入會の絶好機

講義録見本つき 規則書無料進呈

大日本國民中學會

振替東京四二〇〇 電話 神田三〇〇〇三 神田三〇〇〇二 四

一人前の男となるには
どうしても中等教育を受けなければ
いけない。中等教育の學力のない者
はどうしても生存競争の勝利者たる
ことは六ヶしい。併し家庭の事情で
中學に入れぬ者も決して失望するに
は及ばない、中學校に行かずに中學
卒業同様の學問をする方法がチャン
と出来てゐる。それは創立以來二十
年の古い経験のある講義録で有名な
大日本國民中學會の通信教授法であ
る。

小學優等文集

第一輯第二輯發行 定價各金十四錢送料各金四錢

露
東京市 鮫島花子
青柳珠六
天からふつたか、
地からわいたか、
ダイヤモンドが、
草の上。
一つほしさに、
ちかづけば、
さつとふきくる、
風のため、
ころ／＼ころと、
おつこちた。
(第二輯より)

▲本書は全國各小學校から送つて頂
いた優等文の中から更に優等を選ん
だもので傑作中の傑作集です。

第一輯	第二輯
第一部 四季の景物	第一部 動植及び器具
第二部 人物	第二部 經驗と感想
第三部 山水名所	第三部 童謡と詩歌
第四部 學校生活	第四部 童話と戯曲

▲以上何れも尋常四、五、六學年の男
女生徒の作品ですから、文の手本と
しても課外讀物としても、頗る面白
い本です。

東京市東區幸町一八番五 金港堂書籍株式會社發行

(金)



歸る燕

木居長世作曲

つばめのこどもがかへてゆく
 おつかさんとつれられてかゝてゆく
 オペラハウスおみやげにやませう
 らいねんおつかさんとまたおいで
 おつかさんとふたりでまたおいで

そこばれな君諸者讀の[星の金]
 !うせでるさ下み讀おを[書本]

童話集

よわい子供

ソログラフ作 ◇ 原 秀雄 譯 ◇ 最新刊

四六版上製美本
 石版口繪多數入
 挿入金壹圓
 送料六錢

御空の星は多いけれど金の星はたつた一つ。めまぐるしく店に並ぶ数ある物語の本の中、日昇國の勇ましい少年たちの心躍らす本はたつたこの「一太郎物語」一つ……

御空の星は多いけれど金の星はたつた一つ。きらびやかなよそひをしたる童話の本はどんなにあらうとも青い木蔭に涼風受けて夢の國に遊ぶよに愉快によめる本はたつたこの「よわい子供」一つ……

天覽 台覽

一太郎物語

橋本春陵先生著 ◆ 大好評第四版出來

四六版上製美本
 原色版挿寫真版挿入
 定價五十錢
 送料六錢

(田 神 話 電) 行發堂文崇 三町保神表田神京東
 (八 六 四) 番〇三九七東京東替振

歸る燕

野口雨情

燕の子供が

歸つてゆく

お母さんに 連れられて



歸つてゆく

オペラパツク おみやげに

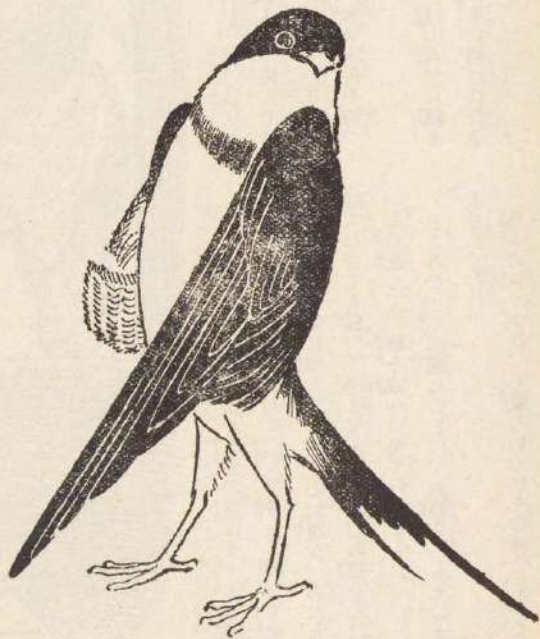
やりませう

來年 お母さんに

またおいで

お母さんご ふたりで

またおいで



うごんじづんじづ

小島政二郎



昔、オランダの或村に、娘二人と息子一人とを持つたお婆さんが住んでゐました。お婆さんは、村から一里ばかり離れた谷川の傍に、水車小屋を持つてゐました。

或日、二人の娘は、村の人から頼まれた小麦を持つて、水車に掛けに行きました。

いつもなら、お星さまが夕方の空にキラ／＼瞬く頃までには、用をすまして二人で仲よく歸つて来ますのに、その日に限つて、どうした譯か、あたりが暗くなつても歸つて来ませんでした。お婆さんは大へん心配して、娘を迎へて行きました。

ところが、不思議なことに、お婆さんもそのまゝ歸つて来ませんでした。

息子のカリフは、心配しいしいその夜はまんじりともしませんでした。

に明かしました。

明るくなる日になるのを待つて、カリフは大いそぎで谷川の水車小屋へ行つて見ました。

ところが、中には誰も居ませんでした。

すると、どこからか、づしん／＼といふ地響かして、カリフの體が床から飛びあがるかと思はれるほど激しく小屋が搖れはじめました。カリフはびつくりして、何を考へる暇もなく、あわて、小屋の隅の大きな水甕の蔭へ身を隠しました。

やがて、地響は小屋の戸口のところまで来てとまりました。と、ガラと小屋の戸が明いて、體ちゆうに熊のやうな毛の生えた見あげるやうな大男が、舌舐めすりをしながらぬつと中へ這入つて来ました。そして「フン／＼」としきりに匂を嗅きながら、

「有り難い、また人間の匂がするぞ。」と云つて、カリフの隠れてゐる甕の方へ近づいて来ました。

カリフは思はずガタ／＼身顛ひがしました。それと同時に、「こいつだな、姉さんとお婆さんとをさらつて行つたのは……。」と思ひました。

カリフは、どうかして逃れたいと思つていろ／＼考へた末に、細い聲で

「ミイ／＼……。」と、山羊の啼き聲の真似をして見ました。

すると、大男は、どうしたのか、急にそこへ立ちどまつて、「なアんだ、人間かと思つたら、山羊の畜生か。山羊ぢやア食べてもつまらない。山羊の肉は堅くつて臭いからな。」と云ひながら、足早に小屋を出て行つてしまひました。

カリフはホツと胸を撫でおろしました。しかし、お婆さんや姉さん達は、もう昨日のうちに、あの男に食べられてしまつたのかと思ふと、悲しくつて／＼溜まりませんでした。

一人でしく／＼泣いてゐると、

「坊ちゃん／＼、さうお泣きなされるな。お婆さんも姉さん達も、まだ食べられてしまやアしませんよ。」といふ者がありました。

見ると、それは自分を隠してくれた大きな水甕が口を利いてゐるのです。

カリフは思はず立ちあがつて、

「エッ、そりやア本當。——本當に生きてゐるの。ちやア今

どこにゐるか知つてよ。」

「知つてゐますとも……。今こゝへ来たあの犬男ね、あいつの住んでゐる洞穴に三人とも虜にされて入らつしやるんですよ。」

さう聞いたカリフは、恐れ返らずにはゐられませんでした。なぜと云つて、自分のやうな小さな子供が、あんな化けもの



のやうな犬男に勝つてようとは思へませんでしたから……。

しかし、水虺は、

「坊ちゃん、そんなにガツカリなさらなくなつたつて大丈夫ですよ。私が加勢をして上げますから、これからすぐに三人を助けに入らつしやい。」と勵ましてくれました。

「だけど、僕力がないもの……。」

「なあに、力なんかなくつたつて、入丈夫ですよ。いくら力があつても、あの犬男に叶ふ人間は恐く世界中に一人もゐるまい。あいつを負かすものは、この世の中にたつた一つしかないのです。それは、あすこの釘にかゝつてゐる山羊の角です。あれで一突き突けば、犬男は忽ち死んでしまひます。その證據には、あなたがさつきもう少いで見つけられさうになつた時、ミイ／＼と山羊の啼き聲の眞似をしたでせう。さうしたら、あの犬男の奴め、顔の色をかへて立ち凍んでしまつたぢやありませんか。そして、山羊の肉は堅くつて臭いと云つて、さつさと出て行つてしまつたぢやありませんか。あれが何よりもいゝ證據です。さあ、早くあの山羊の角を持つて私の跡からついて入らつしやい。私は道もよく知つてゐ

ますから……。」

かう云つて、水虺はドン／＼先に立つて歩き出しました。しばらく行くと、二人の足許から、ふいに

「坊ちゃん／＼、私も悪魔退治に連れて行つて下さい。」といふ者がありました。

見ると、それは上の姉さんが穿いてゐた木靴の片方でした。「おや、お前はこんなところに落ちてゐたのかい。いゝとも、どうか一しよに行つておくれ。」

かうカリフが云ひますと、木靴は大よろこびで、

「では、これから先は水虺さんに代つて私が御案内いたしませう。兄弟の木靴が行つた先は、私がよく知つてをりますから……。」と、先に立つて道案内してくれました。

また暫く行くと、今度は道にころがつてゐた長い杖が、
「坊ちゃん／＼、私も悪魔退治に連れて行つて下さい。」と云ひました。

見ると、それはきのふお婆さんが突いて出た杖でした。

「やあ、お前はこんなところにゐたのかい。さあ／＼一しよに行つておくれ。」

杖は大よろこびで、ビヨン／＼一本足で飛びながら跡に附いて來ました。

また暫く行くと、今度は、下の姉さんがしじゆう締めめてゐた帯が、

「坊ちゃん／＼、私も悪魔退治に連れて行つて下さい。」と云ひました。

「さあ／＼、一人でも仲間の多い方が氣が強くていゝ。しかし、お前は海月のやうに骨なしたが、それでもちやんと歩けるかい。」

かうカリフが云ひますと、

「なあに、私は歩く代りにかうしてお供をいたします。」と云ひながら、跡から附いて來た杖へいきなりくる／＼と巻きつきました。

すると、水虺は

「坊ちゃん、これだけお供が揃へば、もう道に迷ふ心配はありません。では、私だけお先に失禮いたします。」と云ふが早いか、ふはりと宙に浮んだかと思ふと、そのまゝ向うへ、空を飛んで行つてしまひました。

道はだんく、険しくなつて来ました。四人はだんく、汗を流しながら、一生懸命に山を昇つて行きました。すると、一ばん先に歩いてゐた木靴が、急に立ちどまつて

「坊ちゃん、あすこに見える洞穴が大男の住みかですよ。」と指さして教へてくれました。成程耳を澄ますとこうくうといふ大男の鼻息が聞えました



四人はそつと足音を忍ばせて洞穴の口へ忍寄りました。見ると、大男はこちらを背にして、しきりに爐端で火を起してゐました。鼻息だと思つたのは、實は火を吹く音でした。爐の向うには、お婆さんと二人の姉さんが、荒縄でぐるぐる巻きに結びつけられてしくく泣いてゐました。

四人は足音のしない様にこつそり洞穴の中へ忍び入りました。そしてじりじりと大男の後へ忍び寄りました。大男はなんにも知らずに、一生懸命にふうふう火を吹いてゐました。

その隙を窺つて、カリフはいきなり「お婆さんと姉さんとの敵討ちだ。思ひ知れ。」と云ひながらふいに、うしろから山羊の角で突きまゝりました。

すると、流石に大男もヒラリと體をかはしながら、「なにを子供のくせに生意氣な……。」と云ひながら、いきなり大手を廣げて掴みかゝつて来ました。

そのとたんに、側の水甕が、どこからともなく飛んで来て、いきなりガバと大男の頭へ被さつてしまひました。それと同時に、今まで杖に巻きついてゐた帯が、スル／＼と解けて大男に這ひ寄つたかと思ふと、やにはに手足へくるくと絡みつきました。そして蛇のやうにキリ／＼と締めつけました。

すると、その際につけ込んで、今度は杖が躍りあがつたか



「お婆さんと姉さんとを苦しめた罰だ。思ひ知つたか。」と云ひながら、持つて来た山羊の角で、大男の横腹のあたりを一突きグサと突きさしました。大男は手足をもがきながら、そのまゝ苦しむ死に死んでしまひました。

お婆さんと姉さん達二人とが、カリフの手を取つてどんなに喜んだか、それどころに晝くまでもありますまい。やがて、カリフのした事は村ちゆうの大評判になりました。そればかりか、しまひには、王さまのお耳にまで這入つて、大層お褒めのお言葉をいたゞいたといふことです。

(をばり)



島 浦 偽

光 史 田 霜

年老いた漁師の五平の家へ、或日一人の若者が訪ねて参りました。

「五平さんはお在ですか。」と云ふ聲に、

「はい、誰方でございますか。」と云つて白髪の、腰の曲つた五平はよほくと戸口に出て來ました。それを見た若者は、こんなお爺さんには用はないと云ふ風に、

「あの、五平さんに一寸御目にかゝりたいのですが。」

それを聞いた五平はさも不思議さうにその若者を見てゐましたが、

「私がおの五平なんですよ。何か御用ですか。」

「冗談を云つちや困りますよ、五平さんは私位な若者ですよ。」

若者は揶揄はれてゐると思つて不平さうに云ひますと、お爺さんの五平は却つて驚いたやうに、

「これは妙な話だ。私がおの眞物の五平に違ひないんだが……は、ア、あなたは俺の吾作と間違へてる

るんですね。」

「いゝえ、どうして／＼間違へなぞするのですか。五平さんは私の友達で、毎日のやうに一緒に漁に行つたものですよ。」

「はてな、これは怪しいぞ。ではあなたは一體誰方なんですか。」

「私は浦島太郎と云ふものです。」

「浦島太郎……浦島太郎……何んだか聞いたことのあるやうな名前だな。」

五平老人はしきりに首をひねつて考へてゐましたが、やつと思ひ出したらしく、

「さう、さう、浦島太郎さんは私の若い時の仲よしの友達で、大變氣立てのいゝ人だつた。所がね、お前さん、太郎さんは可哀さうに龜にだまされてとう／＼海へ沈んでしまひましたよ。あなたはよく太郎さんを知つてゐますね。」

「知つてゐる所ちやありませんよ、その浦島太郎が私なんですよ。」

「お前さんが本當の太郎さんかね。」

「さういふお前さんが本當の五平さんかね。」

二人はあまりに意外なので吃驚してしまひました。それもその筈、浦島太郎が龍宮へ行つて乙姫さまの歡待を受けてゐる間に、陸の方では五十年も年が経つてしまつたのです。所が海の龍宮には「年」と云ふものがないと見えて太郎は昔のままの二十ばかりの若者だつたのです。譯を聞いて太郎は年月の経つのが速いのに驚きましたが、それよりも五平老人の驚き方は一通りではありません。

「へえ、お前さんは五十年も龍宮にゐたんですか。」

「私はまだ龍宮へ行つて七日位しか経たないと思つてゐましたら、へえ、もう五十年も経つてゐるのですかね。」

「何しろ、昔の仲よし友達だ。お前さんの歸つて來たことは嬉しい。」

と云つて、五平は種々と御馳走をこしらへて太郎を歡待ました。その内に五平の伴の吾作も歸つて來ました。見ると七十ばかりである筈の太郎よりすつと年とつてゐるやうです。太郎はこの世へ歸つて來て見る物聞く者皆違つてゐるので、不思議に思ひながらも、自分が龜を助けたことから、その龜に

連れられて龍宮へ行つたこと、その龍宮の立派なことや美しい乙姫さまに大變な款待をされた事など詳しく話しました。それを聞いた五平は、世にも不思議なことがあるものだと感心しましたが、殊に若者の吾作は太郎が羨ましくなりませんでした。

太郎は五平に別れて自分の家に歸りました。すると驚いたことには、自分の家を見る影もないほど荒れはて、屋根は傾き柱は腐れ、草はぼう／＼と生えてゐます。これではとても住めないと思ふので、近所の人を頼んで、漸く手入れをして住むことになりました。

翌日太郎は村中の人に久し振りで歸つて来たから、その御挨拶のしるしに少しばかりの御馳走をするから来て下さいと云つて廻りました。村の人は誰一人太郎の歸つたことや、その昔のまゝの若いことに驚かないものはありませんでした。そして翌日太郎の家に招かれてゆくことを皆喜んで承知いたしました。

かうして太郎が昔の若者で歸つて来たことに吃驚した村の人達は、翌日太郎の家へ招かれて行つて二度吃驚いたしました。それからと云ふものは、吾作は稼業の流もそつちのけで毎日濱邊を歩き廻つて龜を探して歩きました。然し中々太郎を乗せて行つた龜には逢ひませんでした。

或日のことでした。吾作が濱を歩いてゐると、波打際に一匹の小さな龜が這つてゐました。吾作は早速訊ねました。「もしもし、龜さん、お前さんは昔、浦島太郎さんを龍宮へ連れて行つた龜さんではないかね。」その聲に龜は小さな首をヒョイと引つ返しましたが、またそろ／＼出して云ひました。

「逢ひますよ。」

「ではお前さんはその龜さんのゐる所を知つてゐるかね。」

「知りませんよ。」
龜はさも／＼と云つたやうにかう云つたまゝ、また海岸の中へ這入つて行つてしまひました。太郎はがっかりしましたが、これは龜共が知つてゐても知らぬ振をしてゐるかも知れないと思つたので、今度は一つ囁してやらうと考へました。暫らく濱を歩いてゐると、また一匹の龜に逢ひましたので、今度はかう訊ねました。

た。それは太郎が一夜のうちに五平老人と變らぬ程のお爺さんになつてゐるからです。それは、皆さんも御承知の通り、龍宮の乙姫さまから貰つた開けてはならぬ玉手箱を開けたかでした。太郎は村の人々の前で涙を流しながらそのことを話しました。そしてお終ひにかうつけ加へるのです。

「みんな夢でした。夢だから白い煙と一緒に私の若さも消えてしまつたのです。だけど、私はその夢を嘘だとは思ひません。これからはせめてその夢を思ひ出しながら送りませう。」
村の人達は太郎の云ふことがよくは解りませんでした。けれども、何にしても不思議なことだと珍らしがりました。

二

五平の伴の吾作はする分物好きな男でした。それで、太郎の龍宮へ行つた話を聞いて自分も行つて見たくなりませんでした。そのことを太郎に話してどうしたら行けるかと聞いて見ましたけれども、太郎はもう年寄りで昔のことははつきり覚えてゐないので、よくその道順なども話してくれません。仕方がないので、太郎を乗せて行つたと云ふ龜を探さうと決心しました。



「もしもし、龜さん、私は浦島太郎ですが、私を龍宮へ連れて行つて呉れた龜さんの居所を知りませんか。私は逢つてお禮を云ひたいのですかね。」
「あゝ、あなたが浦島太郎さんですが、その龜なら此處から一里ばかり北のトンガリ山の下の岩の間にゐる

すよ。」

龜はさう云つて海へ這入つてしまひました。吾作はそれを聞いて大層喜びました。まづ自分の計略がうまく當つたので、これからもこの手で嘯してやらうと考へました。そして急いでトンガリ山の下へ行つて、あちこちと岩の間を探しました。すると一つの穴がありまして、その中に一匹の龜がゐりました。吾作はこれに違ひないと思つたので、近よつて云ひました。

「龜さん、龜さん、先だつてはどうも有難う。お前さんのお蔭で龍宮を見物することが出来て本當に嬉しかつた。今日はそのお禮に來ましたよ。」

龜は浦島と聞いて穴から這ひ出しました。見ると普通の龜と大きさも變りがないので、吾作は、こんな小さな龜がどうして太郎さんに乗せて行つたのだらうと思ひました。

龜は吾作の顔を見て何んだか違ふやうだと思つたらしく、首を傾けて考へてゐました。すると吾作は、

「龜さん、何もそんなに不思議がらなくともいよ、矢つ張り私もな、陸へ歸つてきて汐風に吹かれたので、すつかり顔の色も黒くなつてしまつたのだよ。」

これで萬事は占めたものだと思つた。龜の背中へ飛び乗りました。龜はその徳海の中へ這入つてぐーつと水の中へ沈んでゆきました。吾作は水の中へ沈んで命が危いと思ひましたけれど、しつかり龜の背中へつかまつてゐますと、不思議にも平氣でゐられました。

そのうちに龜はだん／＼と泳いでゆきました。吾作を乗せた龜が泳いでゆく周囲には種々な魚や水草などがひら／＼してゐて、始めて海の底の景色を見る吾作には何一つ珍らしくないものはありませんでした。龜は途中で逢つた鱧にたのんで、太郎の來たことを龍宮へ前ぶれさせましたので、龜が龍宮の門へ着いた時には大勢の女官達が迎へに出てゐました。「浦島さんが歸つて來た。」「太郎さんが龜に乗つて來た。」と云ふ言葉はその女官達の口々に云はれて、皆は大喜びです。乙姫さまはそれを聞いてわざ／＼女官達と一緒に出迎へました。乙姫様の顔も嬉しきで、美しい上にも輝いてゐるやうでした。

吾作は龍宮の立派なのに驚きました。屋根は美しい貝殻で葺いてあるし、柱は珊瑚で出来てゐるし、壁は水晶で光つて

「おや、さうですか。私はまたすつかり變つてしまつたので見違へましたよ。」と龜はにこ／＼しながら云ひました。龜が見違へるのも道理、全つきり違つた人間なんですから。

「さて、龜さん、私は陸へ歸つて來ましたけれど、昔の友達は何んな年老になつてしまつてゐるし、話し相手もないので、もう／＼この陸が厭になつてしまひました。」

「さうでせう。龍宮にゐたことを考へちやア、とてもこんな世の中には馬鹿々々しくてゐられませんか。」

龜は吾作の云つたことに同情しましたので、吾作はすかさず、

「所で龜さん、もう一遍私を龍宮へ連れて行つてくれませんか。何んだか乙姫さまに逢ひたくなつたのですよ。」

これを聞いて、龜は首を縮めてクツクツクツと笑ひました。

「成程、ごもつともです。それではお連れ申ませう。さア私の背中へお乗んなさい。」

と云つたかと思ふと忽ち今迄小さかつた龜が人の乗れる位大きな龜になりました。吾作は吃驚しながらも大層喜んで

ゐました。吾作は女官達にわい／＼と取り巻かれて奥殿へ這入つてゆきました。だん／＼奥へ／＼と不思議にも水はなくなつてゐました。

吾作は此處でも顔形や色の黒いのが不思議に思はれて、疑を催しました。けれども、乙姫さまだけは何んともなく疑ひが解けぬと云つたやうな顔をしてゐましたので、吾作は安心させようとして陸へ歸つてからの話や、陸の上の變つた話などをしてごまかしてゐました。

そのうちに用意の御馳走が出ました。何しろ、貧乏人の吾作は今迄口に入れたことのないやうな珍らしい美味しい御馳走ばかりなので、思はず澤山食べてしまひました。するとお腹が張つてきて眠たくなりました。

吾作が眼を覺ました時、吾作は立派な寢床の中にある。錦の羽蒲團で、まるで雲の上にも寝てゐるやうな軟らかい、氣持でした。そして水晶の壁をすかして見ると外には澤山の光る魚が泳いでゐました。吾作はこんな魚さへま／＼見たこともありません。

「本宮に龍宮つて不思議な所だな。」と思はず獨り言を云ひますと、その聲が聞えたと見えて、扉を開けて乙姫さまが這入つて來ました。

「浦島さん、お眼覚めですか。」と云つて、乙姫さまは珊瑚で出来た椅子に坐り、かう申しました。

「浦島さん、私は少々お訊ねいたしたいことがあるのです。」



「はア、何んですか。」

「あなたはこの龍宮で一番の寶物は何ですか御存じですか。」乙姫さまは、吾作をどうも本物の浦島ではないやうに思はれましたので、試しに訊いて見たのです。さア、吾作は困つてしまひました。知つてゐますと云つたらよいか、知らないやうと云つたらよいか、若しそれによつて偽者だと云ふことが判つてしまつては大變だと、心の中は大びく／＼でした。

「さうですね。この前來た時に聞いたやうに思ひますが、陸へ行つた爲めにすつかり忘れてしまひました。」仕方がないので、あやふやな答へをしました。

「それではお目かけませう。」と云つて乙姫さまは出てゆきました。が、一つの立派な小箱を手に持つて來ました。それを開けると、中には拳ほどもある大きな眞珠がありまし



た。その眞珠には五色の雲がかゝつてゐて、其處からは五色の光が放つてゐました。吾作はその立派な寶物に驚いてしまひましたが、

「あゝ、これこれ、これでしたつけね。」と云ひました。

「えゝ、五色の眞珠つて云ふものですよ。これは龍宮での一番の寶物です。」

乙姫さまはさう云つて小箱の蓋をしました。そして傍に

あつた大きな戸籠の中へ改めてお納めになりました。

乙姫さまが出て行つたあとで、吾作はその五色の眞珠が欲しくなりました。そしていつまでもこんな處にゐると終ひには偽者だと云ふことがわかつてしまふかも知れない、今の中にあれを盗んで陸へ逃げて歸らうと思ひました。

其處で戸棚をこじ開けてその小箱を出し、懐中へ入れると急いで室を出し、廊下で飛び出しました。そして門の方へ駈けてゆきました。廊下で幾人もの女官に逢ひましたが、その度に吾作は、

「乙姫さまが急に病氣になつたから早く行つて見て下さい。」と申しました。女官達はそれを聞いて吾作のことは忘れて奥殿の方へ駈け出してゆきました。その間に吾作は門の處へ來ますと、龜が居眠りをしてゐました。

吾作はすぐに揺り起して、

「龜さん、龜さん、大變です。乙姫さまが急に病氣になりましたので、私はすぐに陸へ行つてよい薬を取つて來なければなりません。すぐに連れて行つて下さい。」と云ひました。龜はそれを聞いてすつかり暗されてしまひ「それは大變だ。」とばかりにすぐに吾作を背中に乗せて、これきりと云ふ力を出して泳ぎました。

暫らく海の底を泳いでゐた龜は、今度は水の上へ浮き上りました。

吾作はやれ嬉しやと思つて見ると、もう自分の住み慣れた村の濱がすぐ眼の前に見えます。やがて龜は波打際へ着きました。

「浦島さん、やつと着きました。さア少しも早くお薬をとつてきて下さい。私は此處で待つてゐますから。」

と龜は呼吸せき切つて云ひました。吾作はヒョイと濱の砂の上へ降りて、

「龜さん、有難う、お前さんにはお禮を云ふよ。は、は、は。所で一つそのお禮のしるしに面白い歌を聞かせてやらう。」と云つて吾作は歌ひ出しました。

偽の浦島、龜に乗り

乙姫さまを

喃かして

とつた翼は

五色の眞珠。

と歌つて吾作は懐中から五色の眞珠のはひつた小箱を出して見せ、

「己れは本當はこの村の吾作と云ふものだよ。さようなら。」と云つてすたこら歩き出しました。それを聞いた龜は一時にカツと熱くなるほど怒つて、

波さん、お出で

波さん、お出で

眞珠を盗んだ悪者の

吾作の體を呑んで呉れ。

と大聲に歌ひますと、今迄靜かだつた海に山のやうな大浪が起つて、恐ろしい勢でゴーツと濱に打ち上げました。吾作はそれを見て逃げようとしたが、忽ち大浪に吞まれてする／＼と海の中へ引き込まれてしまひました。(をばり)

夕焼

(推薦)

網野まんまる

火事だこ鷺鳥が

啼き出した

啼かずに靴ぬいで

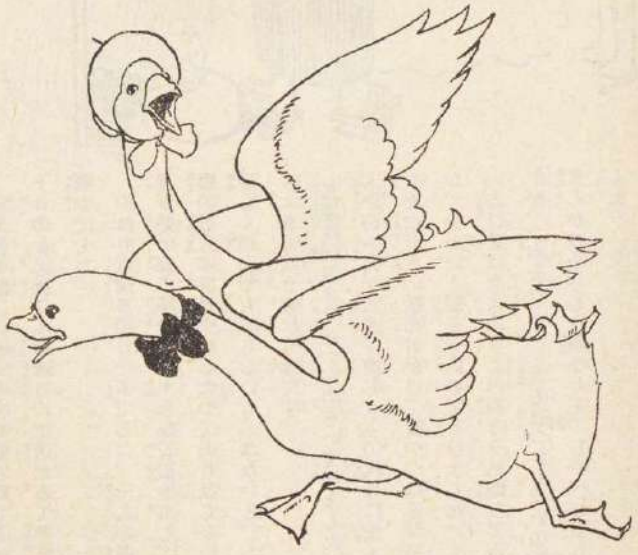
駈けてゆけ

お目さん とつと

ごかくれるに

さつさ はだしで

駈けてゆけ



占ひの大名人



私が晝を習ひに通つて居る塾の前では毎月十日の金比羅さんの縁日には店が出て非常に賑かでした。

やはり或縁日の日の事でした。一人の占ひ者が塾の前に陣取つて大きな看板を出して私程の名人は世界中探したつてありはしない、恐らく何んでも解らないものはないと、とても大きな吹き飛ばし様です。

私達は面白半分からのぞいて居ましたが、其中の一人が私達が消しゴムの代りに使ふパンを占ひ者の横目がけて打つつけるが早い、か、ひよいと頭を引込めて了ひました。

占ひ者はきよきよ四方を見廻してゐますが、一向それらしい者も見つからないので、又しかつめらしい顔をして、しやべり出しました。



すると私達の一人が、何んでも解ると云つたから當て、見ると云ひましたので、占ひの先生たゞ口をもぐ／＼して居るだけでした。

それを見た見物人が皆アハ、と笑ひ出したので、すつかり、てれちやつて一人の小僧をつかまへて只見てやるからと、嫌がる小僧に手を出させて竹の棒をがちや／＼やつたり、習字の卦算見たいな物をひつくり返したりした揚句大きな眼鏡で手を見始めました。

そして「君の此はくろがいけない、是れは親に早く別れて苦勞する相だ」と云ひますと、小僧さん、むつと怒つたやうな顔をしていきなり、

「此へつほ占ひめ、是れは此間金槌で打つた血豆だい」と云つたので、またも皆大笑ひ、世界一の占ひ先生すつかりしくじつて、こそこそ店をしまつて逃げ出しました。

傳 雨 蛙 (上巻の話)

藤澤衛彦

若い青蛙が、都の旅から戻つたといふので、赤蛙と蝦蟇とで迎へに出ました。
 『カラッコロ、カラッコロ、お迎へありがたう。』と青蛙が申しました。
 『ギヤオウ、ギヤオウ、まあ、青さん、御無事で』と、赤蛙が喜んで叫びました。
 『フガア、フガア、結構、クエッコウ。』と、蝦蟇も叫びました。

すると、青蛙は、いやな顔をして、
 『つえ、静に、まだ此方では、そんな鳴き方で満足してゐるのか。』といつて、こればたまけたといふ風をしました。
 『さういへば、青さん、君の鳴き方はどうしたんだ。何だか變だつちやあないか。』と、赤蛙が尋ねました。
 『え、都の鳴き方は違ふのかい。』と、赤蛙も訊きました。

ことは出来ませんでした。
 『ふん、なんと言つても、青蛙様は、蝦蟇や赤蛙よりか鳴くことに掛ぢちやあ先生だ。それに、カラッコロ、カラッコロ、かう、調子のからつとしたところがたまらなくいゝぢやないか。おい、みんな、都ぢやあ、何處へ行つても、調子のいゝものが幅を利かしてゐるんだぞ。そこで、早速だが、みんなも、せいぜい稽古して、笑はれないやうに氣をつけるんだ。まあ、これからは我が輩が先生だ、カラッコロ、カラッコロ。』
 青蛙は、かうして、田舎中の先生様になつて、蝦蟇や赤蛙を弟子に持つ身分になりましたが、だんだん田舎に落ちつてゐるうちに、青蛙の鳴き方にも、田舎風が感染して、時々、つい『カラツカ、カラツカ』などと詛つて鳴くやうな事もありました。その鳴き聲を、弟子達が聞いて、笑ひますと、負きらひの青蛙は、それが正しい鳴き方だと言つて剛情を張りました。



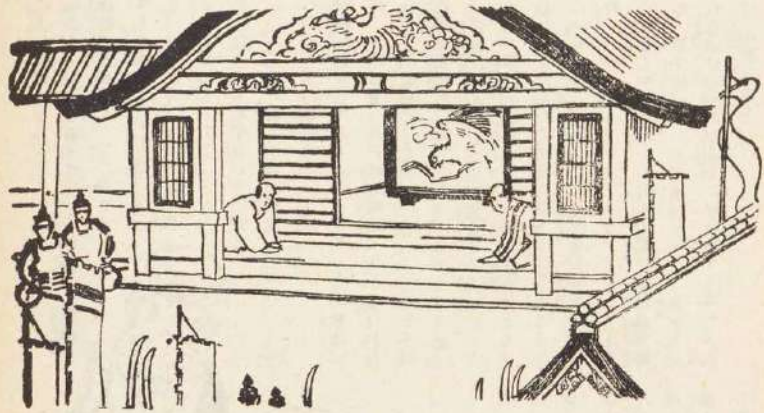
二年三年たつうらには、青蛙自身『カラッコロ』が都風の鳴き方だか『カラツカ』がさうなのだつたか、自分でも、さつぱりわからなくなつてしまひました。ですから、弟子の蝦蟇や赤蛙達の鳴き方も、自然とめらめらやになつて、勝手な鳴き方をしますので、

青蛙は、したり顔に二疋を見て、
 『うん、ぢやあ、まだ流石つて来ないんだな。カラッコロ、カラッコロつてやつば。』と言ひますと、
 『待て、待て、大將、そりやあ、青蛙だけの鳴き方だらうが。』と蝦蟇が通りました。
 『なあに、さうぢやあない。赤蛙だつて、蝦蟇だつて、蛙といふ蛙は、もう、あんなおきつたりの赤ン坊の泣聲かなあ鳴き方なんざあしないんだ。』と、青蛙が申しました。
 『そんなら、どんな方法で鳴くんだ。』



『だ、その味の變つた都風つて鳴き方を試つて見てもらはう。』
 そこで、若い青蛙は、こんな風に鳴きはじめました。
 『蝦蟇は、グレッツケロ、グレッツケロ、クエ、クエ、赤蛙はギヤラツコ、ギヤラツコ、こんな調子なんだ。』
 『ふん、グレッツケラ、グレッツケラか。』
 『なるほど、ギヤラツカ、ギヤラツカか。』
 『二疋が似合しますと、』
 『グレッツケラぢやあない、グレッツケロ。ギヤラツカぢやあない、ギヤラツコ。も一度試つてごらん。』
 『グレッツケラ、グレッツケラ。』
 『ギヤラツカ、ギヤラツカ。』
 『は、お前達の鳴き方は、都風つてよしか、田舎平の田舎訛りだ。まあ、その訛りを直さなくつちや駄目だよ。』
 そこで、蝦蟇と赤蛙とは、やつきになつて繰返して、都風の鳴き方といふのを試つてみましたが、幾度繰返しても、『グレッツケロ、グレッツケロ』『ギヤラツコ、ギヤラツコ』と鳴く

青蛙は、蝦蟇に媚つて、難儀なしに、『違ふぞ。』と叱りつけました。中には、『グレッツケロ』と正しく鳴くものもありましたが、『おい違ふぞ、グレッツケラだ。』と反對に叱られるものもありました。それで、今度は、『グレッツケラ』と鳴いてゐると、又『違ふぞ、グレッツケロだ。』と叱られました。かうして、事々に反對するものが青蛙の性分となつてしまひました。その性分は何事によらず、他人が右と言へば左、白と言へば黒と言つて皆なを困らせました。青蛙のお母さんは、永い病の隠影の際にも、青蛙の性分を心配して、
 『私が死んだら、屍骸は川邊に埋めてくれるやうにと遺言して死にました。かう言つて置いたら、何事にも反對する青蛙は、きつと山に埋めるだらうと思つたのに、其心を知らずに青蛙は、母蛙を失つた悲しさに日頃の不幸を後悔して、『せめて此遺言ばかりは守りませう。』と、遺言どほり川邊に埋めたので、母蛙のお墓は、雨が降る度に流されさうになります。それが心附で、今でも青蛙は、雨の降らうとする前に、それを豫言するやうに、やかましく啼き立てるのだといふ事です。



義經の奥州下り

窪田空穂

(つゞき)

平泉へ着いた吉次は義經を、栗原寺の別當のところに案内しておき、そのことを秀衡のところへ知らせに行きました。秀衡はそれを聞くと大變によろこびました。その時は病氣で寝ておりましたが、嬉しさの餘りに、起きられないのを家來に助けて起してもらひ、義經に逢はうとして、慌てて直垂を着たり烏帽子をかぶつたりしました。

「少し前に、秀衡の家へ黄ろい鳩が舞ひ込んで来た夢を見た。鳩は八幡のお使だ。源氏の方が入らつしやるしるしてはないかと思つてゐたのに、頭殿(義朝)の若君が入らしたといふのはうれしいことだ。お若くて入らしても、さぞ學問もお出来になる行き届いた方だらう。病氣をしてゐたので、家の中が汚くなつてゐよう。庭の草も取らせろ。何よりも泰衡と忠衛はすぐにお迎ひに行け。餘り菜々しくはするな。」

秀衡はさう云つて騒ぎ立てました。泰衡と忠衛の二人の子供は、三百五十騎を連れて栗原寺へ迎ひに行きました。栗原寺では、五十人の坊さんに送らせました。義經は秀衡に逢ひました。

「ここまではるばるとお出で下さつたのは如何にも有難いことでございます。手前は出羽奥州の二ヶ國を手には入れてをりますが、主君としてあふぐ方がないので、肩身の狭い氣がして居りました。これからはもう大丈夫でございます。」

義經にさう挨拶をして、子供を泰衡を呼んで、「出羽奥州の大名三百六十人に云ひつけて、毎日御馳走をさしあけるやうにして、君の御守護をしる。」と、いひました。それから又義經にむかつて、

「初めてお目に懸りましたしるしの贈りものとしましては、手前の家來は十八萬騎でございますが、その中の十萬騎だけを二人の子供にただかせまして、八萬騎は君に差上げまする。」

秀衡は云ひ續けました。

「君の御事はそれでいい。次ぎには吉次だが、吉次がお供をしなければ、君のお下りはなかつたわけだ。みんなで吉次に贈りものをしろ。」

さう云はれたので、泰衡は、なめし皮を百枚、矢にする鷹の羽を百枚、良い馬を三十四匹に、鞍を添へて出しました。忠

衛も兄に負けず出しますと、外の家來もそれぞれに出しました。秀衡はそれを見て、

「皮や羽はもう澤山だらう。自分はあなたの好きな物を上げよう。」と云つて、唐櫃の蓋へ、砂金(金貫幣)として使つたものを一ぱい入れて出しました。

吉次は、義經と一しよだつたお陰に、道中でも災難をのがれ、それに又かうした多くの物を貰つたので、大喜びでした。「これはみんな鞍馬寺の多聞天の御利益だ。」と心の中で思つて有難がりしました。

二

軍を起す時には秀衡が身方をするといふことが分つたので、義經はそのことについては何も秀衡には云はずにゐました。秀衡も、いつでも身方をしようと思ひながら、やはり何事も尋ねずにゐました。今は義經はただいい機のを待つてゐるだけです。

年がかはつて義經は十七になりました。

「ここにかうしてゐても爲方がない。都へ行つて様子を見たものだ。秀衡に話したら止めるだらう。黙つて行かう。」

義経はさう思ひました。そして秀衡へは、ちよつと其處いらまで出て来るやうな様子に見せて、ただ一人で都へ向つて出掛けました。途中伊勢の三郎の家に少しのあひだ逗留をして、信濃の木曾義仲のところへ寄つて、その中に謀叛をすること話しました。それから都へ行つて、都のそばの山科の知合の者の家へ泊つて、平家の様子を窺つてゐました。

辨慶に遇ふまで

武藏坊辨慶は、紀伊の熊野の別當の辨せうといふ人の子です。この辨せうといふ人は、藤原氏で、家柄は立派でした。それに熊野は、皇室を初めとして、全国から信仰されてゐる寺で、その寺の別當ですから、その頃では大變な勢ひをもつてゐた人です。母は、二位の大納言といふ尊い位や官をもつてゐた人の娘です。辨慶は、さうした立派な自分の両親のあひだに、一人子として生れました。

辨慶は、生れた時から普通の子供とはちがつてゐました。

鬼若は五つ小的时候には、もう十二三ほどの體になりました。それに六つ小的时候には癩瘡をして、もともと色の黒い子が、一層黒くなつてしまひました。それに、生れた時から毛深かつた髪は、一層毛深くなつて、肩の邊まで一つづきに毛が生へて來ました。

「かう醜くては、あたりまへの男にするわけにはゆくまい。いつそ僧侶にしよう。」

と叔母の三位の奥方は思ひました。それで、比叡山の學頭の役(塾長のやうな役)をしてゐる西塔の櫻本の僧正といふ人のところへ弟子として預けました。

「この子は三位殿の養子です。學問をさせたい爲に差上げます。形はお恥しいほど醜い子ですが、心持は賢いやうに思ひます。經文の一卷でも續めるやうにお仕込みを願ひます。心持に悪いところがあつたら、懲してお直し下さいまし。如何やうにも、宜しいやうにお願ひします。」と云つて頼んだのでした。

二

鬼若は櫻本の僧正のところへ、稚兒となつて學問をしてゐ

體の大きさは二つか三つ位の子供ほど大きく、髪の毛は肩の隠れる程に長く伸びて、それに奥歯も前歯も生へ揃つてゐました。

それを聞くと父の別當は氣味悪るがつてしまひました。「それは鬼の生れがはりだ。大きくなつたら佛法の邪魔をするものになるだらう。今の中に殺してしまへ。」と、云ひました。しかし母親は、そんなかはいさうなことは出來ないと思ひました。

「親となり子となるといふのは、深い縁のあることです。そんなことが出来るのですか。」と云つて歎いてゐました。

そこへ、母の妹で、山の井の三位と呼ばれてゐる立派な人の奥方が來まして、

「さういふことなら、その子を私がいただきませう。大きくなつて良い子でしたら、私の家の養子にませう。もし悪い子でしたら僧侶にませう。僧侶になつたら相應に出世もして、却つて親を導く者になるかも知れません。」と云つて、京都へ連れて來ました。その頃は、鬼のやうな子だといふところから、鬼若といふ名を附けられてゐました。

ました。學問の性は非常によく、仲間のものに較べると目立つくらゐでした。進み方も早いのでした。

「僧侶は形は何うでもいい、學問が第一だ。」

師匠はさう思つて、勵んで教へてゐました。

年が立つと共に、鬼若は、めきめきと骨が太くなつてゆき方も強くなつて來ました。すると何時からか師匠の云ふことを聞かなくなつて、亂暴な遊びをするやうになりました。それは同じやうな稚兒や坊さんなどを誘つて、誰も行かないやうな後ろの山へ登つて、腕押や、鬚引や、相撲などといふ力業ばかりを喜んでするのです。

「自分だけ悪戯をするのなら我儘もしようが、外の大勢の學問をする者までも欺して、亂暴者にするといふ法はない。」坊さん連中はさう云つて怒つて、頻りに僧正に云ひつけました。すると鬼若は、その云ひつけた者を敵のやうに思つて、その住居へ暴れ込んでいつて、戸や障子を打破しました。

坊さんたちはみんなで憎んだが、しかしそれ以上には何うすることも出來ませんでした。それといふのは、鬼若の父は熊野の別當で、養父は山の井の三位で、祖父は二位の



路次も通れなくなりました。

ひよつとして向うから鬼若の来るのを見かけると、わざと途を曲つて避けるやうになりましたが、その時はそれで済んでも、後で、

「あの時は何うして避けた。何の恨みがあつて嫌ふのだ。」と云つて喧嘩を賣つて、相手が怖がつて懐へてるのもかまはずに、腕をねち上げたり、拳固で押倒したり、ねち倒したりしました。

「鬼若に逢つたら、不運だと思つて諦める外はない。」とみんなが云ひ合ふやうになつてしまいました。

鬼若の亂暴は、いつか比叡山中の問題となりました。

「如何に僧正の稚兒でも棄てて置けない。これは叡山の大事件だ。」

と云つて、三百人の坊さんが、鬼若の始末方を朝廷へ訴へ出ました。

朝廷では、追拂へといふ勅がありました。事情があつて見合せるやうになりました。

この事は鬼若には内々にして置きましたが、話す者があつ

大納言です。それに此處では、三千の寺の學頭をしてゐる僧正の稚兒ですから、餘り世話をやき過ぎると、後でひどい目に逢はされるだらうと思つたからです。

鬼若は益すい氣になつて亂暴を働きました。誰にでも出逢ふと、喧嘩を賣つて、拳固でなぐるので誰もうっかりとは

て分つてしまいました。すると鬼若はそれを恨みに思つて、一層の亂暴を働きました。

今はもう、師匠の僧正も持て餘して、目も向けないやうになつてしまいました。

三

頼みに思つてゐた師匠にまで見放されたとなると、鬼若の心持は變つて來ました。

「この上は、この山にゐても爲方がない。何處へでも、知つてゐる者の目につかない所へ行つてしまはう。」

さう思つて鬼若は、住み馴れた比叡山を棄てて里へ下つて來ました。その途中で、

「このままでゐては、何處へ行つても叡山の鬼若だと一と目で分つてしまふ。學問は不足のない程した。僧侶にならう。」

さう思つて、髪の毛を洗つて、自分で頭を剃りました。きれいな剃れなくて、所々剃れたくらゐですが、それでも水に映して恰好を見ると、丸いだけにはなつてゐました。

「僧侶になると名がある。何と附けよう。」

鬼若はさう思ひましたが、思ひ出したのは、昔、西塔の武

藏坊といふ坊さんのことです。それは二十一の年から亂暴を始めたが、六十一の時には立派な死方をしたと閉いてゐる坊さんです。

「よし、自分も西塔の武藏坊と附けよう。それから名だが、父は辨せうで、師匠は寛慶だ。兩方の名を一字づつ取つて辨慶と附けよう。」

幼い時からの鬼若は、今日は西塔の武藏坊辨慶といふ名になりました。

比叡山を下りた辨慶は、何處といつて行くあてもありませんでした。叡山の麓の大原の里に、以前山法師がゐる住み荒した庵がありました。辨慶はそこへ入つてゐました。しかし、稚兒だつた時でも、形が悪く、氣前も變つてゐた人ですから、坊さんになると一層人が相手にせず、もつたいらしく籠つてゐても訪ねて來る人もないので、そこにゐるのもつまらなくなりました。

「諸國修行に出よう。」

辨慶は一人でさう呟いて、何といふしつかりした目あてもなくその庵をさまよひ出ました。(つづく)



助之九ちらとひ

一 耕 畑

あるところに、ひとりの鍛冶屋が居ましたが、この男は仕事が大変で、釘一本をこしらへるにも一日かゝるといふほどでしたから、いつも貧乏ばかりして居ました。

ある夏の日、鍛冶屋は晝飯をたべて居ましたが、その膳の上になつて居るまで餅がとんで来て、追つてもくたがるので、かんしやくをおこして鐵鎚をとつてやつと膳の上をたたくと、ひとうちに蟻が九匹つぶれて死んで居ました。

——そこで、この鍛冶屋はすつかり得意になりました。

「ひとうちに九つ！、へん、どんなもんだい！」

かういつて、高くもない鼻を拳でグツとこすりあげたもんです。

これだけの腕前をもちながら、こんなうすつ唯い小さい仕事場で、毎日、朝か

ら晩まで鐵砧とさしむかひで、トンカンノとはたらいてるのは、じつにつまらない、ひとつすばらしい功名をあけて、都の王様にかゝへてもらはうと考へた鍛冶屋は、諸國を武者修行しようといふ氣になり、さつそく支度をして大るばりで出かけました。

「ひとうち九之助——これは、鍛冶屋が、じふんの襟へ墨くろく」とかいた、大じまんの名乗でした。

鍛冶屋はさうやつていそいでゆきますと、道で、ひとりの鳥差師にあひました。

「どうだい、こゝに捕りたての、いゝ雀があるんだが、一羽買つてくれないかね。」と、鳥差師はいひました。

鍛冶屋はいかにもるばつた顔をして、雀を買つてやりました。そしてその雀を、辨當の風呂敷へつゝんでゆきました。

しばらくゆくと村があつて、その村の入口に小さな蕪蕪屋がありました。鍛冶屋はこゝでもまたるばつた顔をして、蕪蕪をひととき買つてやりました。そしてそれをまた辨當の風呂敷へつゝんで、いそいで出てゆかうとしました。

すると蕪蕪屋の亭主は走つて出て、

「もし、お客さん。これからしばらくゆくと、大きな牧場へ出ますが、そこで青い着物をきた男にあつたら、あつちからどんなに言葉をかけてきても、知らん顔をしてズン／＼行つておしまひなさいよ。その男と相手になつたら、しまひにはひどい目にあひますからね。そいつはじつは恐ろしい鬼の化物なんだから、へたにからかはずもんなら、あなたの生命もあぶないことになりますよ。」と、親切にいひました。

鍛冶屋はこれをきいて、びつくりするかと思ひのほか「なに、鬼の化物だ？……こいつはいゝことを聞いた。さつそくそれを退治してやらう。いよくこの、ひとうち九之助さまが功名をあげる時がきたぞ！」と、呆氣にとられてゐる蕪蕪屋の亭主を後にして、よろこび勇んで駆けだしました。

村をぬけて、しばらく道をいそぐと、亭主のいつたとほり、大きなひろい牧場へきました。「は、あ、こゝだな。」と、鍛冶屋はその青い小山にのほつて、あたりを見まはしましたが、鬼の化物はおろか、牛一匹、羊一匹も姿を見せません。

「ふん。おれの威勢におどろいて、どこかに小さくなつてやがるな。」鍛冶屋はいよくゝるばかりました。

すると、足もとの青い小山がにはかにグラ／＼とゆれました。「おや、地震かな？」と、彼はおどろいて小山を飛びおりと、なほおどろいたことには、その小山がムク／＼ムク／＼と、おきあがりました。

「誰だ？おれがせつかく晝寝をしてゐるのに、おれの腰の上にあがつたやつは？」と、小山は、それこそ地の底まで響きさうな、大きな聲でものをいひました。

鍛冶屋はなほ／＼おどろいて、よく／＼見ると、小山と思つたのは、青い妙な着物の着物をきた大男でした。

青い着物の大男は、すぐ鍛冶屋を見つけて、

「おや、こいつ奴、お前だらう、わしの腰の上のほつた奴は！」と、どなりました。

「ふん、こんなところにまつ晝間、人の土足にかけられるのも知らないで、グウ／＼寝てる奴のはうが、よつほど間拔だといふことを知らないか。」と、鍛冶屋は内心はびく／＼しながらも、わざと膽を据ゑて大るばりにるばりました。

「おや！こいつ奴、變にるばりやがるな。」と、大男は、チロチロ見おろしましたが、ふと、鍛冶屋の襟の「ひとうち九之助」といふ字に眼をつけました。

「ひとうち九之助……？」をかしな名だなお前は？」

「をかしくも不思議でもない。おれは、鐵鎚で、ひとうちに九つ、ぶつ潰してやつたから、こんな名をつけたのだ。」

「ひとうちに九つ——つて、人間をか？」

「さうだ。」

まさか鐵だともいはれなかつたので、鍛冶屋は肩をゆすりながら、また大るばりでうなづきました。

「なんだ？鐵鎚ひとうちに、九人の人間を、潰してしまつたつて……？」

大男はびつくりしました。——ひとうちで九人の人間をつぶす鐵鎚は、どんなに大きくどんなに重いものだらう。そして、その鐵鎚をふりあげたこの男は、なりこそ自分の十分の一も小さいが、どんなに強い力をもつてゐることだらう！「……さうか、それはちよつと豪いな。」と大男は、しかし、まだ疑ひ深い眼を鍛冶屋にそ、いでるましたが、「力にかけちやあ、おれも自慢していい、位る強いつもりだが、どうだい、ひとつこ、でお前と力くらべをして見ようちやあないか。お

れは石をなけると、高く／＼のほつて、おれがグツスリ晝寝をして今度眼がさめる頃でなくては落ちてこないのだけ。」

さういひながら、大男は石ころをひろつてビュートと空へむけてなけると、石ころは雲をつらぬいて高く飛んで、一時間ばかりもたつてからやつと牧場の草原へ落ちてきました。

「へん、たつたそれくらるか。おれは石をなけると、高く／＼のほつて、一生の間地面へ落ちてくるやうなことはないよ。」

と、鍛冶屋は風呂敷からさつきの雀をだして、それを石ころのやうに握ると、サツと空へむけてなけました。もちろん、その石ころは——雀は——そこへ落ちてきませんでした。

大男は心のうちで、たいへんびつくりしましたが、まだまげぬ氣になつて、

「よし、よし。こんどはわしがほんとうの力をみせてやらう。どうだ、お前にはこんな真似はできない。」と、また石ころをつまみあげて、指さきにウンと力をいれると、石ころはまるで粉のやうにくだけて、バラ／＼とこぼれました。

鍛冶屋は、大男の力のつよいのに、おそろしくなりました。が、それでもへいきな顔をして、

「へん、それくらゐのことか！おれは石をギユートとつかんで、石から水をしほりだしてみせるぞ。」とるばりました。

そしてまた風呂敷から、さつきの藁頭をとりだして、それを片手にグツとつかむと、水がタラ／＼と落ちました。

大男は、まつたくびつくりして、「こいつはえらい人間だわい。」と、鍛冶屋をおそれるやうになりました。

「いや、お前の力のつよいのには、じつに感心した。さあ、この牧場の裏には、うまい櫻んほのなつてる櫻の樹がある。それを御馳走しよう。」といつて、さきにたちました。

大男は、こんな強い人間がゐるは、じぶんが安心して悪いことをすることができないと思つたので、なんとかして鍛冶屋を殺してしまはうとしたのでした。しかし、鍛冶屋も、この大男が、じつは鬼の化物だといふことをきいてゐるので、

どこまでもゆだんはしませんでした。

二人は大きな櫻の樹のそばへきました。そこにはおいしうな真赤な櫻んほが、まるで紅玉でも綴つたやうに、一杯みごとになつてゐました。

鍛冶屋は、その櫻んほをとるために、樹のほつてゆきま



したが、その前に、その樹のそばへ、大男の知らぬ間に枯草をたくさんつんでおきました。

鍛冶屋が樹にのぼつたのをみると、大男は「うまく計略にかゝりやがつたぞ」といはねばかり、ニヤリと笑ひましたがツカ／＼と樹のそばへきて、

「いや、この樹は、櫻んほがうまさうだ。」と いひました。

そして、その樹の幹よりも太さうな腕をのばして、鍛冶屋ののつてゐる大きな枝を、ギョツと弓のやうにまげ、櫻んほを二つ三つ食つたかと思ふと、パツと手をはなしたので、鍛冶屋のからだは、樹から高く飛ばされました。

おほかたこんなことだらうと思つてゐたので、鍛冶屋はヒラリと身をかはして、うまいこと枯草の上に落ちました。

「どうだい。飛ぶことだつてこんなに上手だらう。もしこれがお前だつたら、お前はたしかに頸の骨か腰の骨ぐらゐは、折つてゐるにちがひないぜ……。これは、おれが飛ぶときに、ちよいとおまじなひをするのさ。さうすればどんな高いところからでもうまく飛べるのだよ。」と、鍛冶屋はまた大るばりでいひました。

大男は、そのおまじなひを、知りたくなりました。で、

「どうだい。そのおまじなひを、わしに教へてくれないか。」と、たのみますと、鍛冶屋はいよく、肩をそびやかして、

「よろしい。いかにも教へてやらう。……が、いまずぐといふわけにはいかぬ。なにかおれを感心さすやうな手柄を見せたら、その場で教へよう。」とこたへました。

——で、兩人はその牧場を出て、いつしよにその國の都のはうへいそぎました。

都へ着いて不思議だつたのは、賑やかで幸福でなければならぬ筈の街が、いかにも淋しくヒツソリして、なんだか大きな災禍と悲哀とが、あたり一杯にひろがつてゐるやうに見えることです。變だと思つていろ／＼きいて見ると、なんでもこの都のちかくの大きな古池に棲んでゐた恐ろしい龍——それは強い翼と鋭い爪と焰を吐く口をもつた龍——が、突然池からはひだして、都ちを荒れまはり、そのまゝ、都の真中の大寺の床下にかくれてしまつたといふのです。そしてその恐ろしい龍を、誰も退治する者がなといふので、王さまはこの龍を退治した者は、高い祿で家に召しかゝへるといふお

觸令を出してゐられるといふことでした。

「どうだ。面白いな。その龍の奴を、お前は退治することができるか？ おれなら例のひとうちで丸潰してしまふ鐵鎚でコッソリとやれば、それでおしまひだがな。」と、鍛冶屋はわざとるばつて見せました。

「それくらゐの龍はわしだつてやつつけるさ。そんな大きな鐵鎚さへあればね。」大男はまけぬ氣になつていひました。

そこで鍛冶屋は王さまにおめにかゝつて、自分の名の「ひとうち丸之助」の意味を、いかにも強さうに説明申しあげて、自分がひとり、ひとうちにその龍を退治するから、できるだけ大きな重い鐵鎚をこしらへてくださいとおねがひしました。

王さまは大よろこびで、さつそくそのねがひどほりの、大きな重い鐵鎚をつくってくださいました。

「さあ、この鐵鎚がお前に振りまはせるかね。」と鍛冶屋は、またわざとるばつて大男にいひました。

「これくらゐのものが振りまはせなくてどうするんだい！」大男はまけぬ氣になつて、その大きな重い鐵鎚をベースポールのバットのやうにブン／＼振りまはして見せました。

「なるほど、お前もちよつとは力があるな。……だが、あの龍をひとうちに潰すことができるかな」と、鍛冶屋は、なほ、るばつた顔で笑ひました。

「できなくて！」

大男は、鍛冶屋にうまくおだてられてゐるとは氣がつかないで、また、まけぬ氣になつてかういつたかと思ふと、鐵鎚をブン／＼振りまはして、龍のかくれたといふお寺へ駆けつけました。

そして床の下から龍を追ひ出すと、ブーンとひとうちに、龍の頭をつぶしてしまひました。大男は、實は鬼の化物なので、とても龍はこれにてむかふことはできなかつたのです。「いや、感心／＼！ 大手柄／＼！」と、鍛冶屋は手を拍つてほめたて、

「さあ、そんな約束どほり、あの飛ぶおまじなひを教へてあげよう。……さあ、その鐵鎚をもつたま、寺の屋根へ登つてごらん。それから眼をつぶつて、「ひとうち丸之助ごめんなさい。」と三遍となへて、バツと飛んでごらん。まるで雲にのつたやうに、フアリと地面に下りられるから。」と、いひました。



「いや、おもしろいおまじなひだな。」

と、大男は大よろこびで、鐵鏈をかつきながら、高い／＼、お寺の屋根にのほりました。そして眼をつぶて、

「ひとつち九之助、ごめんなさい！ひとつち九之助、ごめんなさい！ひとつち九之助、ごめんなさい！」と、大聲で三遍となへると、バツと飛びました。

どうして、たまりませう！大男の鬼の化物は、かついだ鐵鏈の重さで、ひどく地べたにからだをうちつけて、頸の骨と腰の骨を折つて死んでしまひました。

「ひとつち九之助、ごめんなさい！」と、大男がいつた聲は、王さまの宮殿まで聞えましたので、王さまは、

「それ、あの、ひとつち九之助が龍を退治たに逃ひない。早く行つて見とゞけてこい。」と、家來をお寺へ走らせました。

「ハ、ハ、ハ、いや、恐ろしい龍も、私にかゝつては、まるで意氣地がありません。ごめんなさい／＼つて泣くやつを、この鐵鏈を振りあげて、私の得意のひとつちに、たゞきつぶしてやりました。そしてそのついでに、この床下に棲んでゐた鬼の化物の大男を、コッソリと退治してしまひましたよ。」と、鍛冶

屋はそこたふれてゐる龍の死骸と鬼の死骸を指さしながら笑ひました。

家來がこのことを王さまに申しあげると、王さまはまつたく大よろこびで、鍛冶屋を國中第一の勇士として、高い祿で召しかゝへようとなさりました。すると、鍛冶屋は急にしをれかへつたやうな顔をして、

「いえ、王さま！私ばもう勇士でもなんでもございませぬ。私は龍と鬼とを退治するのに、力がありつたけ出しましたため、もう得意の大鐵鏈を振りまはす力もなくなりました。私ばもう、あれが一生の手柄のしをさめで、これからさきは力のない、くだらぬ人間として暮さねばなりません。」とためいきをつきながらいひました。

王さまは、ちつと鍛冶屋の顔を見てゐられましたが、この時いかにも感心したやうに、

「いや、この都をやすらかにするためお前は力をなくしたのぢや。お前は、勇士として立派な功名をあらはしたのぢや。わしはいつまでもお前を、國中第一の勇士として高い祿で召しかゝへるであらうぞ！」と、いはれました。(をばり)

しやくやく(幼年詩)

長野縣下伊那郡上郷校尋三
宮澤 たけ

おにはの
しやくやくが
きれいにきれいに
ほんとうに
きれいに
咲きました。

鈴蟲と蟻(幼年詩)

仙臺市木町通校尋五
丹野 貞男

冬になる時
蟻が
死んぢやつては
いけないよと言つて
鈴蟲と
わかれた





かちく山後日譚

田中 實

四〇

からく山の悪狸には一匹の息子がありま... 大そう口惜しがつてまいにちくどういふ具... 鬼はなか／＼の智慧者だから、うっかり... 反動に返討をされるなら... 目だ—といつもかう思ふと、手が出ないや... うな気がしました。

すると間もなく向ふの小山の上を、一人の... 犬がワン／＼吠えて下の草原へ飛び下りて行... 大の聲と鐵砲の音に驚いた狸は、びつくり... 狸を見た狸は、おい／＼泣き出しました。

「さうかい、しかしきつとだらうね。もし開... 狸は手を振つてそれを打消すやうに、... 『間違ひはありません。あなたが本當に私を... 大が後からついて来ません。... 狸は幾度も／＼口笛を鳴しましたが、... 大の傍へ寄つて行きますと、大は藪の方を... 認んで俄にワン／＼吠え出しました。と同時に、向ふの藪をめぐって一散に走つて行きま... した。



やる。……しかし待つておくれ。わしは... お前の生命を助けることは助けるが、さうす... とわしは暮しがたないで死んでしまふこ... となる。それでは困るから、何かお金儲け... をさせて貰ひたいものだね。狸師がさういっ... た時、狸はやう／＼泣き止みました。そして... 足しまうにエエ／＼しながら、

「狸師さま、それは本當のことでござ... いますか。もし本當だつたらこれ... 程嬉しいことはございません。……... ところで何をお禮に差し上げま... しょう。」... 『狸師はまたいひました。... 『本當だとも、本當だとも、本當で... なくてどうしよう。心配すること... はない。わしは欺したり化したりし... ないから安心しておんで。しかしわ... しば、お前がお禮をしてくれた後で... 手助をすることにしよう。』... 『はい、それで結構でございます。... では明日の晩、向の山の老狐洞まで... お出で下さい。明日の晩は丁度、狐... や狸や狼などが集つて宴會をするのです。... それで私はい、時分を見て、バタ／＼大きな... 音を立てますから、その時すぐ飛び込んで来... て下さい。そしたらいくら少くつても十四ぐ... らるは捕れるでせうから……』と狸はい... ひました。

「さうかい、しかしきつとだらうね。もし開... 狸は手を振つてそれを打消すやうに、... 『間違ひはありません。あなたが本當に私を... 大が後からついて来ません。... 狸は幾度も／＼口笛を鳴しましたが、... 大の傍へ寄つて行きますと、大は藪の方を... 認んで俄にワン／＼吠え出しました。同時に、向ふの藪をめぐって一散に走つて行きま... した。... 見ると何か白いものがちら／＼してゐま... す。... 狸師は鐵砲を手取るが早いか、ズドンと... 一發打つて、自分もまつしぐらに藪のなかへ... 駆け入りました。... その時までばんやりあつけにとられて見て... ゐた狸は、やつと正氣に返つて、こそ／＼と... 草かげへ入つて行きました。

獵師はどん／＼後を追かけて行きました。しかし、いくら行つても、さつきのもの影も形も見えませんが、獵師は地だんだを踏んで口惜しがりましたが、どうしようにも仕方がないので、もと来た道を引かへして行きました。

獵師の姿がほとんど見えなくなつた頃、ひよいと兎が草叢のなかから飛び出しました。

（さつきのけものはこの兎だつたのです。）
 兎は獵師と話を話してゐたのを初めからおしまひまで残らず聞いて、どうしやうかと考へてゐた處を獵師と犬に追つかげられたのでした。

兎の顔を見ると、大さうおびえてゐます。兎はいまどうしたらいいかと考へてゐるのです。

「困つたことになつてしまつた。どうしたらいいだらう。」

さういつてうつぶわいて考へてゐましたが、「さうだ／＼。お爺さんのところへ行つて話して見よう。」と出ない元氣を無理に出して、



「おや兎さん、どうもご親切に有難う。婆さんも草葉のかげで喜んでくれるでせうよ。」といひました。

兎はその時お爺さんに、狼が自分を仇討しようとしてゐる事を話して、どうしたら兎れる事が出来るか相談しようと思ひました。

びよん／＼飛んで行きました。

二

お爺さんは、今日が丁度お婆さんが狸に殺れて二年目の忌日ですから、お燈明を上げてお婆さんの事を思出してゐました。

「あゝ婆さんが生きてゐると、わしも不自由がなく、面白をかしく暮せたのに……悪い狸めが婆さんを殺したばかりに、たうとう可哀さうな目に逢せてしまつた……」

それにつけても思ひ出すのは息子のことだが、今は何處でどうして暮してゐるかなあ。」と考へては、しく／＼泣いてゐました。

皆さんがあきらむほどお聞きになつた「カチ／＼山のお話には、お爺さんとお婆さんに息子が居たといふことは、どのお話にもありませんが、本當は居たのです。

その息子はするぶん悪い子で、近所の子供をいぢめて傷をつけたり、よその家の物を盗まつてとつて歸つたりして、時々強盗みたいな真似をするので、お爺さんもお婆さんも閉口してゐたのです。

毒だ。」と思返して何にもいはずに黙つてゐることにしました。

しかしお爺さんは、兎のかほいろを見て、何か心配ごとでもあるのぢやないかしらと思ひましたから

「兎さん、お前さんがほいろが大そうよくないが、心配ごとでもあるのかね。もしあればわたしに聞かせておくれ。」といひました。

「いゝえ、どうもし

せん……兎はわざとほけてゐました。

「いやさうぢやあるまい。お前さんはめつたにかほいろが變ることがないのだから……。」とさういつて、お爺さんは聞き入れません。

兎は困つてしまつて、

「實は……その……江戸へ……出たいと思つてゐるのです。どうしてもここに滞着いてゐる事が出来ないわけがありまして……。」と

ところが或時、お爺さんもしよに半へ入るやうな悪いことをしましたので、お人好しのお爺さんもうとやう我慢がしてゐられなくなつて、お婆さんが止めるのも聞かずに追ひ出してしまひました。それからのちお爺さんもお婆さんも長い間、息子のことを忘れてゐましたが、お婆さんが亡くなつてしまつたこのごろでは、お爺さんほとき／＼息子のことを思ひ出しては泣くのでした。

丁度その時、兎があわてゝ入つて來ました。兎とお爺さんが泣いてゐます。佛壇にはお燈明が上つてゐました。

「あゝ、今日はお婆さんの忌日だつたのだな。……忘れてゐてすまなかつた。」

と兎は思ひましたが、もう仕方がありません。

兎はそつと佛壇の前へ行つて、お線香を上げました。そして、

「お婆さん忌日を忘れてゐてごめん下さい。といつて、あやまり／＼ながみ下さい。」

お爺さんほそれまで一寸も氣がつかせませんでした。ふと泣き止めて佛壇の方へ向きますと、兎がゐりましたので、

いつて兎がもぢ／＼してゐますので、お爺さんは、なほ突込んで、

「そのわけといふのは……。」と、また訊き返しました。

それでも兎は、

「いゝえ、どうぞそのわけはお聞き下さいませぬ。……ではお爺さん、お身體を大切になさつて下さい。」といつて、急いでお爺さんの家を飛び出しました。

お爺さんは兎の様子がいづれにもなく變なので、すぐ外へ出て四邊を見廻しましたが、もう兎は何處へ行つたか解らなくなつてゐました。あつちへ行き、こつちへ行きて、近所を探して見ましたが、どうしても見えないので、

「あゝあ可哀さうになあ。一體どうしたんだらう。あんなにあわてゝ。」といひながら、どうか江戸へ行つても丈夫でゐてくれるやうに、と心の中でお祈りしながら家のなかへ入りました。

兎はこのときさう、お爺さんの家が小さく見える裏山まで來てゐました。そこで兎は、こゝまで來たら大丈夫だらう、と思ひました。

ので、静かに地べたへひざまづきました。
 『さうだ。わたしはさつきお爺さんに何気なく江戸へ出るといつたが、ほんたうに江戸へ行くとしよ。』と狸たちに殺されるかも知れない。向ふへ着けば、どうにかなるだらうから。』さう思つて兎は、『お爺さん、どうかおたつしやで……お暮し……なさい。……』と泣きながら手を合せてながみ／＼いひました。
 しかし、兎はそのまゝぐづ／＼してゐる時でないと思つたので、すぐ立ち上つて、もう一へんお爺さんの家の方へ向いてお辭儀をしました。そして、くるりと向き直ると、びよん／＼と東の方へ走つて行きました。

三

そのあくる晩のことでした。狸師は約束のとほり犬をつれて老狐洞へ来て、狸の合圖をいまか／＼と待つてゐました。
 洞のなかではたいへん騒いでゐる様子です。時々笑ひ聲やお皿の音や、何が打つつける音などが入り交つて、外へ洩れて聞えます。狸師はいつまでたつても狸が合圖をしないので、たうとうおしまひには待ち切れなくな

つて嘘かと思ひましたが、いつもの怒ばり根性を出て、やつぱり辛抱して待つてゐました。
 さうしてゐるうちに、しばらくすると、急にバム／＼ガチャ／＼バム／＼と、大きな音が聞えて來ました。

狸師はそれと同時に、ハツとして、『それ行け！』と、大きな聲でどなりながら、犬の尻尾を鐵砲の筒先でひどくぶつて、すぐ入口の扉をぶちこぼし、まるで矢のやうに早く飛込んで行きました。

なかでは、今まで楽しく宴をしてゐましたが、狸がとつぜん大きな音をたて、びびりしてゐるところへ、狸師と犬に踏まれて、大あわてにあわて出して、すばやく逃げ出したものもあり、逃げ場を失つてオイ／＼泣き出すものもあつて、たいへんな騒ぎになりました。

食卓なんか、ひつくりかへつて、せつかくのご馳走もめちやくちやになりました。
 狸は誰れにも見えないかげ／＼かかれてゐて、いくつもお捕り下さい。』といはねばかりの狐つきをして、そこに轉つてゐるお皿とか、鍋とか戸棚とか類とかいふやうなもの

をめちやく／＼にぶちこぼしながら、けものたちを驚かしてをりました。
 狸師は手あたり次第、鐵砲でけもの頭をぶち殺してしまひました。犬はけもの口に咬みつきましたが、どれもこれもけものの方が弱くつて、いくつもの倒されました。

たうとうおしまひに、みんな生きてゐるものがあなくなりましたから、幾匹捕れたかと思つて算へて見ますと、狐が五匹、白狐が三匹、それから狼が五匹、むじなが八匹、狸が九匹でした。すなふん殺したやうに思ひましたが、僅かこればかりでした。狸師は残念がりましたが、仕方がありませんし、損でもないと思つたので、あきらめました。
 そのとき、狸が、藤の方からこそ／＼出て來ました。

『あゝ、どうもありがたう。……全部捕らめてやらうと思つたが、これだけだつた。でもまあ有難い。』
 『さうですか。もう用事がすみましたら、早くこゝを去ませう。ぐづ／＼してゐると、どんな仕返しをけものたちがするかも知れませ

んから……まつたく生命がなくなりませよ。』狸が急かすので、狸師は犬といつしよにけもの死骸を外へ運び出しました。
 そして、岩がげへ隠しておいた箱車を持つて来て、そのなかへけものを投げ入れました。狸師は勞れを癒すため、しばらく休んでゐましたが、『それは明後日の晩、そつとわしの家へ来ておくれ。仇討つことについて相談しよう。』といひました。

『それではきつとおたづねいたしますから、どうぞよろしくお願ひいたします。狸はいつて、いいいにおじきをしました。狸師は狸のおじきがすむのも待たないで、どん／＼歸つて行きました。

とき／＼、犬が勇ましくワン／＼吠えるのが、闇を破つて狸の耳にもよく聞えて來ました。やがて犬の聲も聞えなくなると、狸は何かにおびやかされるやうにおど／＼して急に身體を震はせました。しばらくの間はあつちへ行きこつちへ行きしてをりましたが、間もなくどこかへ逃げて行つてしまひました。

それから三十分もたないうちに、狸師は

やつと家へ歸つて來ました。たいへんくたびれたので、けものをかたづけして戸締りをするとうと寝床にはひりました。犬も裏の小舎にはひつて、ぐつすりねこんだやうです。

狸師はしばらくうづら／＼してをりましたが、ふと氣がつくと、表の戸を軽くとん／＼と叩くものがあります。

『さて、誰れが來たのだらうか！ いま時分くるとすると、けものたちかな。』と怪しみましたが、それでも開けないわけには行かないので、すぐ起き上りました。

『今晚は！』表でだれかいいひました。その聲をよく聞くと、さつきの狸の聲らしいやうです。

『おや、今頃になつて來るとは變だな。』と思ひましたが、用心のために鐵砲をもつて、そつと戸を開けて見ました。見るとやつぱり狸だつたのではつといたしました。

『おまへどうしたんだい。今頃來て、……まあなかへお入り。』

狸はなかへ入りました。
 『實はいま私が、お爺さんの家の表を通りかゝりますと、いつも早く来るお爺さんが、

今日はまだ戸締りもしないので。そして家のなかはいつともより明いのです。どうしたことかと思ひながら、座敷へ上つて様子なうかがひますと、座敷にはお爺さんと、誰れか見知らない若衆が話してゐるのです。その話に、兎が江戸へ逃げたとお爺さんがいつてゐるので、私はそれを聞くと、すぐ大急ぎでこゝへ飛んで來ました。どうかお狸師さま、何んとかして下さい。』と、急ぎ／＼いひました。

『さうかい。江戸へ逃げたのだらうか！』と狸師は聞きました。
 『さうらしいやうです。』

『いつごろだらうか。』
 『夕方ごろ見えなくなつたといふことを聞きました。』

『さうか。それでは馬で追かけよう。しかし本當ですとも。お爺さんが泣いて話してゐたのですから。』
 狸師はろくに用意もしないで、狸といつしよに馬に乗つて、東の方へ走りまわりました。

堤の櫟は言ひました
 私はこゝに五十年
 毎日かうして立っています
 私の父さん母アさんは
 山の麓に昨日まで
 風に吹かれてゐましたが
 今日は姿が見えませぬ
 今朝は麓へ行つたッけ
 村の樵夫が斧提げて
 堤の小石は言ひました
 山を出てから五十年
 私はかうして寝てゐます



（童話詩）
 堤の櫟は言ひました

沖野岩三郎





若衆はロシヤで死んだとサ
 今朝も今朝とて浦鹽で
 どん！ と大砲が鳴ったッけ



私の父さん母アさんは
 私を尋ねて山を出たと
 風の便りにききました
 だけど影も形も見えませぬ
 村の土方が源翁提げて
 今朝は川原へ行つたッけ
 塊の地藏さんは言ひました
 佛になつて五十年
 私はかうして立つてます
 村の若衆が兵隊にとられ
 父さん母アさん泣き乍ら
 私に願かけ祈つたが

金の冠をかぶった王子

林 信 一



或る國に非常に心の優しい王様が
ありました。どんな時でも決して
怒つたやうな顔を見せずいつも
ニコ／＼と笑つてゐられました。
ですから、家來は申すに及ばず、
國中の人民達も、
「本當にいゝ王様だ。こんなに優
しい心を持った王様は、どこの國
に行つてもありはしまい。」
と、皆な口々に王様を賞めない
ものはありませんでした。こんな
風に王様は、人民達の間にも非常
に徳望がありましたので、國內は
いつも春のやうにのどかで、決し
て争ひが起るやうな事はありませ
んでした。けれども、唯一つ人民

達も、家來達も心配してゐる事があり
ました。それはこの王様にどうしたか、
一人の王子も、王女もない事でありま
した。ですから王様はいつもニコ／＼
して、まるで愁ひがないやうな晴々と
した顔をしてゐらつしやいました。が、
心の中には、子供の無い事を非常に淋
しがつてゐられたのです。

或る秋も近くなつた夕方、この國に
は、それよりもつと不幸な事が起り
ました。それは突然王様が一寸した熱
病が因で、すつと寢込んでしまはれた
のです。家來も、人民も非常に驚いて、
人民の或る者は神社に願を掛けたり、
わざ／＼隣國の智慧の深い人の處に出
かけてゆくものさへありました。家來
達は、隣國から早速立派なお醫者をつ
れて來ました。けれども王様の御病氣
はどうしても解らなかつたのです。
「多分熱病かも知れない。出来るだけ
お静にしてゐられるやうに。けれども

五〇

大した事はないと思ふから安心してゐ
るやうに……」

醫者はかう言つて、多くの家來達を
安心させようとしました。けれども家
來達はどうしてもこのお醫者の云ふ事
を信じる氣はしませんでした。醫者の
かうした言葉に一番心配されたのは奥
方でした。王様が發病されてから、奥
方は夜も晝も一睡もせずに看病してゐ
られますので、目は赤く泣いた時のや
うにはれ上つて、顔は木の葉のやうに
蒼ざめてゐました。

王様の御病氣は一週間立つても、二
週間立つても少しもよくなるはいはば
かりか、然はます／＼高くなつてゆくば
かりでした。家來達はます／＼驚いて、
遠國から名高い醫者を澤山に呼びよせ
て、王様の病體を診察して貰ひました
が、誰一人病名を明かにするものはお
りませんでした。國中の名高い僧侶、
神官達は毎日國々の立派な神社、寺院

に集まつて祈禱をしてゐました。けれ
ども王様の容體は、日に日に悪くなつ
てゆくばかりで、此頃では、あれ程丸
丸と肥つてゐらした王様のお身體は
瘦せ衰へて、まるで骨ばかりのやうな
痛々しいお身體になつてゐられまし
た。奥方も王様と同じやうに瘦せ衰へ
て、此まゝでは奥方も病氣になられや
しないかと、多くの家來達は心配して
ゐました。

王様の容體は、どんな名醫でも解ら
ないので、家來達は仕方がありません
ので、隣國は申すに及ばず、遠い國々
までもふれをまはしました。

それにはどんなに金を出してもいゝ
から、名醫と自信するものは王様の病
氣を診察せよと云ふ意味の事が書いて
ありました。けれども十日立つても、
二十日立つても、名醫をさがし出す事
が出来ませんでした。
此頃では王様は唯うは言ばかり言つ

てゐられて、殆ど意識がないやうに悪
はれました。奥方は狂人のやうになつ
て毎日泣いてばかりゐられました。

その頃隣國の國境の或る山の中に、
年老つた僧が住んでゐました。いつ頃
からこの山の中に住んでゐるのか誰れ
も知るものがありませんでしたが、非
常に風變りな僧として國中の人達で誰
知らぬものがない程聞えてゐました。
けれども白骨山と云ふ山奥に住んでゐ
ると云ふだけで、山中のどんな處に住
んでゐるのか誰れ一人知る者がありま
せんでした。國中の人達の噂によると、
この僧は非常な智慧者でどんな難病で
も、どんなになほらない不具者でも、
この僧の讀經と、不思議な呪文を聞く
と、たち所になほつてしまふと云ふ事
です。

この僧は毎日國中を、どんな小さな
村や、街でもあやしげな呪文をとこなへ

ながら歩まはつてゐました。そして不具の人達や、難病に苦しんでゐる者達をその不思議な呪文によつて救つてゐました。ですから國中の人達は、神か佛のやうにこの僧を尊んで、或ものはわざ／＼この僧のために宿をして、有難がつてゐるものさへありました。或日、この僧は街の四辻に立つて多くの人達を前に、呪方をしてゐました。「今この國には恐ろしい事が起りか、つてゐる。早くこの恐ろしいものが起らないやうに、人々は私の言葉を聞かねばならぬ。隣國の王様は今明日も知れない難病に苦しんでゐる。隣國は今ほろびかゝらうとしてゐる。そしてこの國の王様もこのまゝでゐれば、隣國の王様のやうな難病にかゝらねばならぬ。もし私の言葉に抗ふものがあれば、こゝ一年中にこの國はほろびてしまふか、非常な地震が大火が起るだらう。」かうした僧の言葉を聞きながら、或

者は、馬鹿にして「ニヤ／＼と笑つてゐるものがありました。又或者は、非常に不安な、怖さうな顔をして聞いてゐるものがありました。その時、多くの人達の一番後ろに熱心にこの僧の言葉に聞き入つてゐた一人の武士が、突然僧の前に立ちながら、「お前のいふ事は、どうやら本當の事らしい。今、お前が隣國の王様が難病に罹まされてゐると云つたが、それは本當の事か。」と訊ねました。「わしは決して嘘は云はぬ、それは本當だ。」と僧は、はつきり言ひました。「それなら云ふが、實は私は隣國の王様の家來だ。今お前が言つたやうに、王様は明日も知れないやうな病になやまされてゐられる。聞けば、お前はその呪文で、どんな難病でもなほすと云ふ話だ。金はいくらでも出すから、一つ治して貰はれまいか？」僧は何故か黙つて、その武士の顔を

見つめました。そして長い間空の方を見上げながら黙つてゐました。武士は非常に不安な氣持になつて、ちつと僧の顔を見つめてゐました。やがて僧はきつぱりとした調子で、「わしがなほしてあけてもよいが、もう遅い。」と申しました。「武士は見る／＼顔色を變へながら、「何と？ もう遅いとおつしやるか？」「如何にも、もう時期が遅い。」「遅くてもいゝから、一度診て貰ふわけにはゆくまいか？」武士は非常に熱心な調子で、幾度も頼みました。僧はいくらか心を動かされたらしく、「それでは一度診てあげよう。或は助かるかも知れない。」「では、今すぐこれから一緒に來て貰へまいか。」

「いや、それは出来ない。二三日私は山へ歸つて考へる事がある。それではをしながら、時々立ち上つて歩き廻つたり、また坐つたりして武士の來るのを待つてゐました。晝頃になつて、武士は二人の從者と一緒にこの僧の住んでゐる洞穴に來ました。「約束の日は來ました。これから一緒に來て下さるか。」「よろしい、ゆきませう。」僧はかう言つて、武士と一緒に山を下りました。國に着いたのは翌日の朝でした。王様の御前では、今日は不思議な僧が來るといふので、朝から部屋は綺麗に清められ、今か、今かと待ちかねてゐました。晝頃になつて、家來は不思議な汚らしい一人の年老つた僧をつれて、御前に着きました。多くの家來も、奥方も僧が餘り汚らしい形をしてゐるの



かう云ひ捨ると、僧は物をも云はずにすたく／＼と山の方へ歸つて行つてしまひました。武士はその由を奥方に話すために、歸國しました。三 僧は山の白雲洞と云ふ大きな恐ろしいやうな洞穴に歸ると、目をつぶりながらちつと天の一方を見つめて坐りました。そして、口には不思議な呪文を繰り返してゐるやうな文を繰り返してゐました。僧は翌朝になつてもちつと坐つたまゝで呪文をしてゐました。たうとう約束の三日は來ました。その日も朝から僧は呪文

が助かるのだと思ふと、却つてたのも

「二三日立つてから私の山へ來るがよい。山の白雲洞と云ふ洞穴の中に私はゐるか。」

しいやうな氣持になつて、僧を迎へました。

王様の部屋には、多くの家來が王様の床を中央にして並びました。奥方は王様の傍につき添つて、僧をめづらしさうに眺めてゐられました。僧は王様の顔を眺めて、長い呪文をしました。人々は不思議さうにこの呪文を聞いてゐました。

一時間程して僧は呪文をよして、人の顔を眺めました。奥方は、「王様の御病氣は治りませうか？」と待ちかまへてゐるやうに訊ねました。けれども僧はどうしたか黙つたまゝ返事をしませんでした。やがて僧は靜かに口を開きました。

「王は病氣ではない。何か思ひつめてゐる事がある。」
「何？病氣ではないと言はれるか？」
「さうだ、病氣ではない。」
「それで、何か思ひつめてゐる事と云

出しては、やつと心をはけましてゐました。
或日の夕方、三人の家來は或國に着きました。その國は非常に大きな立派な國でした。三人はもしかすると、この國の王様の處にきつと金の冠を冠つた王子がゐるだらうと、つて、非常に元氣づいて、王城の方へ歩いてゐるま



ふと……」

「思ひ當る事はないか？」
奥方や、家來は一心に考へてゐましたが、少しも見當がつかせませんでした。「解りません。少しも見當がつかせぬ。」

「さうであらう、王は世繼のない事を思ひなやんだ結果病氣になられたのぢや……」
奥方や、多くの家來は初めて見當が着いたやうに、

「よく解りました。」
「けれど世繼と云つて 子供がないとすればどこかで貰はねばならぬ。」
「それでは早速世繼の子供をさがさせませう。」

「それはこの邊の子供ではいかぬ。」
「では、どうすればよいのか。」
「すつと西の見當の國の王様に三人の王子がある。その王子の一番末の王子を貰はなければいけない。青い着物を

大きな美しい町の中央に、それは立派な、今まで見た事もないやうな美しい王城がありました。深い木立に圍まれた王城は、すつかり黄金づくりでもあるやうに、太陽の光を受けて、目をあいてゐられない程まぶしく輝いてゐました。けれども三人の家來はどうしても王城に入つてゆくやうな氣持になれませんでした。仕方がありませんの

五回

着た金の冠を冠つた王子だ。」
僧はかう言つてすた／＼と部屋を出て行つてしまひました。驚いた家來達はその後を追つてゆきましたが、どうしたのか、影も形も見えませんでした。奥方は仕方がありませんので、多くの家來達に、

「西の國の王様の處へ王子を貰ひに行つてくれ。」とお命じになりました。
三人の家來は早速金の冠を冠つた王子を探しに出發しました。

四人
三人の家來は、僧が言つた西の國に來ましたが、金の冠を冠つた王子のゐる王様はどこにもありませんでした。けれどもこの王子をさがし出さなければ王様のお生命が危いのですから、歸ることも出来ずに、あちら、こちらの國々をさがし歩いてゐました。三人の家來はがつかりして、幾度も歸國しようと決心しましたが、王様の事を思ひ

で、王城の近くにある小さな掛茶屋に入つて行きました。
「入らつしやいまし。」
年老つた女が、愛想よく三人の前に現はれて、
「何がよろしう御坐いますか。」と、訊ねました。三人は何を喰へたいとも思はないので、兎に角酒を命じました。
「お婆さん、仲々立派なお城だね。」
「え、い。」
「お婆さん、一寸訊ねるが、この國の王様には、王子がいくたりおありになるかね。」
お婆さんは不思議さうな顔をして三人の顔を見つめてゐましたが、
「何んでも、お三人おありになるやうに存じます。」
「ほ、三人？」三人は心の中で「しめた！」と思ひました。
「そして一番末の王子はもしや、いつも青い着物を着て、金の冠を冠つてゐる

られはしないか。」

「さやうで御坐います。いつも青い着物を召して、金の冠を冠つておるでやうで御坐います。」三人の家來は思はず顔を見合しました。

やがて三人の家來は、お婆さんに厚く禮に言ひながら、喜ばしさうに掛茶屋を出ました。三人は王城の前まで来ると、申し合せてやうに、立ち止りました。

「何と言つて頼んだものであらう。」

「さう、矢張り何も彼もお話した方がよくなるからうか？」

「さうだ、まあ頼んで見よう。」三人の家來はお城に入つてゆきました。そして家來にその譯を話して王様にお目通りが出るやうに頼みました。

五

三人は非常に不安な氣持になりながら、家來の出て来るのを待つてゐました。けれども家來はなかく出て来さ

うもありませんでした。

「お目通りが出来ないのだらうか？」
「さあ、お目通りが出来ないと困るな……。」

三人は心配しながら、家來の出て来るのを待つてゐました。やがて家來は出て来ました。

「お通り下さるやう……。」家來はかう云つて三人の家來を案内して、王様の部屋につれてゆきました。美しい眼も覺めるやうな王様の部屋、それは到底自分の國の王様とは比較にならない位の立派でした。三人は隣の部屋に坐つて、忝して頭を下げました。

「お初にお目通りをいたしました。隣國の王の使ひで罷り越しました。」

「さうか、苦しくない。近くによれ……。」

「恐縮に存じます。」
「して用事とは何事であるか？」
「ハ、申し遅れましたが、實は目下

五六

王様があやしげな病氣にかゝつてゐまして、如何なる名醫に診せても、とんと病體が知れませぬ。困つてゐますと、ある僧が、王様の御病氣は、隣國の金の冠を冠つた王子を貰ひ受けねばならないと申しました。でかやうに御目通りいたしました譯に御坐います。」

「さやうか、それはまことに氣の毒である。けれども私の三人の王子は世界の何ものよりも大切にしているるので、やる譯には行かぬ。」

三人は顔色を變へてしまひました。「でも御座いませうが、特別のお情けを持ちまして、いたゞく譯には……。」

「黙れ、ならぬと云ふに……。」

三人の家來は途方にくれてしまひました。仕方がありませんので、歸り仕度をしました。すると、その時、先程から黙つて話を聞いて居られた奥方は、
「あのやうに申しますものを、三人の

王子の一人位るはおや
り遊はしては……。」

「さやう……。」

王様はその時、ちつと考へておるでになり
ましたが、やがて、

「では奥方までさやう
に申すから遣すであら
う。」

「下さいますか……。」

三人の家來は思はず
大きな聲でかう申し乍
ら王様を見上りました。
「如何にも遣すであら
う。」

三人の家來は、非常
に喜んで御殿を退りま
した。

一三日して家來たち
は、王子をお連れして自
分の國へ歸りました。



六

王様初め、奥方のよろこびは大變なものでした。王様も此頃はいくらか熱が低くなつて来たので、王子の顔を見ると、非常によろこんで、以前から自分の王子でもあつたやうに、
「王子、よく来てくれた。」
と言つて、幾度もくく嬉しさうにおつしやるのでした。

僧が言つたやうに、王様の病氣は、日に、日によくなつて行つて、此頃ではお庭を散歩出来るやうになられました。そののち、僧はどこへ行つたものか、どうしても行方が知れませんでした。方々家來が探し廻りましたが、今だにわからないのです。王様は僧を探し出して、お禮をしようと思つてゐられましたが、あの山中の洞穴の中にもゐないのでした。

けれどもあの不思議な僧は、何と偉い人ではありませんか？(をばり)

◆童謡(二部) 野口雨情選

カナリヤ

新潟縣 宮本 巖

わたしの故郷はアフリカの
夢の花咲く 森の中
島で生れて島の名を
そのまま呼ばれてをりまする

ぐみ

尾道市 向井 極光

いがくのお家に
夜があけた
青い提灯消えたつけ
いがくのお家に
日がくれた
赤い提灯つけたつけ

雨だれ

神奈川県 竹内 信子

ポツタリ〜雨だれさん

石に落ちては玉が割れ
川に落ちては流されて
沙にすはれて
影もない 影もない

尺取虫

大阪市 大村 路明

尺取虫が はかつてる
朝から晩まで はかつてる
仕立屋さんに
雇つてやるか

桐の花

東京市 大島 重三

桐の花 桐の花
風が吹いたら
釣鳴らせ
桐の花 桐の花
紫色の
夢を見ろ

焚火



法螺くらべ

志村 照子



夕立のすぎた後は木も草も洗はれたやうになつて、木々の葉からは水晶の様な雫がほたほたと滴つてゐます。道端の掛茶屋に雨やどりをしているた三人の旅人達は、一寸の間にすつかり仲よくなつて、いろ／＼話をしながら出て來ました。街道を吹いてくる涼しい風がソヨソと旅人たちの袂をかすめて過ぎて行きます。三人は各々旅であつた珍しい出来事やら自分の國の自慢話やらをはじめましたが、だんだん話のはすんでくるにしたがつて、お互にまけす劣らす大きなことを云ひ出しました。

一人の旅人が、
「私の國には富士山が行水をつかふほど大きな鹽がある。日本國中さがしたつてこんなめづらしいものはありますまい。」と鼻高々と申しました。するともう一人の旅人が、

「成程それは珍しい。けれど私の國にだつてそれにまけない珍しいものがあります。横の長さが八町、縦の長さが十五町もある焼豆腐です。どうです！ こんな大きな焼豆腐はどこをさがしたつてないでせう？」と云ひました。

もう一人の旅人も負けない氣になつて、
「私の國にもなか／＼二人に劣らぬ大きなものがあります。それは幹の太さが丁度大の男百人が手をつないだほどもある竹です。長さはどの位あるか、いつも頂には雲がかかつてゐるのでまだ見たものがないのです。」

と大きなことを云ひました。すると初めの旅人が、
「成程何つて見るとあなたのお國の竹が一番珍しい様ですね。どうでせう！ 幸私はあなたの國を通りますから一つ寄つてその竹を見て行き度いと思ひますが、案内して下さいませんか？」と申しますと、二番目の旅人も、
「私も別に急ぐ旅ではなし、是非その竹を見たいものです。どうか案内して下さい。」といひました。三番目の旅人は困つてしまひました。

もとより口から出まかせにしゃべつてしまつたのですから、そんな竹が、あらう筈ありません。それかと云つて今更嘘だとは云はれませんし、仕方がありませんから、

「よろしうございます。」とにかく御案内致しませう。」といつてしまひました。けれどまさか心配です。何んとかよい工夫はないものかしら、二人の話も上の

愛知縣 坂井貞三

燃えろ／＼
天まで燃えろ
鳥の巢まで燃えろつれ
バシツ バリ バリ
メーラ メラ

廣島市 牧野眞砂子

ふわりと浮いてる
しやほん玉
てん／＼手まりのその形
その形

千葉縣 篠崎徳太郎

子山羊が草を
食べてます
子供が二人で
見てるます
子山羊の下むき
ねむたい眼

それでも子供は
見てるます

東京市 福多眞砂子

おつばい おつばい
母さんお膝は夢の國
こつくり こつくり
母さんお膝は歌の國

群馬縣 左部睦男

風が吹いて
はつばがしなだれた
土の上へおつこちた
草の上へおつこちた

新潟縣 青木羊村

雲 雀
高空高い
ひばりは 高い
一つ雲飛びぬけた

空で青くなつて考へながら歩きました。

とう／＼三番目の旅人の國につききました。
旅人はお寺の和尚様にでも相談したら何かよい智慧を貸して下さるかも知れないと思ひましたので、二人を自分の家に残してお寺にやつて参りました。そして和尚様に今度の話をすつかり致しまして、
『どうぞ助けると思つて何んとかよい工夫を教へて下さいませ。』
と、お願い致しました。

和尚様は呆れて聞いて居ましたが、

『何んと云ふ途方もない嘘を云ふ人達だらう。今度だけは私が何んとかしてやるから、兎に角明日その二人を連れて來なさい。』
と親切に云つて下さいましたので、旅人は大よろこびで家に歸りました。



その翌日になり
と、二人の旅人を連れてお寺へ参りました。そして和尚様に、
『このお二人は、お寺の大きな竹が見たいと、わざわざお寄りになつた旅のお方です。』
と、紹介せました。

和尚様はニコ／＼しながら二人に向つて、

『おー、それはようこそお寄り下さされた。だが今日早くお出になればお目にかけれたものを、をしいことにあの竹は昨ましたよ。』
と、答へました。



『それではせめて枝なりと見せて下さいませんか。』
と、もう一人の旅人がいひますと、

『いやその枝も、縦十五町、横八町の燧豆腐の串をこしらへるのだと云つて買ひに來ましたので、賣つてしまひました。』
和尚様の答に、二人の旅人は思はず顔を見合せましたが、ソコ／＼に暇をつけ

てこゝをたちさりました。(をばり)

魚屋と狐

(轉推)

明康附乘



薄馬鹿な魚屋がありました。ある朝、市場から仕入れた魚を盤臺にいつぱい入れて隣村に出かけました。それは隣村の庄屋の家で祝事があるので註文をうけてゐた品でした。隣村へ行く途中、ある殿様の御邸の所まで来ました。木通りを通ると大廻りになるのですが、此御邸を抜けると大變近道になる事を魚屋は知つてゐました。夜は明け放れたとはいへ、まだ太陽も出て居ないので、お邸では誰一人起きてゐるものはありませんでした。別に悪い事をするのではないからと、魚屋はお腹の中で辯解しながら、天祿棒を肩にヒヨイ／＼と急ぎ足にお邸の庭を横切つて行きました。やれ／＼見附らないでよかつたと思ひながら、やうやく裏口の所まで来かゝりますと、突然後の方で、

「コリヤツ！ 待て、此處は往來ではないぞ！」と唳鳴る者がありました。ハツと驚いて魚屋は、

「へッ」と云つたまゝ、その場に両手を突いてベツタリ平伏してしまひましたが、そのはすみに盤臺はひつくりかへつて、魚はゴロ／＼ころがり出してしまひました。

魚屋はもう生きた心地もありませんでした。どうか命だけはと心の中で一心に佛様をおがんで居りました。

所が「コリヤツ！」と唳鳴つた殿様が一向出て来ないで、築山の藪の陰から大きな狐が一匹ヒヨイと飛び出しました。そして、する／＼な眼をしながら魚屋の方に近づいて来ました。時々、立止つては彼方此方キヨロ／＼見廻してゐました。魚屋はそんな事とはちつとも知らず、どんなお咎めを受けるのかと思ひながら、ちつと平伏して居りました。狐は地面にころがつてゐる魚を横目に見ながら舌甜めすりして魚屋の後に行きましたが、ヒヨイと後肢で立つと尾を振りしました。そして傍にあつた秋刀魚を一匹咬へて、魚屋の首をそれでピシリ打ちました。不意をやられて魚屋は首を切られたと思ひ、ヒエツと聲を立て、そこへ平太張つてしまひました。

二

そのうちに段々日があがつて来ました。雀が巢を出てチュウ／＼鳴いてゐます。しかし魚屋はやつぱりちつと平太張つたまゝでゐます。そして「首をはねられて困つた事だ。ほん」とに情ない目に會つたものだ。」と考へ込んでゐました。

すると何處かで人の笑聲が聞えました。ハテナと思つて魚屋はそうつと横目でみると、野良に出る百姓が二人こつちをみて立つてゐます。失敬な奴等だ。俺の死んでゐるのを笑つたりして、と思つてゐると、百姓は傍へやつて来て轍を杖に魚屋の方をのぞき込んで、

「オイ魚屋さん、どうしたんだい。朝つばらから妙な事やつてるぢやないか。」と、云ひました。

ハテナこれはどうも奇異しい。俺の死んでゐるのが分らないのかしら、と思ひながら、そうつと首に手をやつてさはつてみますと、どうも首が切れてゐるやうであります。

「俺の首は、あの、胴についてゐるかい。」魚屋は顔を少しづつ上げながら尋ねました。

この間に流石の二人もこちらへられないで吹出してしまひました。

「首がとれたら、話す事が出来ないぢやないか。」

成程とやうやく気がついた魚屋は、急に大事な魚の事を思ひ出してむつくと起き上つてみました。盤臺はころがつてゐますが、魚が一匹もないのを見て、始めて狐の仕業と気がつ

いて腹が立つやら
百姓にきまりが
わるいやらで、空
の盤をかついで
ほうくの體で家
へかへつて行きま
した。殿様のお邸



では其頃になつて、やうやく起きたとみえ、臺所の方でガラ
ガラ戸を開ける音がしました。

三

魚屋はそれから大分たつた或朝、やはり早く魚を入れた盤
臺を擔つて隣村に行くことになりました。ところが例の殿様
のお邸の所まで来ると、性懲りもなくまた近道をする氣にな
つてお庭に入つて行きました。

すると運わるく、今度は眞物の殿様が一人御供もつれずに
庭を散歩して居ました。妙な奴が入つて来なと思つて築山の
上から見て居ますと、目早く魚屋が殿様をみつめました。

「やッ！ 又出たな。今度こそ。」と思つた魚屋は盤臺を其所
へ下すが早いか鉢巻をしめ直して、天秤棒をとつて築山目が
けて飛んで行きました。

「さあこい。此間はよくも欺したな。さう幾度も貴様の爲め
に馬鹿にはされんぞ。」と嗷鳴りながら魚屋は、天秤棒を振廻
して撲りかかりました。

驚いたのは殿様です。どうも始めから様子がちと變たと思
つたが、これは吃度氣狂に違ひないと思つて、どん／＼逃げ

出しました。氣狂ひ
と争つても仕方がな
いと思つたのです。

魚屋は狐が化けたの
だと思つて居ますか
らかなはしないで逃げ
るのだと思つて何處
までも追ひかけて行



きます。石燈籠をグル／＼廻つて泉水の土橋を渡つてたうと
うお庭の隅つこに追ひつめてしまひました。魚屋は追ひつめ
たが様子をみると殿様と少しも變らないし、尻尾もはえてゐ
ないので、ふり上げた天秤棒を下ろしかねて、正體を表はし
たら一打にしようとならみつけて居ます。殿様もあまり走つ
たので汗は流れるし息ぐるしいしするので、氣狂ひだつて此
上近よつて来たら仕方がないから、斬つてしまはうと刀の束
に手をかけて突立つて居ます。

そこへお庭の騒ぎがあまりひどいので、家來が三人やつ
て来ました。みるとこの有様ですから三人とも腰を抜かさな

いばかりに驚いて、

「無禮者め、殿様に向つて何をやる。」

と云ひながら天秤棒を擲取つてしまつて、尙懸れる魚屋を繩
でグル／＼縛つてしまひました。

殿様はハア／＼いひながら家來と一緒に奥の方へ行つてし
まひました。魚屋はしばらくたつた、この有様をみてゐまし
たが、だん／＼不安になつて来ました。

これは若しや本當の殿様だつたのぢやないかしらと思ひ出
したのです。

すると、自分の今やつた事が目の前にまさ／＼と浮び出て
来て、自分にさへ大馬鹿者の様になりました。一人残つた家來
が何かガミガミ云ひながら自分を引張つて行くので、これは
いよ／＼本當に首を刎ねられるのかとすつかり消氣てしまひ
ました。

お役所に引かれて色々しらべられましたが、狐に欺された
事が分つたので、ひどく叱られて、やうやく許されました。

しかし持つてゐた魚は、殿様を追かけてゐるうちに又狐に
攫はれてしまつてゐました。(をばり)



世界名作童話物語

家なき子 (つゞき)

三宅房子

さすらひの旅へ

親方と私は停車場を出ると、ミリガン夫人のあるホテルの方へ歩きました。道々私はミリガン夫人やアルチユール少年にあつてから話した後からと親方にしました。

親方は淋しい顔をして私の話を聞いてゐましたが、そのやつれた顔を見ると、親方と別れてミリガン夫人のところにあたいといひ出す氣にはとまなれませんでした。
間もなく、ホテルの前に着きました。
「ルミ、お前はこゝで待つておいで。私一人で待つて来るから。猿や犬と一しよに待つてゐるのだよ。」
親方はさういつて、つかつかと中へ入つて行きました。

私は外で淋しく待つてゐました。親方はどうしてミリガン夫人のところへ私を一しよに連れて行くのを好まないのかしら。それを不思議に思つてゐると、間もなく親方は戻つて来ました。

「ルミ！ お前奥さんのところへお別れに行つておいで。私はこゝで待つてゐるから。あと十分の内に立出するのだから。」
親方がかういつた時、私は雷に打たれたやうな氣がして、口もきけませんでした。

「お前は私のいつた事がわからないのか。何をそんなに氣の抜けた顔をして立つてゐるのだ。さア早くしないか。」

傷をつかれたやうな氣がしたのです。自分が捨てた子である事が知れることを恐れたのです。
「それはまたどういふ譯ですか。」ミリガン夫人は不思議さうに問ひ返しました。

「いゝえ、どうしてもよして下さい。」
「しかし、その外には仕方がないぢやありませんか。」

「でも、どうぞよして下さい。」
ミリガン夫人が兩親のことをいひ出さなかつたら、私はお別れをいふために親方がゆるしてくれだ十分の時間より、もつと長い時間を其處で適したでせう。しかし、もう一刻も其處にはゐられない氣がしました。

「お父さんやお母アさんはシャパノンの村に暮してゐたのだから。」とミリガン夫人がいつた時、私はそれには一言も答へないで、アルチユール少年のところへ行きました。そして兩手でしつかり、アルチユールの瘦せた手を握りしめました。アルチユールは目に涙をこぼした。

「お父さん、お母さん、お別れを告げました。私はミリガン夫人にもお別れを告げました。奥さん、私は決してあなたの御恩を忘れません。」私はそれだけいひましたが、後の言

「あゝいけません。そんなことをしてはいけません。」私は夢中で叫びました。自分の古

「でも、あの、ルミのお父さんでもないくせに。」アルチユールはまた叫びました。
「それはさうです。でもあの人はルミの主人です。ルミはあの人のものです。ルミの兩親があの人に金を借りたのです。しかし、私はルミのお父さんやお母アさんにお手紙を出して、是非家の子にしてくれるやうに頼んで見るつもりです。」
ミリガン夫人がかういつた時、私はびつくりしました。

親方がこんなに驚くほどの物をつたしたのは初めてでした。私はどうしていゝか分らないでゐました。たゞいはれるまゝに奥へ入つて行きました。

私はミリガン夫人の部屋に入つて行きました。アルチユールがしくしく泣いてゐます。

「ルミ、君行つちやいやだよ。ねえ、ルミ、行かないと言つておくれよ。アルチユール少年はすうり泣きをしながらいひました。私には口をきく力もありませんでした。ミリガン夫人は私の代りに、アルチユールにいろ／＼と言つて聞かせてゐました。

「ルミの親方は悪い人だ！」
アルチユールは泣きながら叫びました。

「いゝえ、あの人は悪い人ではありません。あの人はルミを手離せない譯があるのです。あの人はルミをそれ／＼可愛がつてゐるのです。あの人はあゝいふ自分の人のやうではない。どうして／＼立派な口のきゝ方をしました。あの人はかういつて私に囁つたのです。

「自分はルミに大事な修業をさせてゐるのです。あなた方がルミに授けて下さる教育よりはすつと／＼大事な教育をしてゐるのです。」

葉がでませんでした。私は扉を開けて外へ出ようとした。

すると、ふいにアルチユールの泣聲が聞えました。

「アルチユールさん、私はいつまでもあなたの事を思つてゐますよ。」私は戻つて行つて、それだけの事をいひました。そして、こみ上げてくる涙をすりました。

「ルミ、……ルミ、……」とアルチユールが呼んでゐます。私はもう堪らなくなつて、手早く扉を開けて外へ出ました。もうその後のアルチユールの言葉は聞えませんでした。

外には親方が待つてゐました。

「さア、出かけよう。」親方はさういつて私の手をとりました。

私は再び親方のあとについて、笠を肩にかけたまゝ雨が降つても日が照つても、旅から旅へさまよひ歩く身となりました。

その後、私は旅をしながらもアルチユール少年やミリガン夫人のことが思出されて、足の進まないことがありました。是非もう一度あの親子を乗せた、白鳥號にあひたいものだ

六七

「さう思つて、大きな何の岸を歩く時にはさつと注意をして探しましたが、たうとう見出すことが出来ませんでした。」

時々、思切つて船の船頭をきいて見た事もありました。きれいな「白鳥號」のことを話して、さういふ船を見かけた事はないかと尋ねましたが、船頭たちはいつも、さういふ船は見ないと答へました。

この頃では、親方は私をミリガン夫人に渡した方がよかつたと思つてゐるやうでした。私には確かにさう思はれましたから、自分の小さな頭の中でいろいろ、未来の空想をしてみました。ミリガン夫人は私を傍に置たいといふに違ひない。親方だつて私を渡すことを承知してくれるだらう。さうなれば一切が巧く行く譯だ。——私はそんな事を思つて、心のうちで一人で喜んでゐました。

その頃、私達はリヨンといふ市に滞在してゐましたが、暇さへあれば、私は波止場へ行つて、もしや「白鳥號」が来てはゐないかと探しました。しかし、矢張り駄目でした。たうとう「白鳥號」を見出す望みはなくなつてしまひました。私達は遂にリヨンの市を去ること

になつたのでした。もうこれから先きは河が狭くなりやすから、「白鳥號」のやうな船がこれ以上河上へ上つて来る譯がありません。ミリガン夫人やアルチュール少年にも、たうとう二度とあはれずにはまふのかと思ふと、私はがっかりして足が進まなくなつてしまひました。

その上、困つたことには冬が目近に迫つて来たことでした。毎日ひどい雨や霽が降りました。さういふ中でも、私達は、旅をしなければなりません。夜になつて、きかない宿屋に着いた時には、もう肌まで雨が通つてゐて、安らかに眠ることさへ出来ませんでした。山道を越した時などは、雨にぬれて骨まで凍るやうな思ひがしました。猿のツヨリキールは殊にいつも情けないやうな顔をして、しよぼ／＼してゐました。

親方は一日も早くパリへ着きたいといつてゐました。冬の間で芝屋の出来るのはパリだけでした。私達にはほんの少しかお金がないので、汽車に乗ることさへ出来ませんでした。途中の町や村で、お天気さへよければ芝屋をしていくらかでもお金を集めて出かけ

るやうにしてゐましたが、やがて空は曇つて来て雪空になりました。今にも大雪になりさうでした。私達は雪が降らない内に大きい町に着いて、そこでゆつくり滞在したいと思つて道を急いだのでした。

その晩、私達はある村に着きました。その宿屋に着くと、親方は私にいひました。「早く床にお入り、明日はどんな事があつても、朝早く出立するのだからね。けれども、雪に降りこめられては堪らないわよ。」さういひながらも、親方は、すぐには床へ入りませんでした。鐘の隅に腰をかけて、寒さのためにひどく弱つてゐる猿を温めてやつてゐました。猿は毛布にくるまつてゐても、苦しがつて唸き聲をたてゝゐました。

明るくなる日の朝、私はいひつけられた通りに早く起きました。まだ夜が明けてゐませんが、空は暗く曇つてゐて、お日様の影一つ見えませんでした。扉を開けると、物凄いい風がうなつて入つて来ました。「今夜はとも外へ出られませぬよ。今にひどい吹雪になりますぜ」と宿屋の御亭主は、

親方の顔を見ながらいひました。

「私は道を急いでゐるから、是非吹雪の来ない内に、向ふの大きい町まで着かなければならないのです。」親方はさういひました。「しかし、七八里はありますよ。一時間やそこらでは行けませんよ。」

でも、標はず私達は出立しました。親方は猿をつかり身體に抱きしめて、自分の身體の温みを少しでも別けてやるやうにしてゐました。犬は堅いこち／＼した道を歩くのがうれしいと見えて、先きに立つて驅けて行きました。

もう夜明けの時間を餘程過ぎてゐましたが、空はまだ眞暗でしてゐました。お日様は出て来さうもありませんでした。何處を見ても淋しいばかりでした。荒れた野原の上を風がゴーツと唸つて吹いて行きます。やがて、チラー／＼雪が降ちて来ましたが、風に吹かれてクル／＼蝶のやうに舞つてゐます。私達はまだほんの少しの道か来てゐませんでした。雪が降り出せば風が止む位に思つて割合に平氣でゐました。そ



の内にたうとう雪風になつてしまひました。どん／＼大きな雪の塊が落ちて来ました。

すばらしい勢で落ちて来るので、目も鼻も開けてゐられない程でした。

「これでは、とても町へ着く事は出来ない。何でも家を見つけて大急ぎで休むことにしよう。」親方はさういひました。私は親方がいつたのな聞いて、確しく思ひましたが、ぼたして休む家が見つかるでせうか。何處を見たら家の形も見えせん、そればかりか、村が近くにあるといふ様子さへ見えないのです。

目の前には黒ずんだ大きな森がありました。左右の丘の上も矢張り深い森でした。雪はいよ／＼／＼げしくなつて来ました。私も親方も黙つてたゞ下を向いて歩きました。犬達も、もう先きに立つて歩くことが出来なくなつたと見えて、私達の跡について歩きました。早く休む家を探したが、つてゐるやうでした。しかし、道は一向にはかどりません。親方は何か捜し物をするやうに切り／＼左の方に氣をとられてゐましたが、私には一とことも口をきりませんでした。親方は何を捜さうとしてゐるでせうか。

もう深い森の中に入つてゐました。道はまつすぐ一本道でしたから、進るものがないの

で、嵐が餘計にひどく當りました。でも、私達は行くだけは行かなければなりません。足はだん／＼深い雪の中へもぐり込みました。その時、親方は何にもはずに左の方を指さしました。見ると、その方向の空地に堀立小屋のやうなものが見えました。

私達はすぐ様、その小屋へかけ込もうと思ひましたが、そこへ行く道が雪で埋れてゐるので、大變困難をしました。しかし、やつとの思ひで小屋へ行く道を見つけることが出来ました。

その小屋は、丸太や柴を束ねて造つたものでした。屋根も木の枝の束を積み重ねたもので、雪がその間から流れこまないやうに堅く網でしめてありました。

堀立小屋の前へ着いた時、犬達はうれしがつて元氣よく私達の先きに立つて駆込みました。私も犬達と同じやうに嬉しかったのです。「森のどこかに樵夫の小屋があるに違ひないと思つてゐたが、果してあつた。もういくら雪が降つても構はないぞ。」親方は安心してやうにいひました。「さうですとも、雪なんか幾らでも降れた。」

てゐる。屋根もあるし、焚火もあるからね。」親方のいふ通りに違ひないと思ひました。しかし、食物のないことも考へました。でも私は何にもはずにぬました。

「どうせ、また雪が降つて来るだらう。途中で雪にあふのはたまらないな。夜になると餘計に寒くなるだらう。今夜はこゝで暮す方が無事だ。足のぬれないだけでもいいから。」と親方はいひました。

さうだ、全くこの小屋で今夜は過す外ないと私も思ひました。たゞしかし、お腹のへるのを我慢しなければなりません。

夕飯には親方がさつきの残りのパンを分けてくれました。ほんの少しありませんから、私達は屑も残さずがつ／＼食べました。

雪はまた降り出しました。夜になつても大きな雪の塊が落ちてゐました。私は少しも早く眠つたが、いと考へて、寒間火でかわかして置いた皮の着物にくるまつて、焚火の前で横になりました。

「お前はお眠り、私の眠る番になつたらお前を起すからね。この小屋の中にあれば恐ろしい眼が出て来る心配はないが、二人のうちど

私も大威張りでいひました。幸ひ、小屋の中には赤煉瓦を五六枚敷の形に積んでありましたから、何よりも先きに火を燃やさうと思ひました。薪には不自由してゐたので、たゞ壁や屋根になつてゐる丸太や木の枝を引抜いて、それなぐれば直ぐと間に合ひました。

ちぎりに焚火がホー／＼燃え上りました。小屋の中は煙で一ぱいになりましたが、そんな事はその場合少しも苦になりませんでした。私は腹這ひになつて、フー／＼火を吹きました。犬は火の周囲に集つて、首を伸しておれた背中を乾してゐます。

猿もやうやく元氣が出て、親方の上衣の下から首を出して部屋の中を眺めてゐます。其處が安心の行く場所である事を知つた猿は、ヒョイと親方の上衣の中から飛出して、焚火の前の一番上等の場所を占領しました。そして、細い二本の腕を出して顔ながら火にあたりました。

私の親方は苦しい目にあつて、経験の積んだ人ですから、その朝出發する時、ちやんと途中の食物を用意して出ました。パンが一本

とチースのかけを持つてゐました。

みんなは食物を見た時、をどり上つて喜びました。しかし、親方はもう一度晩飯にたべられるやうにと、その内の少しを残して置いたので、みんなは十分たべることが出来ませんでした。犬達はひどく不平のやうでしたが、あきらめて焚火の傍で眠つてしまひました。私もそこで一しよに横になりました。

私はどの位眠つたのでせうか。目がさめた時には、もう雪はやんでゐましたが、膝が埋まるほどに積つてゐました。

「何時だらう」と思ひましたが、時計がないので分りませんでした。親方は私に皮の着物を買つてくれる時に、ながい間持つてゐた時計を賣拂つてしまつたのです。まだそれ程遅い時間ではないと思ひましたが、空がくもつてゐるので、さつぱり分りません。物音一つ聞えませんが、私が小屋の入口に立つて外を眺めてゐると、親方の呼ぶ聲が聞えました。「お前へ出て行くとおつてゐるのかい。」と、親方が尋ねました。「私には分りません。」

「さうかい、私はこゝにゐた方がいゝと思つ



つちか一人は起きてゐて、火の消えないやうに番をしないといけない。雪がやむと、ひど

い寒さになるからね」と、親方もいひました。私はさつ／＼と眠りました。

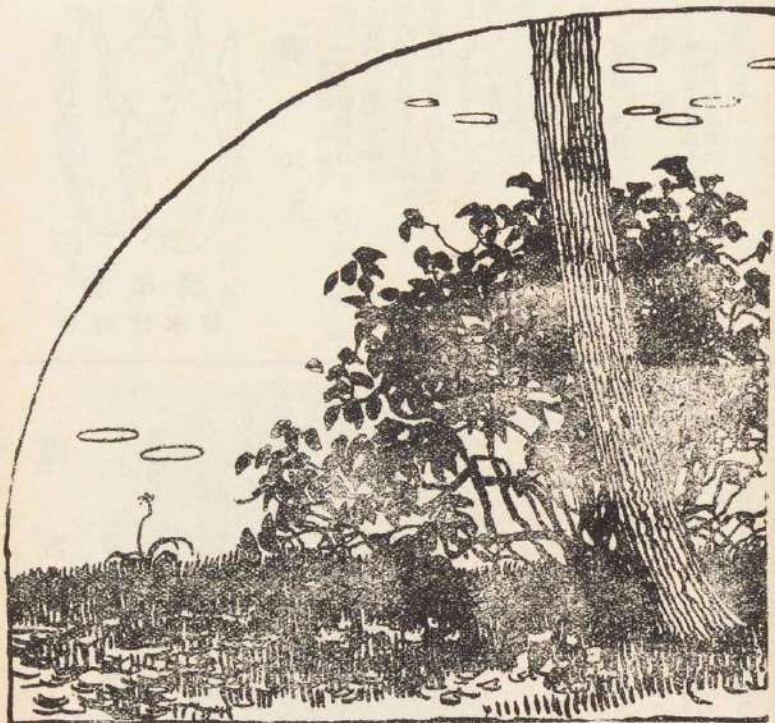
親方が私を起した時には、夜は半分更けてゐました。焚火はまだ燃えてゐました。雪はいつかやんでゐました。

「今度は私の眠る番だ。火が消えさうになつたら、こゝに薪が澤山あるからこれをくべるんだよ」と親方はいひました。私は親方と代つて焚火の傍に坐りました。

親方は猿を自分の外套ですつぱりとくるんで、焚火の前に身體をのばして横になりました。そして、間もなく規則正しい息づかひをしながら寝入つてしまひました。私は一本一本薪をとつて音をたてないやうにくべました。

刻々と時間がたつて行きました。親方はおだやかに眠つてゐます。犬も猿もいゝ氣持に眠つてゐます。焚火の火がびち／＼と火花を散して屋根の方まで上つて行きます。そのほかには物音一つしません。長い間、私は火をながめてゐましたが、その内にう／＼と我知らず眠つてしまひました。

さて、この間にどんな恐ろしい出来事が起つたのでせうか。(つゞく)



楡の花

花はやさしい

泣くな はつ夏
花がちる、

お星さん

一度逢して下さいな
死んだ母さん

お星さん



楡の花

人見東明

楡の花ちる
木に倚つて、

空を仰いで
星を見て、

「死んだ母さん



詩年幼
選水牧山若

春の山(賞)

長野縣上伊那郡
東春近校尋四

下平 愛子

春になつて初めて昨日
山へ行つて見た
鶯がかはいらしいこゑで
ないてゐた
いろ／＼の木に
かはいらしい芽が
たくさん出てゐた。

評、優しい言葉で柔かな景色を正直に歌つてある。(牧水)

蛙(賞)

愛知縣海部郡十四
山村西部校尋六

市野 亨

家の中へ
蛙が
はひつて
来た

評、夏の夕方の景色が短かい言葉の中によく出てゐる。(牧水)

こんぼ(賞)

千葉縣夷岡郡
鴨海校尋三

山崎 景三

とんぼがやねへとまつた
石をなけたら
おかあさんにしかられた
とんぼはしらすにとまつてる

評、へんな顔をして君は笑つたでせう。(牧水)

弟

大阪府南久寶
寺町二丁目

廣瀬 貞子

私の弟がうんどくわいで
大きいかばんの中に
チョコレートを一つ入れて
よろこんでゐる
野、なんとかばい、弟さん。(牧水)

綴方

編輯部選

平和博の花火(賞)

東京市下谷區
上野稲木町

上村 賢三

家では皆なゆふはんをすませて庭の方の八疊の方に集まつて色々の話をしてをりますと、急に「ブドン」と地ひびきでする程大きな音がしました。お母さんも兄さんも僕も「あッ」といつてゐると、今度は前よりもすつと大きく「ブドン」と音がしました。ガラス戸や障子までびりびりとひびけました。アツ大きい音だ、何だらう」と僕が云ふと兄さんも「さあ何んだらう」と云ひかけましたがあまり音が大きかつたので、むねがどきんどきんして来ました。と、兄さんが「ほんたうに今の音は何んだらう。するぶんおどろかせるなあ」と云ひながらまどの方へ行つて見ました。外でもわい／＼さわいでゐる中に色々はなし聲が聞えます。急に音がするんだものほんたうに驚いちや

七四

つた」ほんたよ、むしのどくだ、小さい子などは目をまはしちやあ」などと話し合つてをります。僕はお母さんに「悪いやつがばくだんでも投げたんぢや無いかしら」と申しますと、母も「警察が近いんだからそんな事はないだらう」だつてするぶん大きい音だつたからなあ」と同じ事を云つてゐると、又「つどーん」と来ました。と、思つてゐる間もなく又耳もはりさけさうに音がして来ました。兄さんはまどの方から走つて来て「博覧會の花火だつてさあ」と云ひました。だつていつだつて花火をあけたつてあんな音はしないんでせう」と私がいふと、兄さんは「花火だよ、近くであけたんだよ、だから二度音がするだらう、あの一度目の音は花火をうち上げる音でね、二度目の音のするのは上でひらく音だよ、だから初めどーんと鳴つたら耳をふさいどくとい、んだよ」とをしへてくれました。花火だと聞いていくらか安心しました。が、何だか気がおちつきませんでした。

八田先生の死(賞)

大阪府天王寺
師範附屬尋四

松本 通保

つて學校へ行つた。まだ皆な集つて居なかつたので少しひまがあつた。八田先生はい、先生であつた。やさしいしづんだ先生で、いつも僕達のことを思つて居られた。病氣になられた時先生方が御見舞に行かれる度に僕達のことを心配して聞かれたさうだ。そのことを思ひ出し悲くなつて涙が出さうになつた。



夜の自分(賞)

千葉縣山武郡
東金校尋六

土屋 博

七五

橋本先生が八田先生をのせた自動車にこゝを通つてもらふことにしたから、各自に禮をせよと言はれた。しばらくして僕達はならんで門の外へ出た。そして八田先生の自動車の来るのをまつた。さすが僕もこはく思つたが、自動車きた時はそんな心持はなかつた。

お月様

千葉縣夷隅郡 山崎 正明
鳴海校尋四

お池の中に
お月様一人
さびしがる

評、たいへんよいと思ひ、少しませてる
ると思ひました。(牧水)

蛙

愛知縣海部郡十四 木全 清一
山村西部校尋六

蚊がくものすに
かゝつた
下でかへるが
見て居る

評、これも夏の夕暮のいい寫生です。
(牧水)

人

愛知縣海部郡十四 安井 初清
山村西部校尋六

誰やらが
おこつて
道を行く

評、何でもない様でながく面白歌だ、こ

れも寫生でせう。(牧水)

か

仙臺市木町 高橋 賢一
通校尋五

小川の底の
しよろ／＼かにが
目玉を出して
どこか見てる

評、蟹の目玉はどこを見てるか、ホントに
わからない。(牧水)

ひなた草とお日様

大阪府泉南郡 正吉
谷川校尋三

お月様がてつてゐる
ひなた草もさいてゐる
今日もまひるのさいちゆうに
まつかのひなた草が
さいてゐた

ごなりのよつちやん

茨城縣茨城 山崎 女子
郡竹原校尋三

となりのよつちやん
なくときは
おこつてどこでも

つばめのす (賞)

逸 名

つばめのす



けた。自動車
は電燈がつい
て居て明るか
つた。
八田先生の
ねて居られる
ふとんが見え
て居た。
ぐるりには
八田先生の父
母や兄弟姉妹
さん達が居ら
れた。自動車
は行つてしま
つた。
空の星も悲
しさに青く
光つて居た。

のどがいたかつた時 (賞)

愛媛縣越智郡 越智 イセヨ
富田校尋六

「いせや、もう裁縫なんかやめてやすん
どらんと、あたまが又ひどくなつて學校
へ行けんやうになつたらどうするぞう」

とお母さんにはれた。二分ほど立つて
「もうやめる」とへんじしたがまだやめる
その上のどがいたいので尙更こまつたの
で、お父さんにいふとあーんと口をあけ
さしてのどのおくをのぞいたが、「見え

妹とお母様

京都府中郡 澁谷 文明
三重校高一

んけんどこはいい事はないけん、しんばい
すな」といひすて、たばこをのみかけた。
あくる日もやつぱしのどはなかなか
りはしません。ほんとにかなしい。その
上ごはんがのどへつまつてこまるから
「たべん」といふと、「すこしでもたべい」と
いつてすすめてたべさします。そのあ
くる日になつてもどがなほらないので
其夜「やいとをすゑてやるけん、びきじ
やけん」といつた。ごはんの時私が「の
どがいたい」といつてつらがる、「ぎや
うさんな事いふと人が笑ふぞい」としか
られた。するとお父さんが「そがいにい
はいでもおいしやさんにでも見てもら
へ」といつたので、私は「いやじや、は
れて切るやうになつたらどうしように
い」といふと、兄さんが「ばかいふな」と
笑ひました。するとお父さんが又「そ
れでも先きの事はわからんぞ」といつた。
私はかなしくなつたが、その夜やいとを
すゑてもらふと「ねつがしる」といつて
少しすゑたきりであつたが、やいとがき
いたのかだん／＼よくなつて、今ではす
つかり直つたので私はうれしく思ひます

ゆうべ見たゆめ

愛知縣海部郡十四 堀田 友治
山村西部校尋六

ねてしもう

うちのほち

福島縣石川郡澤田村澤田校尋五

うちのほちはよいほちで

わたしがでるとついできて

子供がおふとうちへきて

ごはんをたべてねてしもうた

雀の死

慶應義塾普通部一年 柳 重 徳

チチチチ一聲鳴いたけど

それきり鳴かなくなりました

バタバタはばたきましたけれど

それきりうごかすなりませんでした

まあ面白いおめをみてたけど

おめももうごかすなりませんでした

えんごつ

山梨縣西山梨郡千代田校尋六 米山光章

へいたいやしきの

屋根の上

えんとつ

一本たつて居る

さびしいやうに

たつて居る

みてゐる中に

けむりだ

雨

東京市牛込區市ヶ谷臺町 伊藤登良男

雨がざあ／＼

ふつてゐる

人はみんな

かさをさして行く

守り神

大阪府西成郡今宮第四校尋六 芋玉政之

月の守り神

歩けば歩く

とまればとまる。

蟻

尾道市久保小学校 石井 政子

今日もまた

ありの

さうしき

どこの焼場か



初夏の景色 (賞) 三重縣第二縣立 重第 三立 重第 二縣 名尋 桑校 町六 不 破 義 幹

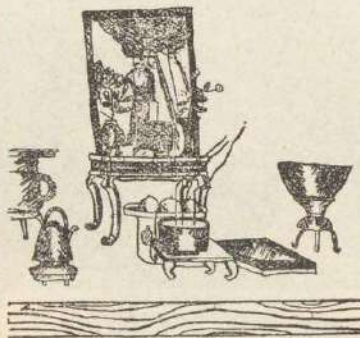
私はゆうべ一人で寝て居ると、戸の外でどろぼうが戸をたいた。私はびつくりしてふとんの中へ頭をつつこんで居ると、どろぼうは戸をこはしてはいつて来ましたので、私はびく／＼してゐると、私のふとんの上へ来て、金をださんところしてしまふといひました。けれども私は、だまつてぶる／＼ふるへてゐると、

地震

茨城縣眞壁 柳 章

俺がうす暗いランブの下でござう／＼と風の音をかすかに聞きながら勉強して居りました。戸が度々風に吹かれてガタン／＼と左右に動いて居りました。家の人にはダウ／＼と眼をこすつて寝て居りました。一人だから淋しくなつてふとんの中にもぐりこまうとしたら、急に風があら

くなつて来ました。すると障子がコソコソとしづかに動き初めたかと思ふと、ガタ／＼と勢よくゆればじめました。障子のおつさけ紙がヒラ／＼とプロペラの様に動き出した。節穴から風が吹きこんで来て、ランブの光がきえさうにフラフラリと動いて居ます。隣の家では「起きろろ／＼」とさわいで居ます。らんぶを持ち出して庭をかけて歩つてゐる。俺はふとんの中へもぐ／＼もぐりこんでしまひました。ため息もつかすにちやくまつて



床の間(賞) 不明 慶徳 宏

居りました。弟と母やんは「ううう」とやう／＼と眼をさました。そして「大風でも吹いてゐる氣になつて平氣でねて居た」とふとんの中から首出して、たまけた顔付で云ひました。俺ももつくりと動きはじめた。首を出して見ると、いつものまにかあかしがきえて居りました。壁のすき間からお月様の光りが青白くなつて見えます。未だ家はごとん／＼と動いて居ます。庭さ出で見たら、土がもつくり／＼と動いて居りました。母やんは弟をだいて庭さねほけ顔で出だして来ました。

かがし

新潟縣中頸城郡名 竹内ヨミ

私の家では今日か、しを立てました。二三日前すぢを蒔いたんですから其の番をする爲です。其のか、しはかんからをもたせられて立たせてあります。私の家の田圃は遠いから、か、しは一人ほつちですうと／＼奥山に雀や鳥がいたづらをするといけないから、家のお父さんの言付で田の中で一人ほつちで番をしてゐま

わからない。

昨日の日暮

香川縣綾歌郡 西川 コユキ
飯野校尋六

妹は大きなかさをさし
足にはわたしの下駄はいて
細いく道の上を

歌を歌ひつつ進み行く

子 供

茨城縣眞壁郡 齋 藤 友 子
大箕校尋五

くるまにのつてゐることも
ばんざいをしながら
さかをのほつて行つた

學校の前

山形縣北巨摩郡 五 味 久 春
郡多麻校尋五

學校ノ前ヲ
ニラシヨツタオツチャン

ムイカラジヤツボヘ

シヤツ一マイデ
イソイデタ

かはいさうな光ちやん

千葉縣山武郡 猪 野 ユ キ
東金校尋六

かはいさうな
光ちやんは
この間のばん
しんじやつた
私はゆめの
やうにおもつてる。

月

大阪府泉南郡 辻 里 信 夫
谷川校尋三

ゆふはんすんでから
うちのえんがはへ
でてみましたら
月がきらきら
光つてゐた

木

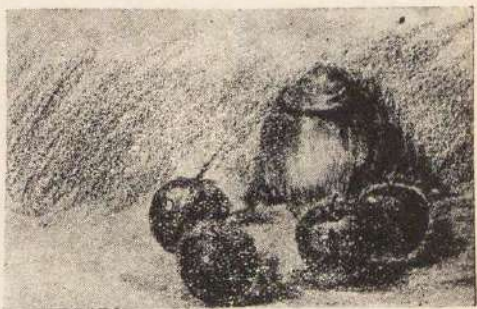
山形縣山 鈴 木 ハ ル
邊校尋三

松の木のかこり
木の葉ちり
松ばかりのかこり
木の葉ちり

石

山梨縣西山梨郡 小 松 金 光
千代田校尋五

石を一つ
どてほりへ
はたつこめ



（賞）ごんり
横濱市三ツ橋一丁目九番
福田 子

日でも風の吹く日でも忠實に鳥追をして
秋まで居るのです。かゝしさんはきつと
山の中の田で一人ぼつちで淋しさうにし
て居るでせう。

か が み

新潟縣西頸城 黒 須 正 枝
郡青海校尋四

私は昨日鏡の前へたつてかほをうつし
てをりました。すると私のかほが、なん
だか黒いやうにうつりましたので私はふ
しぎにおもひました。いつでもよしちや
んが「黒須だからかほが黒い」といつてを
りましたので、やつぱりよしちやんのこ
とはほんとだなどとおもつてゐますと、い
つのまにかあくびが出ていきが鏡へたく
さんについて白くなりました。けれどもか
まはないでおきますと、水になつてなが
れて來ました。私が其水を手にためてそ
れでかがみの上に字をかいておくと、母
さんが来ていけませんと云ひました。

ま つ り

茨城縣眞壁郡 山 口 さ く
大箕校尋五

す。それは丁度私達の日曜日の日でした。
私は苗間の水を見に行つたら、此の熱い
日にみのかさをつけて一本足でしょんほ
りつつ立つてをりました。其の日の夕
方です。急に空が曇つて夕立になつて來
ました。それでもかゝしは動かすにた
わの一本足をふんと立て、ほろ／＼な
みのかさを着けて、雨にじつくりぬれて
田の番をして居りました。かゝしは雨の

きました。男らがおにごつこやしろふみ
をやつてゐて、私をたまげらせたりし
ました。なには節をはじめると、みんな
ざしきへすわりました。ランブの下でこ
やこやさわいでゐたので「しやべんちや
ね」といはれました。それでもしやべつ
てゐたので「だまれ」ととなられました。

なには節はさくら宗五郎のところをや
りました。中ごろまでやると、男らは大
ていねむつてしまひました。「はじめだけ
きいてればいいのか」ほだんべな」など

といつてゐました。二人か三人のこして
みんな眠つてしまひました。私は、おば
ちやんがむかひにきてくれたので、すこ
しきいて家へかへりました。

三上先生

青森縣北津輕郡 葛 西 ア イ 子
元村崎元校尋六

三上先生はほんとによい先生でした。
村に來てから六年になりましたが、今年
故郷の弘前に行つてしまはれました。毎
日々々ニコ／＼したお顔で私等に種々な
事を教へて下さいました。

三上先生が弘前に行くとき、
私は悲しくてかなしくて、教壇
で先生がお別れの言葉をのべて
りましたが。眼も耳もボーッと
してちつとも先生のお顔を見る
事も、お話しをきく事も出來ま
せんでした。後でお友達からき
いた事ですが、先生もその時泣
いてゐたといふ事です。
私は三上先生が又此の村に來
るやうに祈つてをります。



私（賞） 神戸大開通 前濱 正 子
五丁目六〇

いたづらな リス

梅田龍子
(十二歳)

或森の一本の木にリスのお家がありました。その家はお父様とお母様、リス太郎にリス子の四人でした。
リス太郎もリス子も生れつきおてんばでした。ですから二人は機械操縦が上手でした。おにごっこをしてもおになつた事は一べんもありません。お友達のリリス吉君や、リス代さん達は、だれでもこのおてんば者を相手にしません。
困つて居るのはこの二人のお父様やお母様です。二人のおてんばには困り切つて居ます。しからうと思つてそばへよぶと、お父さん達のすきなみて飛び出します。お母さんは、その後をおつかげようとするのですが、早くしてゝともおひつきさうもありません。



或日の事、二人はおてんばをやつて遊んで居ると、向ふからテアツチョのおまはりさんがきました。二人はいつものいたづらな考へておまはりさんが石段の所まで来た時に、二人はソリット行つて後からドンと勢ひよくつきましたのでたまりません。テアツチョのおまはりさんはコロコロとまりの様にころがりおちて行きました。二人はおまはりさんのころがり方があまりをかしかつたので「アハアハハ」と笑ひました。
おこつたのはおまはりさんです。眞赤になつていたいのもわすれてドシシとおつかけてきました。このおまはりさんは、村で一番早いのですから、さすがの二人もおひ附きさうになりませんでした。けれどこのおまはりさんは、早足のくせに木には上るのが遅いと言ふ事をかかれてからさいてゐましたから、二人は大急ぎで木に上りました。そして、「こゝまでおいで、甘酒進じよ。」と買下し

◆童謡(二部) 野口雨情選

ゆめのはし

福島市 荒井彩子

一のはし
二のはし
三のはし
ゆめのどへ橋
まだ長い
鈴

鈴

東京市 舟橋清子

わたしの鉄の
可愛い聲で
リン／＼リン
父さん懸し
母さん懸し
リン／＼リン
学校の帽子かけ

学校の帽子かけ

朝鮮群山 土居豊

朝、学校へ来てみれば

帽子かけに
黒んほが
づらりと並んでた

港

大阪市 飯田満佐子

ボ- ボ-
港でお船が
ボ- ボ-
お船が 港で
ボ- ボ-
ボ- ボ-

かなしい

朝鮮京城 秦明順

かなしい かなしい
なぜかなし
お金がなく
かなしいぞ
それならお金をやらうかな
下さい／＼下さいな

お人形

愛媛縣 阿部早子

かこの雀

島田信一
(十五歳)

ある朝、裏の竹藪の日當のいゝ草原に、お祭草が一本、寂しさに咲いてゐました。竹藪では大勢の雀達がチュウ／＼チュウ／＼とうれしそうに鳴きながら遊んでゐました。
やがてお日様が強く照りはじめました。お祭草はうれしそうに朝風にゆれました。朝露にぬれた草地はゆら／＼とかがゆるふが立登りました。雀達は草に下りてチュウ／＼唄ひながら餌をひるひはじめました。一匹の子雀はお祭草の根元に来て拾ひはじめました。
子雀は知らずにお祭草の根をつましました。
『いたいッ！』お祭草は思はず大きな聲で叫びました。
『どうもすみません。さぞいたかつたでせう。』
と、子雀は直ぐにあやまりました。お祭草

はばつかしくなつて、

『いゝえ、あなたが悪いのでありません。私がこんな所へ足をだしてゐるのが悪いのです。』と言ひました。子雀は言ひました。
『いゝえ、さうではありません。私が氣をつけずに餌をひるつてゐたのが悪いのです。ごめんさい。』
その時外の雀達はチュウ／＼と大きな聲で啼きながら藪の中へにげこみました。子雀は驚いて逃げようとしたが、にげられずいゝそいでお祭草のかけにかくれしました。後の方でズド／＼と空銃銃の音がしました。子雀は夢中で藪の中へ逃げこみました。



た。おまはりさんは、



『せつかくこまでおつかけて来たのに、こ
こでがしては大變だ。この早足の名人が子
供にまけては名が聞かえな
くなる。』といって上れない
のをむりやりに上つて、や
つと上れたと思つておつか
けると、リス太郎もリス子
も二人共おまはりさんが一問位近く来た時
に、二人は何か小さい聲で話すとおまはりさ
んの手が肩きさうになつた時に、二人は『一
ツ二ツ三ツ』といつて木からとび下りまし
た。

びつくりしたのはおまはりさんです。『ワ
ー』といつて、たふれさうになりましたが、
好いあんばいに木につかまつたのでおちませ
んでした。下ではリス太郎とリス子が、持ち
合せてゐたお菓子をみせびらかしながらムシ
ヤ〜と食べながら、
『うまい〜』とリス太郎が先になつて言ふ
と、リス子も
『おいしい〜、ほんとうにおいしいわね。』と
いつておまはりさんに、
『あなたもほいでせう。』と言ふと、おまは

お人形さん

一人ほつちはさびしかろ
かはいいい人形の
めんめから

あついなみだがこほれてる

すゞめ

新潟縣 清水秋太郎

すゞめ すゞめ

ないてゐる
もしも 子を
とられたか

子ねこ

大阪府 中道光二郎

うちの手ねこは
じやれてきた
目がきんきん
ひかつてる

水車

香川縣 佐々木綾子

山の水車は
ギツコングー
一まはり廻つて
ギツコングー

時計

茨城縣 吉田ます

おら家の時計は
ねほ時計
ねちをかけても
すぐ休む
おら家の時計は
ばか時計

ごろぼう鳥

東京市 松川末子

どろぼう鳥が
おとなりの
柿をぬすみにやつて来た
長い竿を見せれば
かつこく〜にけてつた



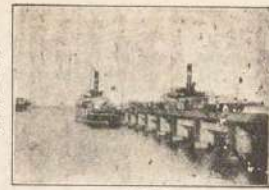
『チエツ、またうちそ
こなつたか。』と、子供
が空氣銃を持つてうら
めしさうに數を見つめ
ながら、祭草をふみ
つけて行つてしまひま
した。何にも知らずに、
……
雀はしばらくして數
の中から顔を出して見
ました。直ぐにお祭草のふみつけれられてゐる
のを見付けました。子雀は急いでお祭草の所
へ下りて見ました。チエツ〜と悲しさうに
泣きながら幾度も、お祭草のまほりを廻つて
ゐました。
『春江さん〜姉さんてば、あすこに雀が一
羽何にかしてゐるわ。つかまへてしまひませ
う。』
『え〜つかまへませう〜』二人の女の子は
草の上にはつて、そつと手をのびしました。
『もう少しだわ。』と一人の少女が囁くと、雀
はチエツと一聲ないて飛上りました。どう
したのか子雀はバタ〜とばねばたき

をしながら、くる〜と舞ひながら地におち
ました。
『姉さん、雀がおちてよ。早くツ』と、一人
の女の子が言ひながら駆け出しました。姉も
駆け出しました。雀は手の上に乗せた時は身
動きもしませんでした。
『どれ〜、』
『ほうら可愛い〜でせう。』
『可愛い〜のね。あら、どうしたんでせう。』
眼をつぶつてゐますわ。』
『あれ、ほんとうに。どうしたのでせう。』
その時雀は眼を開きました。さうしてチエ
ツ〜となきました。子雀はその日から少女
達の家へ倒れることになりました。
お祭草はあの日枯れました。

りさんは、
『い〜や』とはいひましたが、ほんとうはほ
しく〜たまらないのでした。おまはりさ
んが下よ〜とする所を早くも見つけた二人
は、口には出さずた〜目と目で話すだけでし
た。二人は大急ぎでお菓子を食べ終つてわざ
とおまはりさんの下りるのをまつてゐる様
に見せておいて、おまはりさんが来ると、にげ
るつもりなのです。
それともしらすおまはりさんの方では二人
がにげないでおとなしくまつてゐるのだと思
つて、ユツクリと下りて来ました。おまはり
さんが下りて来た時に、二人はどん〜にけ
て行きました。おまはりさんは、
『ヤツ〜：だまされたか〜：くやしい。』とい
つて又どん〜おつかけてました。
悪い事をした二人は、あんまり一生けん命
ににげないので、みちなまがへて森の一番お
くへはひつてしまひました。そこにはよ〜く
んくわをするワン子さんとワン子さんのお兄
さんのワン五郎さんもゐました。二人は
『アツ〜：大變だ〜。はさみうちだ。』と言
つてゐる所へ、さつきのおまはりさんがきて
二人をつかまへてひどいめに合せたので、二
人はとう〜いたづらを止めてしまひまし
た。めでたし〜。(をばり)

金の星講演部報告

沖野先生の朝鮮講演巡り(第二報)



(元山棧橋)

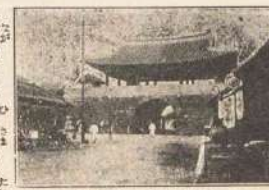
京城第一信 (五月二十七日)

京城第二信 (五月二十七日)

今日は荷物の整理をします。大ぶん疲れました。其かはり鳥(七つの子)と「はとりさん」の歌は願る上手になりました。多分これだけは、三浦環さんも満足して居ります。昨夜八時に元山棧橋を渡つて京城へ入りました。今日までに一萬七千二百人に話しました。

京城第三信 (五月二十七日)

本日京城日報社へ行つての歸りに本屋へ立寄つて見ますと、「金の星」がありま



(門大南開)

は流れてお日様の(太陽)中へ入りますと云ひました。私は夫れを子供の間違へだと思つてゐるが、其時に川を流れた舟は本當に天へ昇つて星になつたのです。

到る處非常に歓迎されて、只今京城に入りました。今日は陰城といふ所で朝鮮人兒童四百人に話しました。又たにせものかと思つて取つて見ると、いつのまにか舟が星になつてゐました。私が小學校で教へてゐる時、川の水は流れてタイヤウ(大洋)に入るといふのを或る子供が「水」と云ひました。私は夫れを子供の間違へだと思つてゐるが、其時に川を流れた舟は本當に天へ昇つて星になつたのです。

京城第四信 (五月三十日)



校學等高子女明淑

朝鮮の女學生は實に美しいです。今朝こゝで五百四十人の學生に話しました。四五百人の大人小供に話して何れも大變に喜ばれました。今日は朝から三回話して、これから大人に話して行く所です。こゝでは「金の星」の讀者が大分居ります。

仁川第一信 (六月二日)

昨廿一日こゝで一千八百人の學生と六百人の大人とに三回の話をしました。こゝでは「金の星」といふ名が知られてゐました。今日京城で三回の話をして、京城を一先づ切り上げます。

仁川第二信 (六月二日)

昨夜百五十人の大人に話しました。發起人は郡守と警察署長です。今日迄四十五回、二萬五千人の聴衆を得ました。

南大門にて (六月十一日)



門武玄

咸興の方から京城へついで平壤へ行く所です。京城へ歸つてみる時、汽車の中へ迎へに来てくれた鐵道社員がこんなことを申しました。「今日淨土宗の坊さんがお伽ばなしをさせてくれと頼みに来たので、して貰ふと、まゝ子いぢめと泥棒の話を説教されて困りました。私はこの間、父兄に、そんな話を話してはいけないと演説したので、私は面白く聞いてゐると、社員はまたかう云ひました。「しかし最初に話した小娘の話は、善かつたです。夫れは獵夫が山へ行つて猿を射つて来た所が……」と云つたので、私は

元山第一信 (六月五日)

今日この港に來ました。今晩は大人に明日は小學校と中學校で話します。京城からこゝへ來る間は丁度箱根のやうな所です。

高麗の舊都開城にて (六月五日)



校學立公院里沙

高麗の舊都開城で今日、小學生八百人、中學生四百人に話しました。只今京城へ歸りました。到る處で「七蝠の歌」と「七つの子」と「母どり」とで講演してゐます。ゑはがきは大歓迎です。女生徒の感想では「かまど姫」が一番いさうです。

咸興にて (六月八日)

無事です。からすの聲は大分かれまし

開城第一信 (六月九日)

昨夜こゝへ來ました。汽車の中に前日私の話をきいた女學生が十四五人ゐて、私に「母どりの歌を教へるとねだりましたので、たうとうそれを教へました。それから列車の中で話をせがまれて一つしました。「金の星」の讀者が七人ゐまし

「其の猿の子をチヨンと云ふんでせう。」と云ひました。「へえチヨンです。先生はどうして御承知ですか。」「夫れは僕が作ったんですよ。」「さうですか。私共は大笑ひをして停車場を出しましたが、社員が、「僕はそんなよい話が日本にあると知らなかつたですよ。」と云つたので三人は大笑ひをしたのでした。五月十日より今日まで五十六回の講演、聴衆二萬九千五百七十人でした。

野口雨情先生の童謡講演

▽西校童謡會(埼玉縣西町) 野口先生を中心とする聯合教育會主催の童謡講演會が六月九日に同校で開かれました。午前中は尋常六年より高等科二年迄の五百餘人の子供さん達の爲めに、午後からは聯合教育會の先生方のために、童謡と子供の教育について野口先生の講演がありました。同地方で童謡の講演會が開かれたのは初めてのこと、子供さん達に

▼平壤にて(六月十二日)
音に名高き玄武門のある所へ来ました。昨日は大人五百人に話し、今日は千七百人の子供さんに話します。

▼沙里院にて(六月十六日)
昨十五日この學校で話しました。昨日から三回話しました。日本の子供さん三百人、朝鮮の子供さん五百人、大人二百五十人に話しました。

非常な感動を與へました。これからますます野口先生の童謡が同地方の子供さん達に歌はれることとせう。
▽西丸町路傍童謡講演(東京小石川) 六月十一日夜八時から、野口先生が、貧民窟で有名な東京小石川西丸町の路傍に立つて、童謡のお話をしたり、童謡を歌つたりして大勢の貧しい家の子供さん達に聞かせました。子供さん達は、どんな

八八
に喜んだこととせう。野口先生の羽織の袖や袴につかまつて、涙を浮べて聞いてました。野口先生も涙を浮べて幾度も幾度も歌ひました。往來の人々も皆立停つて、聲一つ立てずに聞いてました。嘗ては、第四皇子澄宮殿下に、御内命によつて自作童謡「千代田のお城の鳩ほつほ」を謹書して献上し宮廷詩人とまで云はれた野口先生が、引き續き斯うして東京市中の各貧民窟を廻り歩いて童謡會にも行くことの出来ない貧しい家の子供さん達に歌つて聞かせるといふことは、野口先生でなければ到底出来ないことであります。尚、當夜は話術研究會の八木先生も来て野口先生に助力をされました。
▽浦和公會堂童謡會(埼玉縣浦和町) 六月十八日午後一時から田舎詩人、社主催の第一會童謡と民謡との講演會が浦和公會堂で開かれました。渡邊波光、藤森秀夫、霜田史光の先生方の民謡のお話がつつて、野口先生が童謡のお話と自作童謡とを歌ひました。小學校の先生方と師範學校の生徒さん達が百數十名見られて随分盛會でした。



自由畫選評

山本 鼎

△此頃集る畫にはなかく、良いのがある。一生懸命になつてモチアを描き現さうとして居るのがある。モチアとは畫家の間でよく用ひられる言葉で描かうとする物。例へば景色なら景色がモチア、土びんならば土びんが其の畫のモチアなのです。かうして各人の眼が活きてゆき、感覺が敏くなつてゆき、認識が深くなつてゆき、風情、形、色、調子、構成等に對する理解が密になつてゆき、美的價値に對する智慧が肥えてゆくでせう。例によつて、選拔畫を批評しませう。
△前濱正子(七ツ)さんの「私」といふ畫、のびのびと、はつきりして居て佳い氣持です。これでもつと、正子さんが自分の眼には異なる種類のものを描くと思ひます。
△福田ハツ子さんの「りんご」の寫生よく出来て居ます。色もいし、調子もよるしい。併し、なるべくつと大きな紙に描くといひで

すれ。あれだけのものをながき列ではこせつ事がちでいけません。こせつ事、いちぢける事は美術には大禁物です。
△慶徳宏君の「床の間」。物を落つて描き現してあつてよる。
△不破義幹君の「家から見た初夏の景色」。遠者の描寫です。併し、面の觀察(すべての立體は面で組織されて居る。面は種々なる濃淡をつつて居る)から物の堆積、遠近などの眞相を知り、そして其の感じを現すといふと思ひます。それが畫に奥行を與へる筈です。△だからか作者不明の「つばめのす」は可愛い好ましい畫です。
△吉屋博君の「夜の自分」はなかく、深刻に描かうとして居ます。面の作る色合なども見、顔の癖なども明瞭に出さうとして居ます。缺點は明りなつてた面にだけに骨を折つて、影になつた面はまるで、其處になんの描さうとする要求もなく、たゞ一調子にのりつぷされてある事です。パツクも全くむちやです。顔が、たゞクレオンの黒い手組の線で圍まれて居るにすぎません。
それで折角に出来た寫生畫もグロテスクになりなつた。グロテスクな寫象するのはいけりけれど、描き方のためには、つまり未熟なためにグロテスクになるのでは駄目です。――落着いて見、落つて描き表して下さい。(六月十三日)
(グロテスクといふのは奇怪とか奇を好むとかといふ意味です。記者)

新しく出た本

◆よわい子供(ワローグア作) ロシアの名高い小説家ワローグアの童話を新たに集めたものです。或る童話雜誌に掲載された讀者から大歡迎をうけたのも二三ございませう。金色の柱、丸い石の冒險、よわい子供、い、香りのする名前、ランデイヤなど、面白い童話二十七篇。初版賣切れて再版漸く出来ました。四六判二七九頁、定價壹圓、東京神田區表神保町、崇文堂發行。
◆豆人形(小寺菊子氏著) 現代創作童話叢書の第二編です。前月號に紹介した第一編「笛を吹く天人」を讀まれた皆様は、この第二編「豆人形」に至つて、ほんたうに優れた一粒選りの童話叢書であることに氣付きになると信じます。雪姫の衣裳、庭の天狗、ペリコの話、など十篇。四六判二七頁、定價壹圓、東京神田區内幸町一ノ五、眞珠書房發行。
◆二人やんちゃん物語(佐々木邦著) 著者は面白いお話ばかりを講くので有名です。二人のやんちゃんやんが、お父様とお母様の旅行にお出掛けになつた後で、どんなにたづらなして叔父様を閉口させたでせうか。二人のやんちゃん、外四篇。(四六判箱入二二二頁、定價九拾錢、東京神田區裏神保町六、三徳社發行)
◆小さな鳩 田山花袋氏著。『靜雄の生れたころは、前に沼のある平らな丘のやうな土地でした。靜雄の家の側側からは、その

幼年詩選後に

若山牧水

みんなで五百人位の人幼年詩が今度は集り... 思ったのを選びましたのが最幼七十二人分... 発表することにし、残りなば掲載外佳作と... 推薦した宮澤たけさんのは何の變つた事... 歌ですが、いかにもその心がはつきりと力強...

綴方を選んで感じた事

今月は相當にいゝ作が集りました。この二三ヶ月での佳作の多い月です。今月選をしてゐながら先づ感じた事は、みなさんもう綴方はどういふ風に書かればならぬかといふ事は殆ど知らない人がない位になつて居るといふ事でした。つまり綴方の一年級はもう卒業して居られるのです。今度は二年生になつたのですからどう書いて見せぬか、綴方が出て来たら知らなければいけません。それに就ては私も追々と機を見てお話ししますが、すぐれた綴方を讀んで考へて見る事が一番早わかりがしてゐる事だと思ひます。

酒がよく見えました。朝日がキラ／＼と映つたり、夕日がベニのやうにあかくその招を染めたり... 純真な、そして興味を溢れた生活を書いたものです。...

少女對話集

少女對話集が随分数多く出て居りますが、この本だけは特に皆様へお薦めしたいものです。方々の學校の同窓會や記念日に餘興として演ぜられて大喝采を博し、また有樂座の子供で上演して好評を得たものなど、十二篇收めてあります。...

赤彦童話集

赤彦童話集(鳥木赤彦氏著) 著者は特色ある童話作家です。元來素朴なことが此上もなく好きな人で、本の内容、體裁、すべて夢の香に満ちた氣品の高い、細く純朴なものです。...

姫百合小百合

姫百合小百合(萬原 陶氏著) 此の本はおもに女學校の人達に讀んで戴くために書かれたもので、日本の少女はあまり早くに大人のをれをする爲め天徳のやうな清い心を失くして仕舞ふことはほんとうに淋しいことです。...

るあたりが大變上手に書いてゐました。また松本道保さんの「八田先生の死」にはふいの悲しみにあつた時の心持がよく出てゐました。かういふ出来事は誰でも深く感じる事であるから割合に書きやすいとも云へるが、死に角、短い文の間に先生を突然に失つた生徒たちの驚きと悲しみとそれから恐ろしが、十分にいつかり書いてゐました。

方ばかりでしたのでどれなとつたらいかに就ては迷ひましたが、越智イセヨさんの「のどがいたかつた時」をとりました。どこかいつて特に優れたところは見られませんが、少しのいつぱりもなく、ごくありのままに述べたところが心持ちよく讀まれました。...

野口先生講演日程

- ▽明治會館(東京神田) 七月十日
▽鹽山校(山梨縣鹽山町) 七月十五日
▽機山館(甲府市舊城内) 七月十六日
▽女子音樂園(東京澁谷) 八月一日

した。大きくなつた者の悲しみをしみ／＼思はせました。
▽栗田米三さんの「蛙」は痛快なところのある作でした。快活な無邪氣な米三君が想像されます。蛙たちも、君にあつてはたまらないと苦笑してゐます。
▽押田義行さんの「汽車の窓より」の中では終りの方で夕陽の景色をみた處が非常によく書いてゐました。

少年少女童話募集

前から少年少女の自作童話を募集いたしてをりました。八月號からいゝ作のある時に、毎號出す事にきめて、新たにその欄をつくりました。奮つて御投稿下さい。...

いものでしたから。
▽若柳小學校の瑞草さんの「地震」竹内ミヨさんの「かかし」黒須正枝さんの「かかし」山口さくさんの「まつり」など何れも相當の出来でした。中でも「かかし」はやさしい氣持のよく出た作です。
▽京都三重小學校の澁谷文明さんの「妹とお母様」の中では、妹がお母さんに叱られて涙をこぼすあたりがきはだつてよく書いてゐま

した。大きくなつた者の悲しみをしみ／＼思はせました。
▽栗田米三さんの「蛙」は痛快なところのある作でした。快活な無邪氣な米三君が想像されます。蛙たちも、君にあつてはたまらないと苦笑してゐます。
▽押田義行さんの「汽車の窓より」の中では終りの方で夕陽の景色をみた處が非常によく書いてゐました。

淺草童謡研究会に就て

淺草千東小 青柳茂晴

可愛い少年少女さん達が朝に晩に歌った童謡は遂に各地の小學校に入つて行なきました。學校の先生方は今熱心に童謡を御研究になつて澤山の會が出来ました。淺草童謡研究会は青柳先生が中心となつて出来たもので、東京での最も盛んな研究会です。本誌の野口先生は顧問として毎月講演されます。

記者

金の星

誌友募集

「金の星」の誌友には、いろいろの特典が御座います。今や月々非常な勢で増加して居ります。誌友規則は金の船社宛にお申込み下さいますればすぐお送りいたします。奮つておはひり下さい。

ないでせうか。わが淺草區は、東京市内でも一番よく下町の氣風を代表する場所でありました。そこに生れた多くの兒童が生れたまゝの純な美しい心も、その周囲の影響によつて、悪化されつゝあるのを實際に目撃してゐる私達は、どうしても黙つて居ることが出来ませんでした。私達の教へる子は、私達によつて救はれねばなりません。溺れんとする兒童の心を救ひあげて、更に

賑へさんとする、それが淺草童謡研究会の生れた大きな目的であります。私達と共に兒童教育に従事する三十余名のお方々がこの研究会の中心となつて、野口雨情、上沼、新富士校長の兩先生を顧問として、毎月一回つづ千東小學校でこの會が開かれてをります。

(六月二十日)

岡本 歸一

▽愛讀者の方々からいろいろ御便りを頂いてありますが只今大變忙しいので御返事も差し上げません。御許下さい。何れ暇が少しでも出来ましたら書きませう。

▽自由黨を私宛で送つて下さる方もありますが、應募でしたらどうぞ金の船社の方へ御送り下さい。山本鼎先生が親切に見て下さいます事になつてゐます。

▽黒岩静代さん、繪はがきが届きましたか、まだでたら一寸御知らせ下さい。

鸚鵡の手帖

もいふのでせうか。いくら描いても、足りないので、さう仰しやつて先生は頭が痛いといつて、たゞいてをられました。



編輯室より

- △ふろがわく(小田マヌエ) △酒屋(中西昌夫) △僕の好きな一郎(島居賢三) △時計(村澤京) △朝(佐々木友治)
- ▽自由黨掲載外佳作 △自考(藤田順子) △ふすとおちわん(本間とし子) △僕の妹(中島雅男) △私(小倉熊之) △田嶋子さんが繪を描いてゐるよ(船橋健一) △片岡村(高知尾義博) △お幸やん(小川歌子) △岡村君(大野瀧) △はくろの先生(黒田榮) △高宮文吉君(片岡美穂) △今治市の近景(近本敏夫)
- △インキ瓶とペン(藤原カツ) △庭から(高木しげ子) △鳥居(渡邊實) △窓の静物(石井玉太郎) △庭(柿本千吉) △庭の石とらる(渡邊清造) △不破君が机にもたれて書かれてゐる所(藤野忠) △校長先生(神崎實) △キューヒー(牧野忠之) △人物(佐藤アツコ)
- ▼金の星誌友(和歌山) 前田廣治君 ○東京 稲木陸郎君 ○美城 清水二郎君 ○東京 北澤ふじ子君 ○千葉 山崎和興君 ○東京 石山正治君 ○三重 不破義幹君 ○廣島 牧野眞砂子君 ○大阪 大島虎之助君 ○東京 恩田銀藏君 ○千葉 染谷秋月君 ○東京 小林登君 ○愛知 宮島鈴枝君 ○東京 筒井千枝子君 ○長野 宮崎通郎君 ○東京 江口雄一郎君 ○北海道 中村太郎君 ○大阪 白江好郎君 ○栃木 菊地良吉君 ○宮崎 千葉新一君 ○東京 ベアン會 ○長野 湯本正雄君 ○栃木 安田壽衛君 ○愛知 彌富小學校 ○東京 米山星二郎君 ○栃木 田中良泉君 ○東京 鈴木秀男君 ○新潟 大久保貞君(以下次號)

- △迷子雀(和歌月誓志) △とかけの盆踊り(飯塚みよし) △赤人形(淺井千列) △木の葉(土井繁子) △雨の降る夜(廣岡喜代子) △庭の樫(中本正信) △春が来た(細田豊) △蟹(秋山映) △夏の雲(中すみれ) △いじわる北風(石井重男) △山吹(布利橋兼雄) △なしの花(十河アヤコ) △用水(栗野福三) △タマキ(佐野七郎) △心(瑞草) △玉ちゃん(今泉忠藏) △コシヨ雪(佐々木友治)
- ▼幼年詩掲載外佳作 △からかさ(黒河内よし子) △待つた岸本サダ(たけいさん) 栗田米三 △テッポウ(南部ツヤコ) △犬(佐藤喜久代) △お天気雨(市川公) △エントツ(大津ユリエ) △いちご(千葉徳) △見えた(丸田吉人) △つばめ(鈴木正一) △えんとつ(米山光章) △つば(田原よし) △ツバメ(川一枝) △かくれんぼ(山崎公枝) △青きり(齋藤静枝) △學校の小使さん(村上静子) △りごの花(中島フツ) △くわ(飯島かすみ) △おはあさん(鹿兒島美ちる) △かきつばた(末木千鶴子) △星(竹川孝次) △けむり(萩原博)
- △綴方掲載外佳作 △高橋の歸り(廣岡喜代治) △先生におかれた時(高橋久藏) △火車(柏木笑子) △おわれ(竹川久子) △汽車の窓より(押田義行) △お使ひ(村上富美子) △せえのながった時(青井久子) △僕の家の隣りの自動轉車(吉田義久) △遠足(西坂ヒヨ) △水仙(栗村ミヨ) △福壽草(中島フツ) △父さんのないつばくら(竹内ヨミ) △秋の草花(田島英三) △かいこ(辻克己) △蝶々(平澤治イ) △ちしん(相澤光) △山中見物(吉本辨治)



りよだ者讀

△六月九日の新聞に「金の船」の権利争ひ發行權を差押へる前例のない争ひといふ記事がありました。これによつて「金の船」が「金の星」に變つた事がわかりました。齋藤先生はお困りのやうですが、何か變つた事が起りやしないかと心配してゐます。(東京 松井純三)

▲御心配ありがたうございます。「金の星」六月號及び七月號に記してある通り、次第でキソノツツ社と争つてなりますが、私の方は正義で争つてゐるのですから平氣です。(記者)

△「金の船」から「金の星」折角なじみの名前が變つたので残念ですけど、出世したと思へばいいです。なぜつて、地上のものが天のものに代つたんですもの。「金の星」の輝かんとことを祈ります。(日向 千葉新一郎)

△野口先生、私は先生の童話にはいつも敬服してゐますが、殊に今月の「子守唄」は最も氣に入りました。先生は實に日本童話界の第一人者です。先生は歴史に残る方だと思つてゐます。御自重下さい。(信州 一詞澤)

△記者先生、此頃はするぶん書いてですね。僕の方は夜になると、平和博のサーチライトが空を照してキレイです。今月の十七、八日は

臺灣花火があがつてたいさうきれいだそうです。先生、お暇を見て是非お遊びにいらつしやいませんか。(東京 上村賢三)

▲ありがたうございます。都合がよろしかったらお邪魔に参ります。(記者)

△沖野先生、「父戀し」はどうなるので御坐いますか。私はあの話が好きです。岡本先生の特筆畫とも出来上る「父戀し」は、どんなによい本になるでせう。毎月楽しんで待つてゐます。私は「金の星」の益々發展して行くのが非常に嬉しく、どこでも愛讀をつづけたいと思つてゐます。(茨城 愛讀者)

△弟が身に餘る名譽の「十五夜お月さん」を戴き僕が兄として改めてお禮申し上げます。ついでに此の様な名譽な物を戴く事は以後ないと思ひますが、若しありましたら、今度は自宅宛にして下さい。學校では大變本が汚れますから……。(長野 栗田敬)

△私は初めて誌友になりました。愛する「金の星」を近くの文房具屋で求めるより、月々郵便局から配達されるのは、どの位心嬉しいこととせう。「郵便」……集配人がかう叫んだ時、屹度自分の心は躍ることとせう。そしてそれが「金の星」であつた時、自分のハートはチャムと鳴るでせう。自分の本棚を賑はす「金の星」は何の位價値あるでせう。金は「船」が再生して、「金の星」心よい名です。自分は喜んで迎へます。(東京 稻木陸郎)

△「金の星」に物は付、冠り付のやうなものが出たらしいんだ。おれはそんなものはまつ平だ。それこそ「金の星」が、金平靴か泥の

だんごにかけるわい！(長野 牧夫)

△「金の星」となつてキソノツツ社から獨立された事を心からお祝ひします。私は主幹の齋藤氏とキソノツツ社と關係をよく知つてゐるので今度の獨立を心から祝ひます。(山本生)

△本屋の前を通りますと、「金の星」がまた「金の船」とかいて見えて来るとも申しませうから、取上げて見ますと、岡本先生のみや、「家なき子」などの續きがなく、みにくいみや、つまらないお話にがはつてゐます。そして「キソノツツ社」發行としてあつて、「鳥崎藤村、有島生馬監修」とまで書いてあります。新聞に出て居たのと違つてゐますから買はずに歸りました。本當に改題して、家なき子などは、紙面のつがふでせうからなかつたのでせうか、おかげをいいたします。(栃木 高橋せつ)

▲「金の星」は決して改題いたしません。キソノツツ社から名前だけ「金の船」といふのが出ましたが、以前の「金の船」とは似つかない雑誌です。本當の「金の船」は「金の星」と變つたと思つて下さい。大丈夫です。(記者)

△私は沖野先生の御仕事に最も尊敬を拂ひます。今度「金の星」の講師として朝鮮へお出でになり各地で講演なされてゐる事を知つて私は涙のこぼれる程嬉し氣が致します。私も子供達のために努力いたしてゐる者の一人ですが、先生のやうな方があつて子供達の爲めに盡しておる事な思ふと、何ともいへない感謝を感じます。(東京 吉川正雄)

△たゞ今は結構なる賞品ありがたう存じました。お父さんもお母さんも兄さんも大變喜ん

てくれました。私も嬉しくて、心がなぞり出す様です。ほんとにありがたう存じました。お父さんつては「百圓もらつたよりうれいだらうれい」なんておっしゃるんです。これからあのレターペーパーで、方々お手紙を出すのです。記者先生、私ほうれしくてうれしくてこれ以上かけません。(京都 森澤福子)

△近頃信州飯田でも野口先生の「鶴さん」や「七ツの子」などが一番語られてゐます。僕は嬉しくて、うたまりません。(長野 山田明)

△沖野先生の「父戀し」は、面白くなつて行きます。山六爺さんは少し紙が悪かつたが「父戀し」は紙もよいかかりか版が大きいから大へん心持がよいです。終りに先生書方を募集して下さい。(神戸 高橋ひさし)

△ラダシノスキナ

オホキケナツテモ

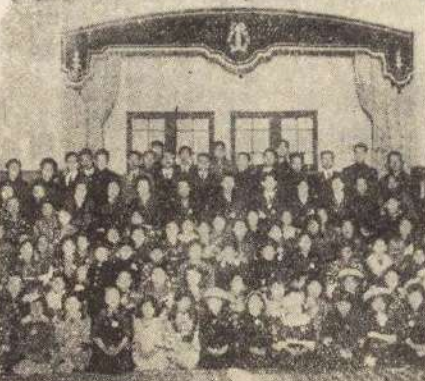
金ノ星

トシヲトツテモ

イツマデマツテモ

金ノ星

△四月號の本欄へ私の憶懐してゐる伊藤温子さんの寫眞が出てゐる非常に嬉しく思ひました。然し私は、あの寫眞は眞實の伊藤さんではないと思ひます。私は伊藤さんの短文を秀才文壇、中央文壇()で(それも四五年前頃の)見ました。あの寫眞は幾つ時の寫眞ですか? 憶懐してゐる貴方にこんな無禮な言葉を呈する事をお許し下さい。(無名氏)



△初夏らしい氣分になつてまゐりました。私のおのまづい船が入選したので、嬉しさと驚きとでほんたうにどうお禮を云つていゝかわかりません。あの美しい「青い鳥」とレターペーパーを下さい。尚更お禮の云ひやうがございせん。今日六月號が来ました。ほん

(仙臺に於ける野口先生招待祝會)

とくに「金の星」の襟に美しいのぼり出てゐます。岡本館一先生の船が御引立ちます。此の月の表紙と云ひトビラと云ひ船と云ひ、申分のない美しい繪でした。また「泣き」天使の夜の空を飛んでゐる船はほんとうに美

しい繪でした。これからの「金の星」を輝して日本は勿論世界の果まで照しませう。(神戸 淀川長治)

△常に子供の國の燈明臺たる「金の星」の發展をお喜び致します。毎號特色ある童話を載せてゐられる内藤聖雄氏の御安否を御伺ひします。「炬火」誌上で見る同氏の詩と共に懐き物でした。御長患の由、一日も早く御健康御恢復をお待ちします。投書家の作では伊藤氏のものなぞ殊に光つてゐる様に存じます。見えなくなつた鴉の語なんぞ、再讀指く能はざる感がありました。(鹿児島 久保一馬)

△「金の船」との件は新聞で承りました。「金の船」が「金の星」と改題せねばならなかつたのを惜しみます。解決がつき次第「金の船」にかへることは思ひますが、早く解決のつくやう祈つてゐます。(埼玉 平塚美奈吉)

△揺り揺りお伽の金の船

帆は薔薇色に白銀の刺繍

微風含み浪たてず

沖へ沖へ進み行く

大きいお星様水平線に

船は星に着いた

金の星共は大きく輝く

金の帆柱打倒し橋は懸けられた

金の三角船に金の香

お伽の小人数知れず

金の船より流るる

金の帆柱渡り行く

(一愛讀者)

△記者先生、お變りがございせんか。私の童話を尊い誌上におのせ下さいませ。有りがたうございました。(長野 水野成三)

懸賞創作募集

自由少年詩集 山本 鼎先生選
 幼年詩集 若山 牧水先生選
 綴方 編輯部選

〔意注〕 課題は何でもかまひません。諸君の日々見たり、感じたりすることから、諸君の好きなものを諸君の好きなやうに畫なり、詩なり、文なりにして書いてください。一人で何題出してもかまひませんが、姓名は、學校や學年(または住所と年齢)ともおとさないやうにしてください。用紙は自由畫になるだけ畫用紙に、幼年詩や綴方になるだけ原稿用紙(または牛紙)に書いてください。よく出来た方には「金の星」特製の賞品を差上げます。次號締切は七月廿八日(その以後は次號へ廻る)發表は九月號、宛名は東京市外田端三百五十一番地金の船社

一船讀者の創作

童話 齋藤 佐次郎 先生選
 童謡 野口 雨情 先生選

〔意注〕 童話は二十字語二百行以内、童謡は二十行以内、優秀な作品は「推薦」または「特選」として發表いたします。推薦の場合は童話には五圓、童謡には二圓づつ、特選の場合は童話には拾圓、童謡には五圓づつ賞金として呈します。但し少年少女の創作童話にして「入選」の場合は、金の星賞を呈します。締切、發表、宛名は少年少女の創作と同じです。原稿には必ず住所姓名を記して下さい。原稿はお返しいたしません。

定價 壹冊 參拾錢 送料 壹錢
 三ヶ月分三冊(送料共)九拾錢
 半年分六冊(送料共)壹圓八拾錢
 壹年分十二冊(送料共)參圓六十錢
 但し四月號九月號は特別號で廿五錢新
 年號は四十錢ですから、御註文の節は
 この分だけ必ず加へてお拂込み下さい
 振替口座東京五九五九六番

〔送〕 御註文は必ず前金で御拂込み下さい
 金 送金は振替が一番便利で御座います
 の 切手代用は(壹錢切手)一割増しです
 注 第何巻何號よりと書いてください
 意 住所姓名はつきり書いてください
 廣告料は御照會次第お答へ致します

大正十一年七月六日印刷納本(毎月一回)
 大正十一年八月一日發行(行一日發行)

編輯兼發行人 齋藤 佐次郎
 東京市小石川久野町百八番地
 印刷人 大橋 光吉
 東京市小石川久野町百八番地
 印刷所 株式會社博文館印刷所
 東京市外田端三百五十一番地
 發行所 金の船社
 振替口座東京五九五九六番
 電話小石川五三三八七番



熊田先生

署へ行つて、その報告を聞いて歸つて、式江母子に話しました。
 琉球の沿岸にはそんな舟も見えなければ、商造らしい人もおなはいといふ報告でした。或は臺灣へ行つ

手紙で何度も／＼問合せてみたが、どうしても商造の行方が解らないので、式江は熊田先生に頼んで、警察の方から日本全国の津々浦々を調べて貰ふ事に致しました。で、熊田先生は毎日のやうに警察

てゐるかも知れないといふので、その方面を調べて貰ひました。所が、淡水港にも基隆にも臺東にも、恆春にも、高雄にも、安平港にも、そんな舟は見えないといふ通知でした。では、朝鮮に行つたのかも知れないといふので、また朝鮮の方を警察の手から調べて貰ひましたが、矢張り商造らしい人も、そんな舟に似たものもありませんでした。

商造が家を出てから、もう十月餘りになるが、どうしても在所が解らないので、式江の心では、もう二度と商造の顔を見る事は出来ないものと思ひ定めてゐました。で、これから先、弱い女の手一つで、二人の子供を育て上げねばならないと決心して、毎日一生懸命に働いてゐました。

冷たい風が濱の並木松を吹く頃でした。或日の夕方、暫く顔を見せなかつた熊田先生が周章みはてで入つて來ました。

「今晚は。」と言ふ聲を聞くと同時に明次は嬉しさうに、

「熊田先生！」と言ひながら入口の方へ走つて行きました。

「先生！ 私、此間の日曜學校は休みましたのよ。もう舊約のお話は何所まで？」伊吹子も懐かしさうに、熊田先生の顔を見上げました。

「能く入らっしゃいますし、大變御無沙汰を致しまして……」

式江は丁寧に頭を下げました。

暫く黙つて上り柵かざしに腰をかけてゐた熊田先生は、

「奥様！」と言つて、ちつと式江の顔を覗き込みました。

「はい、何でございますか？」と言つた式江は前垂て濡手を拭きながら、熊田先生から三四尺離れて立つて居りました。

「奥様、僕は近いうちに、此方を辭職じしきして朝鮮の方へ參る事になりました。」

熊田先生はさう言つて、伊吹子と明次とを振り返りながら、
「伊吹ちゃん、明ちゃん、僕はもう海を渡つて朝鮮へ行きますよ。折角ネ、面
白い舊約のお話をしかけたのですけど……」と言ひました。

「嫌よ、先生！」と言つて、明次は熊田先生の肩の所に縋りつきました。

「先生、本當？ もう直き行らツしやるの？」

伊吹子は信じられないやうに、繰返して尋ねました。

「先ア、急に御轉任でございますか。子供達がこんなにお慕ひ申してゐますの
に……」式江は悲しさうに聲を顫はせながら言ひました。

「えエ、私も此所に長く居たいのでございますが、今日宣教師の方から手紙が
参りまして、朝鮮の龍山といふ所へ轉任する事になりました。で、早速明後日
出立する事に致しました。」

「明後日？ そんなに急に？」

「はい、私はもう誰にも知らさないで、黙つて出立しようと思ひます。」

「どうして？ 教會から送別會も何もなさらないのでございますか。」

「えエ、知らせますと、そんな事をせられますから、いつそ黙つて飛出さうと
思ひます。僕は氣が弱いから、送別會と言ふ言葉を聞くだけでも悲しくなりま
すので……」熊田先生は肩に取纏つてゐる明次の右の手を堅く握りながら、身
體を前後に揺ぶりました。

「行つちや嫌ですよ。先生！ いつまでもいつまでも、此所に居らツしやいな。
僕、先生が居なくなりやア、詰らないんだもの。」

明次は熊田先生の肩に凭れながら、甘へるやうに言ひました。

「本當にネ、先生が居らツしやらなくなりますと、これから先、私達は……」

言ひかけて式江は、悲しさうに俯向いてしまひました。

四人は暫くの間黙つて俯向いてゐましたが、式江は偶ツと想ひ出したやうに、

「先生！」と呼びかけました。

「え、何でございます？」熊田先生も驚いたやうに頭を上げました。

「朝鮮へ行らツしやるなら、誠にすみませんが……」

式江がマダ半分も言ひ終らないうちに、熊田先生は直ぐ、

「解りました、解りました。僕は先づ釜山へ着いて、それから馬山、木浦、群山、仁川と、港々を一通り詳しく調べてみます。宣教師の方へは、一ヶ月後に龍山の教會へ赴任するといふ手紙を出して置きましたから、明後日此所を出立して、朝鮮の沿岸を、ズツと一巡して見ます。何だか今度僕が急に轉任するやうになつたのは、商造さんを探ね出す爲めの轉任のやうに思はれてならないの

です。」と言つて、熊田先生は淋しく笑ひました。

「ぢや、先生は、お父様を尋ねに行つて下さるの？ 僕も一緒に行きたいなア！」

明次はまた熊田先生の肩に負さりながら甘へました。

「朝鮮でネ、お父様にお目にかゝつたなら、直ぐに明ちゃんに手紙を出して上げるから、其時は、おツ母さんと御一緒に入らツしやい。そしたら、お父様と一緒に朝鮮を見物致しませう。」

「ちやア、早くお父様に會つて下さいよ。」明次は嬉しさうに、鼻をクン／＼小犬のやうに鳴らしました。

熊田先生の出立する朝、式江は二人の子供をつれて教會の牧師館へ尋ね

て行きました。

「やア、今朝はもうお目にかゝらないで、窃と立たうと思つたのですが……」
言ひながら熊田先生はポケットの時計を出して見ましたが、

「あ、もう五時半だ。これから出なければ丁度一番列車に間に合ひませう？」
と言つて、旅行鞆を提げて玄關へ出て來ました。

「お荷物は何うなさいました？」 式江は座敷の方を覗き込みながら言ひました。
「荷物は昨晩悉皆、運送店へ送りました。そして今朝まで、此の毛布を被つて
寝たのです。さ、早く出ませう。愚圖々々すれば、皆なが見送りに來ますから。」

熊田先生は周章で外へ出ました。式江は無理にその鞆を奪ふやうにして後につ
いて行きました。伊吹子と明次は兩の手に縋りながら、朝鮮に行つて、いつ
頃お父様に會ふのか、お父様に遭つたら直ぐ手紙を下さいなどといろ／＼の事

を尋ねました。

秋の半の涼しい朝風は海邊の黄ばんだ雑木の葉を揺り動かしながら、氣持よ
く吹いてゐました。

海の蒼い波に洗はれて出た、紅い／＼旭に照されて、白く光つてゐる製板所
の、亞鉛屋根から、何本も何本も、高く聳えてゐる黒い煙突は、マダ朝の初聲
を上げないで、寒さうに黙つて立つてゐました。

鋸屑を敷いた細い通りを歩く時も、伊吹子と明次は熊田先生の手を離しませ
んでした。

材木を運ぶために敷いてある、狭いレールの上を歩きながら、明次は頼りに
朝鮮の事を訊きました。

四人はやがて小い停車場へ着きましたが、驛の中には札を賣る人がたつた一

人居るツきりて、誰一人その近所に居ませんでした。

「私共も勝浦まで、お見送り致すと宜しいのでございますが……」

改札口の所に立つてゐた式江は、小聲でさう言ひながら丁寧に頭を下げました。

「どう致しまして……先ア、お大事になさいます。お子さん達にもお氣をつけなさいますやうに……」

熊田先生は顫へ聲でさう言ひました。其時、丁度汽笛が鳴つたので、驛夫が改札口へ出て來ました。

熊田先生は構内へ入りました。そして柵の外から手を伸して、明次の頭を撫でながら、「明ちゃん、能うく勉強なさいよ。」と言ひました。

「先生！」と言つたまゝ、伊吹子は、眼に一杯の涙を溜めて、熊田先生の顔を見

上げました。

其時汽車が轟轟！と、けたましい音を立てながら構内へ入つて來たので、

熊田先生は、「左様なら！」と言つて列車の方へ走つて行きました。

「左様なら……」と小さい聲で言つた式江は、柵の上に半身を乗出すやうにして熊田先生の後姿を見送りました。

停つたと思ふと、直ぐ汽車は動き出しました。窓の硝子戸硝子戸が開いたと思ふと、其所から熊田先生の顔が現はれました。

「左様なら！」と先生が、も一度大きな聲で言ひました時、もう汽車は二三間右の方へ動いてゐました。

「此方へ、こつちへ？」と云ひながら明次は、右手の荷物の置場の方へ走りました。伊吹子も式江も一緒に明次の行く方へ走りました。

「左様なら……熊田先生？」と伊吹子は細い透通つた聲で呼びました。式江は何度も頭を下げました。

「ハレルヤ！」と明次が大きな聲で呼びますと、熊田先生も帽子を振りながら、「ハレルヤ！」と答へました。けれども其時はもう、兩方の間は三十間ばかり隔たつてゐました。

やがて汽車は松原の中へ入つて行つたので、先生の顔も帽子も見えなくなりました。

「熊田先生は、もう歸つて來ないのネ。」

伊吹子はおツ母さんの袂に縋りながら、泣聲で問ひました。

「さうネ、もう此町へは二度と入らツしやらないでせう。」

式江は涙を拭きながらさう言つて、俯向いてしまひました。

「お母アさま、心配は無いのよ。先生はネ、大きな汽船に乗つて行らツしやるんだから。」明次は慰め顔に申しました。

「お母アさまはネ、お舟の事を心配して居るのぢやア無いの、熊田先生がネ、朝鮮に行らしツて、どうぞ、家のお父様に遭つて下されば宜いがと思つて……」

式江は明次の手を堅く握りながら、踏切を越えて、製板所の方へ靜かに歩いて行きました。

「お父様の居なさる所は判らないんでせう？」

伊吹子はおツ母さんの袖に縋りながら言ひました。

「解らないのよ。だけどネ、神様は、屹度々々お父様と熊田先生とを遣はせて下さいますよ。」式江は伊吹子を諭すやうに言ひました。

「お父様が朝鮮に居て下されば宜いのにネ。熊田先生からお手紙を下すツたら

ば、お母ア様もあたし達と一緒にやらう？ 朝鮮まで……」
伊吹子は少々、快活な聲で言ひました。
「お父様がお出でつて言つて下すつたなら、明坊も伊吹ちゃんも一緒に行きませうネ。」式江ももう其時は泣いてあませんでした。

不意にポウーツ！ と一つの汽笛が鳴り出したので、四人は思はず一度に振り返つて、黒い煙を噴出す高い煙突を見上げました。續いて幾つもの汽笛が吾一に、ポウー、ポウー、ヒイーと鳴り初めました。

「さア、もう六時です。疾く歸つて、御飯にしませう。」

式江は前に立つて、さつさと歩き出しました。工場の傍を通り抜けて、穂の項垂れた稲田の傍まで来た時、式江は後を振向いて、

「明ちゃん、(ハレルヤ)ツて何の事？」と問ひました。明次はにつこり笑ひながら、

「僕、知らないんだ。」と言つてかぶりをふりました。

「だツて明ちゃんは、最前熊田先生にお別れする時、ハレルヤ……ツて呼んだぢやアないの？」

「知らないんだよ。でもネ、僕日曜學校で聞いたんだよ。」

「どんな事を？」

「教會の先生が、遠い所へ行らツしやる時、日曜學校の生徒が大勢停車場へ送つて行つて、皆なて萬歳の代りに、ハレルヤ、ハレルヤ、ツて呼んだ話を……」

「さう？ ハレルヤツて萬歳といふ事か知ら？ 伊吹ちゃんは知つてる？」

「知らないワ。だけどネ、善い言葉なんでせう。神様よお恵み下さいツていふ

おぼたれ撰 方様子のおとる 育教と樂娛の材料

巖谷小波著 (文部省認定通俗圖書) 四六半紙全三冊 定價各八十三錢 送料各六十錢
オトギウタ
 同氏著 菊半紙全五冊 定價各六十四錢 送料各四十錢
お伽手工畫
 同氏著 四六半紙廿五冊 定價各二十五錢 送料各四錢
日本の畫
 同氏著 桃太郎▽舌切雀▽花映翁▽勝々山▽狼麿合戦▽文福茶釜▽一寸法師▽擲取▽浦島▽以上ひらがな文▽天神様▽清正▽楠公▽爲朝▽牛若丸▽曾我兄弟▽兵隊ゴッコ▽海軍▽敵宮メダリ▽山メグリ▽車と舟▽オ馬ノ稽古▽水アソビ▽輕業▽動物園▽アヒルト▽鶴▽虫▽世界▽ボチノ藝▽クシ▽猫▽世界▽狼▽牛▽熊▽象▽遊ビ圖 (以上カタカナ文)
 全入長方形 一冊三十錢 送料十二錢
すけつちの子供四十八景
 同氏著 桃のつぼみ (文部省認定通俗圖書) 四六半紙全五冊 定價各四十四錢 送料各四十錢
日の丸お伽文庫
 第一集 兎の軍使 第二集 桃の子唄者 第三集 龜の命 第四集 虎の山神 第五集 お伽大會

鍋井克之著 (文部省認定通俗圖書) 四六半紙全一冊 定價八十五錢 送料八十五錢
子供の畫手本
 石川理學博士共著 (文部省認定通俗圖書) 四六半紙全一冊 定價八十五錢 送料八十五錢
動物畫
 同氏著 (文部省認定通俗圖書) 四六半紙全一冊 定價八十五錢 送料八十五錢
孝子畫
 同氏著 (文部省認定通俗圖書) 四六半紙全一冊 定價八十五錢 送料八十五錢
 養老の巻 白菊の巻
 内海月杖著 (文部省認定通俗圖書) 四六半紙全一冊 定價八十五錢 送料八十五錢
家庭日本歴史
 同氏著 (文部省認定通俗圖書) 四六半紙全一冊 定價八十五錢 送料八十五錢
動物顔合せ
 同氏著 (文部省認定通俗圖書) 四六半紙全一冊 定價八十五錢 送料八十五錢
お伽レコード
 同氏著 (文部省認定通俗圖書) 四六半紙全一冊 定價八十五錢 送料八十五錢
源平チエクラブ
 同氏著 (文部省認定通俗圖書) 四六半紙全一冊 定價八十五錢 送料八十五錢
おにこつこ
 同氏著 (文部省認定通俗圖書) 四六半紙全一冊 定價八十五錢 送料八十五錢
子供博覽會
 同氏著 (文部省認定通俗圖書) 四六半紙全一冊 定價八十五錢 送料八十五錢

東京 神田 駿河台 下臺 (第一八二東京事務所)
 大阪 東區 區 四勞 (第七七大阪事務所)
 京都 三條 通 (第三七一大阪事務所)
 東京 日本橋 通 (第五五東京事務所)
 東京 本橋 通 (第五五東京事務所)
 東京 東區 區 四勞 (第七七大阪事務所)
 東京 神田 駿河台 下臺 (第一八二東京事務所)

丸善株式會社

—— 生 田 集 ——

やうな意味でせう？」

「伊吹ちゃん、知らないくせに、あんな事言つてらア。」と笑ふやうに言つた明次は、大きな聲を張上げて、

ハレルヤ ハレルヤ ハレルヤ

たゝかひ終りて

今歸らせ給ふ

主をばほめたまへ ハレルヤ

と歌ひました。伊吹子も一緒に調子を合せて歌ひました。

二人が歌ひながら、おツ母さんの後について歩いてみると、石橋の所から、

「おうい、明坊！ 伊吹ちゃん！ えらい朝ツばらから元氣が宜いなア。」と、

聲をかけたのは、暫く見えなかつた作爺さんでした。

K2A-21

大正十一年六月十三日
大正十一年七月六日印
大正十一年八月一日發行(月一回一頁)

東京 金の船社 發行



夏の玩具には
舟など誠によ
う御座います
八九十歳以上
各種あります
玩具部は四階
です、すぐ隣り
が運動部

◆魔法やお伽噺や童話や
その他、少年少女用の繪本
や各種の新書は四階の圖
書部に陳列して御座います
◆海水着や浴衣、浮袋
も各種新着して居ります、
これも四階の小児部に陳列



暑中休暇に
なりました



眠る時には必
ず「腹冷え知
ず」を着なけ
ればなりません
九十五歳以上
三階の小児部
に御座います

◆御旅行を遊ばさる「お
方」に必要な品が、深山取揃
へて御座います、御旅行前
には必ず三誌へ御下下さい

◆ハケツチ、ブツクや繪
具等は四階の文具部に御
座ります、舶來品が最近に新着



暑中に必要な
涼着は一
百三十五歳以
上、その他、夏
らしき小供服
等、新着が澤
山、三階に新
着して居ます

お休み中は、衛生に
注意し、身体を健全
にし、そうしてよく
勉強するが大切です

眞は水の家
と云ふ水車の
玩具です、一
百九十五歳、
その外、砂遊び
用具や種々の
ものが四階に
揃ふて居ます



三越呉服店

◆町河駿京東◆

〈定價金三十錢 送料一錢〉